朝鮮労働党創立
80周年

党創立の理念と精神の下に80年

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
2025

党創立の理念と精神の下に80年

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
2025

目 次

まえがき…… 3

1. パルチザン部隊の「政治委員」…… 5
2. 民主主義の旗の下に団結しよう！…… 18
3. 新しい民主朝鮮建設のために…… 28
4. 労働党になった経緯…… 42
5. 正規軍を建設する日々に…… 50
6. 人民朝鮮の誕生…… 60
7. 人民の国を守って…… 71
8. 伝説のチョンリマを駆って…… 88
9. 並進の道…… 99
10. 党活動における新たな転換…… 109
11. 真の母なる党に…… 117
12. 歴史の渦中で…… 126
13. 人民大衆第一主義を政治理念として…… 139
14. 現実となっている人民の夢…… 150

15. 未来を愛せよ ··························· 162
16. 人民の運命に責任を持って ··················· 174
17. 可能か不可能か ·························· 183
18. 偉大な朝鮮人民万歳！ ····················· 190

むすび ································· 199

まえがき

2025年10月10日は、朝鮮労働党が創立されて80周年になる意義深い日である。

常に人民の先頭に立って人民と共にあらゆる困難を乗り越え、勝利の道のみを歩んできた朝鮮労働党の80年の歴史を、朝鮮人民は感慨深く振り返っている。

朝鮮の革命家たちは、国が解放されて2カ月もならない1945年10月10日、党創立の歴史的偉業を成し遂げた。

このときから祖国と人民の運命には劇的な変化が起こった。

すぐる各年代に政治も経済も国防も自主的に、創造的に建設してわが祖国と人民を栄えある富国強兵へ導いた朝鮮労働党の80年は、現代朝鮮史を自主で輝かせている。

では、朝鮮労働党が歴史の風波の中でもいささかの変色や紆余曲折もなしに、革命的で人民的な性格を固守することができた秘訣はどこにあろうか。

「祖国の自主・独立と人民の自由・幸福のために人民の先頭に立ち、また人民の中に入って常に人民と共に仕事をする党と国家の有能な幹部になれ。

1948年8月」

朝鮮労働党の創立者である偉大な領袖金日成（キムイルソン）主席が中央党

学校（当時）の卒業生に送った激励文である。

党創立の理念と精神が凝縮しているこの命題には、朝鮮労働党がいかに人民の絶対的な支持と信頼を受けることができたか、それに対する回答がある。

長い80年間、朝鮮労働党は党創立の理念と精神をしっかり継承することによって、人民大衆の絶対的な支持と信頼を受ける党、祖国と人民、時代と歴史に対し大きな業績を積み上げた党になることができた。

創立80周年を迎える朝鮮労働党に栄光をささげつつ、本書を発刊する次第である。

1. パルチザン部隊の「政治委員」

1945年8月15日正午、ラジオやスピーカーからは、敗亡を宣言する日本の裕仁天皇の凄絶な涙声がたどたどしく流れ出た。

「……もし戦争を続けるならば、大和民族は必ず滅亡の運命を免れないだろう。そうなると、われわれがいかに王朝とその霊魂に対することができるだろうか。……」

ついに、朝鮮人民に40余年もの間不幸と苦痛のみを強いた暴虐極まりない日本帝国主義が敗亡した。

祖国解放の歴史的偉業の成就により、朝鮮人民の前には新しい社会建設の広い道が開かれた。

しかし、何からどうすべきかは誰も知らなかった。

人民は解放された祖国に一日も早く新しい国が立てられて、自分たちに自由で幸福な生活がもたらされることを望んでいたが、それをいかに実現するかについて正しい解答を与えるところはなかった。

自分こそ「愛国者」だの「指導者」だのと名乗り出たが、人民の望みとは縁遠いたわごとばかり唱えてむしろ大衆の頭を混乱させていた。

こうした中で解放の恩人である金日成主席が1945年9月、静かに祖国に凱旋した。

当時、金日成主席の尊名は、人民の間で絶対的な敬慕と信頼を受け、自分たちの運命と未来を全て委ねられる希望の象徴として知られていた。

人民は主席の凱旋を待ちわびていたが、主席は自身を金日成パルチザン部隊の「政治委員」と紹介した。

歴史的な祖国凱旋を目前にしていたとき、朝鮮人民革命軍の指揮メンバーと解放された祖国における党・国家・武力建設の課題と方途について話を交わしていた主席は、自身を金日成パルチザン部隊の「政治委員」と名乗る考えを打ち明けた。

主席の言葉に皆が反対した。

主席は彼らに、われわれはいつも現実的に考えるべきではないかとして、国の情勢について話した。

当時ソ米両軍の駐屯により、朝鮮半島には、社会主義と資本主義の熾烈な対決の場と化する恐れのある情勢がつくり出されていた。

それに、国が解放されると、どこに隠れていたかも知れない数多くの「愛国者」「革命家」が蜂の群のように現れ、混乱した政局を利用してあらゆる術策を巡らして大衆の人気を集めようとした。

主席はこのような情勢の下で、方途は一つである、統一団結した人民のみが植民地の弱小国であったわが国を強大国に打ち立てることができる、人民を結集させ、彼らの志向と要求を知

らなければならず、そのためにはまず人民の中に入らなければならないと言った。

建国事業が容易でないだろうことを予想できなかったわけではないが、それでも国を取り戻す戦いぐらい困難なことだろうかと考えていた朝鮮人民革命軍の指揮メンバーに、主席はこう強調した。

われわれが国を取り戻す戦いでいつも人民を信じて人民に依拠したから百戦百勝したように、国を打ち立てる闘いの初の歩みもその力に依拠すべきである。その力に依拠して、この地に世界が羨む人民の国を必ず打ち立てなければならない。……

朝鮮人民革命軍の指揮メンバーはその後、祖国に帰ってきて現実を見ながら、主席の言葉の真意をより深く悟るようになった。

まず、建国の基礎である党創立の準備活動から順調にいかなかった。

一日も早く革命の参謀部である党を創立してこそ、朝鮮革命の主体的力量を強化し、新しい祖国の建設を早急に推し進めることができるのに、解放後の朝鮮共産主義運動の実態は混乱を極めていた。

それは主に、分派分子らの分裂策動のためだった。

当時、国内で革命家を自称していた人のうち分派に染まっていない人はあまりいず、それに海外で活動していたえせマルクス

主義者や権力野心家まで加わって、統一的な党創立の実現に複雑さをさらに増幅させていた。

分派分子や地方割拠主義者は、一夜のうちてんでに何らかの「中央」をつくり出したばかりでなく、めいめい一つの地域ずつに居座って分派的地盤を築こうと画策していた。

しかし主席は、自分勝手に振舞う彼らを皆一つの船に乗せる構想を練った。

主席は、長期間の抗日革命闘争で鍛えられた共産主義者を中核とし、国内外の各地方で活動していた共産主義者を網羅して党を創立するという方針を打ち出した。

当時一部の人は、抗日革命闘争に参加した人だけで党を創立しようという意見も出した。

国内外の各地方で活動していた共産主義者を排除し、抗日革命戦争の炎の中で鍛えられた点検ずみの共産主義者だけで党を創立するとしても問題になることは何もなかった。

当時の状況を物語る一つの談話記録がある。

主席が祖国に帰国した後に平壌で初めて会った、当時の平安南道党第1書記(国内革命家)と交わした話である。

……

平安南道党第1書記：われがちに「中央」をつくり出す人々もそうですし、今各道党に居座っている人々も皆同じです。彼らは同志として信じられる人々ではありません。

金日成主席：われわれは彼らを信じて共に手を取り合い、統一的な党中央をつくることにしました。

平安南道党第1書記：私の考えをそのまま申し上げますと、パルチザン出身で党を新しく創立するのが有益だと思います。

金日成主席：われわれは反対です。彼らを信じて団結しようということです。われわれはすでに彼らがつくった党にわれわれの同志を副責任者として派遣しました。

平安南道党第1書記：ならば、彼らを認めるということですか？

金日成主席：そうです。

平安南道党第1書記：理解できません。

金日成主席：われわれが党を別途につくるならば、既存の国内の共産党組織は四分五裂するでしょう。われわれはすでに決めました。

平安南道党第1書記：私の知るところでは、レーニン同志も革命的ボルシェビキ党の純潔性を保つために日和見主義的メンシェビキを除去したようですが……。

金日成主席：ロシア社会民主労働党第6回全ロ代表会議の決定でしょう。われわれは国内共産主義者をメンシェビキと見ておらず、彼らを同志と信じて団結しようとします。

平安南道党第1書記：彼らの関心はただ指導権だけにあります。

金日成主席：われわれは彼らの存在と既得権を認める上で団結を成し遂げるでしょう。

平安南道党第1書記：えっ?!……

……

主席の言葉は直ちに現実となった。

主席は各道党代表会議を招集するようにし、平安南道党にこの会議を準備する具体的な課題を与えた。

そして、数多くの地方党組織の活動家や海外から帰ってくる共産主義者に会って主体的な党創立方針を説明した。

こうした準備に基づいて1945年10月5日、ついに党創立のための予備会議が平壌で行われた。

主席は会議に、金日成パルチザン部隊の「政治委員」として出席した。

平安南道党第1書記が会議を司会した。

「今日、われわれが金日成パルチザン部隊の『政治委員』同志の参加の下に5道(当時)党責任幹部の会合を催したのは、数日後に招集される党創立大会に提出する議題とその議題についての報告を誰に委任し準備させるかという問題を討議するためです。党創立大会では、政治路線と組織路線に関する報告、地方政権及び道党活動の強化に関する報告を行うことになるでしょう。これについて意見があれば提起して下さい」

彼が賛否を問うと、権力争いにのみ執着して錯綜した表情をしていた一部の会議参加者が本性をさらけ出した。

彼らはてんでに自道の代表が報告を行わなければならないと言って場内を騒然とさせた。

見るに見かねて席から立ち上がった平安南道党第1書記がこう言った。

「国内で地下運動ぐらいしながら隠遁していたわれわれにとって、党についての理解は知れたものでしょう。党の政治路線と組織路線に関する報告は、金日成パルチザン部隊の『政治委員』同志が行うべきだと思います」

彼の言葉に場内は静かになった。

姿勢を正す彼らを見回した主席は、予備会議を国内の革命家との虚心坦懐な対話へ導くために和やかな口調で、地方政権及び道党活動強化についての報告は平安南道党と咸鏡南道党の第1書記がそれぞれ準備し、党の政治路線と組織路線に関する報告は自身が受け持つことにすると言った。

このときになってはじめて場内は鎮まり、皆が賛成の手を挙げた。

こうして、最初からそれぞれ異なる主張を唱えた各道代表の不協和音で騒然としていた予備会議は成功裏に終わり、ついに本会議が開催されるようになった。

1945年10月10日から13日にかけて、歴史的な党創立大会が行われた。

大会には、抗日革命闘士と5道の党責任者及び熱誠者70余名が参加した。

会議が始まると一部の参加者は、再び予備会議で持ち出した主張を繰り返しながら、会議を混乱させせようともくろんだ。

その主張とは、「中央」的な性格を帯びるこのような会議をいかにして平安南道党や道党第1書記が主管できるかということだった。

昼時まで会議は基本問題の討議も始めることができず、甲論乙駁の激しい言い争いで空転していた。

そのとき、金日成パルチザン部隊の「政治委員」が片手を挙げて場内を見回した。

代表の視線は一斉に「政治委員」に集中した。

主席は会議の参加者に向けて、今われわれが行っている党創立大会は、平安南道党や道党第1書記の一個人が招集した会議ではない、会議に参加した代表が、誰が会議を招集できるかできないかを論じるのは、他人を無視する独善的な言辞だと言った。

主席の言葉に、熱弁を吐いていた代表たちは共産主義者らしくない自分らの行動が恥ずかしくて顔を赤らめた。

主席は、厳しい政治情勢の下でも今なお革命を行うという共産主義者が行動の統一を成し遂げられず、自分らの主義主張だけを固執しながら論争を繰り広げている、今日の会議は誰それの主管や承認の下に開かれたのではなく、現情勢の要求から提起されたものである、この会議を誰が招集したかについてあえて答えるなら、われわれの労働者階級と人民大衆の要求を反映してここに参加している皆さん自身が招集したと言える、党中央組織委員会をいかにつくるかということに討論を集中させなければならない、と述べた。

主席の言葉に党創立がどれほど重要で慎重な事業であるかを悟った代表たちは一人、二人と姿勢を直して座った。

主席は、われわれはわが国のかつての共産主義運動の苦い教訓を忘れてはならない、真に団結を望み統一を願うならば、尊厳があり強力なマルクス・レーニン主義党を求めるならば、他人を刺激する発言を慎まなければならない、朝鮮革命を指導できる党の創立は数人ずつ集まって看板だけ書いて貼り出すといってなされることではなく、何の基層組織もなしに「中央」だけつくるといって創立されることでもない、今日の事態がそれをよく物語っている、と語った。

そして、われわれは互いに団結を模索し、健全な雰囲気を造成すべきであり、会議で押し問答を繰り返すのは革命家らしくない行動である、誰もが空理空論を止め、全ての代表が党創立大会の成果のために会議をさらに厳かに行うことを提議する、と言った。

瞬間、会議場の雰囲気は厳粛になり、党中央組織委員会をつくるという第一議題は全ての代表の賛成で通過し、午前の会議が終わった。

午後の会議では、金日成パルチザン部隊の「政治委員」が

『わが国におけるマルクス・レーニン主義党の建設とその当面の課題について』と題する報告を行った。

2時間近くの主席の演説は、成文化した報告書というよりも、朝鮮革命の具体的な実情に基づいて方向と方途を明らかにした綱領だった。

ついで、党中央組織委員会の創立を全幅的に支持する討論が熱烈に行われた。

会議に参加した数人の代表が分派分子、地方割拠主義者の分裂策動を糾弾し、党中央組織委員会の創立を一致して支持した。

会議では、決定書『政治路線と組織の拡大・強化について』を採択し、第二議題である党中央組織委員会執行委員及び検査委員の選挙が行われた。

党創立大会では、党の組織路線と政治路線が採択された。

政治路線では、民主主義人民共和国の創建を基本的な政治課題とし、その実現のための4大当面課題を示した。

それは第一に、愛国的かつ民主的な各政党と各派を網羅する民主主義的民族統一戦線を形成することにより、広範な愛国的民主勢力を結集して朝鮮人民の完全な自主独立を保障する民主主義人民共和国を樹立するために努力し、第二に、民主主義的建国事業において最大の障害である日本帝国主義の残存勢力とあらゆる反動分子を一掃して国の民主的発展を順調にし、第三に、各地方に真の人民の政権である人民委員会

を組織し、民主的諸改革を実施するとともに、経済を復興・発展させ、人民の物質・文化生活を向上させることによって、民主主義独立国家建設の基本土台を強固にし、第四に、このような全ての課題を遂行するために共産党を拡大・強化し、大衆団体の活動を力強く推し進めることだった。

会議の閉幕に先立ち、金日成パルチザン部隊の「政治委員」が党中央組織委員会の創立を宣言し、党中央が早急に実行すべき課題を示す歴史的な結語を述べた。

会議に参加した多くの人が涙ぐんだ。

派閥争いや理論の欠乏、実践能力の不足により、当時まで国内外の全ての共産主義者を網羅した真の統一的な党を創立できなかった彼らであった。

当時創立された党中央組織委員会の委員、執行委員の構成を見ると、統一的な党の性格に合わせて国内外の共産主義者が皆網羅された。

会議は13日に閉幕した。大会の参加者は一様に、金日成パルチザン部隊の「政治委員」の報告内容を謄写してくれることを要求した。

しかし、当時の条件はそれを許さなかったので、主席は、大会参加者のために彼らの前で演説を行うことにした。

出演に先立って一人の抗日革命闘士を呼んだ主席は、どうしても今日大会参加者の前で自身の名前を公開しなければならないようだと言った。

抗日革命闘士たちがあれほど待ち焦がれていた時がついに来たのである。

演壇に立った彼は、喜びと幸福で震える声で、「今から不世出の愛国者であり、民族の英明な指導者である金日成将軍が『新しい朝鮮の建設と民族統一戦線について』という題目で演説を行います」と、聴衆に向けて言った。

彼の紹介に、ひそひそと話を交わしていた代表たちは、たちまち息を殺して一人、二人と驚きや歓喜のまなざしで席から立ち上がり、廊下に立っていた聴衆も背伸びをしながらどよめいた。

金日成パルチザン部隊の「政治委員」が演壇に立った。

「その間、国内でどれほど苦労が多かったでしょうか。私が金日成です」

まさかと思って心を引き締めていた代表の中から「やあ、やあ！」という感嘆の声があちこちから上がり、後は万歳の歓呼の声が会議場を震撼させた。

泣いたり笑ったり、足を踏み鳴らして喜んだり、演壇に近寄ったりしながら……。

主席は参加者たちが席に座るよう何度も手を振って勧めた。

しかし聴衆は主席を仰いで声を限りに「金日成将軍万歳！」を叫び、待ちに待っていた不世出の偉人を迎えた歓喜と興奮を鎮めることができなかった。

あれほど傲慢極まりなく振舞っていた人たちも熱狂的な拍手を送った。

抗日革命闘士たちは、主席が凱旋後からその日までパルチザン部隊の「政治委員」として活動した意味をそのときになって悟るようになった。

人民の中に入って平凡な人間として人民の声に耳を傾け、人民の望む党の建設と新しい国づくりのために、統一団結した革命の前衛隊の結成が全ての朝鮮共産主義者の確固たる党創立意志にならしめるために、主席は自身の功績と高い権威も二の次にしたのである。

党創立後の1945年11月1日、党機関紙『正路』(『労働新聞』の前身)が発刊された。

2. 民主主義の旗の下に団結しよう！

歴史的な党創立大会が終わった直後のことである。

誰かが会場の演壇に上がって、金日成将軍の祖国凱旋を歓迎する全民族的な民衆大会を開こうと提議した。

その瞬間から解放熱が金日成将軍の歓迎熱になおさら昇華した。

金日成主席は、人民と同志たちの誠意をそれ以上辞退することができず、大衆大会で行う演説文を作成した。

人民を信頼し、人民に依拠すれば天下を得て百戦百勝するという真理、団結のアピールが演説文の一句一句として刻まれた。

1945年10月14日、平壌は未明から賑わい始めた。

大衆集会場の平壌公設運動場（現在の金日成競技場）へ向かう人々の波は、時間が経つにつれてますます増え、駅前通り、鍾路通り、黄金町通り、西門通り、七星門通りをはじめとする当時の平壌市内の街や道路が群衆で埋め尽くされた。

午後1時、やがて集会が始まった。

広場を揺るがさんばかりの万歳の声と拍手が沸き上がる中、主席と共に抗日革命闘士と党中央組織委員会、平安南道党、

平安南道人民政治委員会の活動家、労働者、農民などの各界の代表30余名が幹部壇についた。

金日成将軍が演説を行うという司会者の紹介に、集会場は瞬く間に激情のるつぼと化した。

金日成主席が演壇に立った。

瞬間、集会場のあちこちから万歳の喊声より先に群衆の嘆声が上がり、その声はますます大きくなって巨大な響きとなって広がった。

後日、『金日成将軍の歌』と『朝鮮民主主義人民共和国国歌』を作曲した金元均は、その日の激動的な瞬間について次のように語っている。

「それは、あまりにも若い青年将軍をお目にかかったからだった。

そのときまで人々は、金日成将軍についての話を伝説のように聞いてきたため、その方は確かに白い長ひげを垂らした老将であろうと考えていた。

ところが、30代の青年将軍が出たのだから、人々は驚きを禁じ得なかったのである……」

かなり時間が経ってはじめて場内は鎮まった。

この日主席は、『全ての力を新しい民主朝鮮建設のために』と題する歴史的な演説を行った。

「親愛なる同胞の皆さん！

私は今日、このようにわれわれを熱烈に歓迎して下さった

ことに対し、皆さんに心からの感謝をささげます」

息を殺して耳を傾けていた群衆は再び熱狂的な歓呼の声を上げた。

「朝鮮民族が新しい民主朝鮮を建設するために力を合わせるときは来ました。各階層の人民は全て愛国的熱意を発揮して新しい朝鮮の建設に奮起しなければなりません。

力のある人は力で、知識のある人は知識で、金のある人は金で建国事業に積極的に貢献し、真に祖国を愛し、民族を愛し、民主を愛する全民族が固く団結して民主主義自主独立国家を建設していかなければなりません」

主席はこの日の演説を次のような熱烈なアピールで終えた。

「全朝鮮人民は、輝かしい未来への大きな抱負と勝利への確信を持って、新しい民主朝鮮を建設するために、共に力を合わせて勇敢に闘いましょう。

朝鮮独立万歳！

朝鮮人民の統一団結万歳！」

長い歳月が流れた後、主席はその日の凱旋広場で感じた感情を次のように語った。

「1945年10月14日、平壌公設運動場に上がった民衆の歓呼の声は、祖国と同胞のために私がなめた半生の艱難辛苦への表彰であり、謝礼であったと言えます。私はその謝礼を、私に対する人民の愛と信頼として受け止めました」

主席にとって人生の最大の幸福と楽を測る絶対的な基準は、

人民の愛、人民の支持、人民の信頼だった。

それゆえ、主席が創立した朝鮮労働党は、創立の初期から主席の天稟をそのまま受け継いで、人民への滅私奉仕を自分の政治理念、党風としているのである。

しかし、党の創立後も党の政治路線に反対する策動は執ようなものだった。

左右の日和見主義者は、即時の社会主義革命や「人民共和国」を主張しながら、党の人民政権の建設路線に反対した。

こうしたとき主席は、米国式でもソ連式でもない朝鮮式の新しい民主朝鮮を建設するという路線を提示した。

それは、解放後のわが国の具体的現実を明確に反映した路線であり、建国事業において歴史発展の段階に合わない要求を持ち出してはならず、それを超える要求を持ち出してもならないからであった。

また、かつて長い間封建制度と日本帝国主義の軍事的占領下で何の自由や権利も持てずに苛酷な虐待と搾取を受けてきたわが人民の願いでもあった。

全人民が口先だけではなく実際に国の主人となり、全ての人に自由と幸福をもたらす進歩的民主主義の道へ大衆を導くためには、社会の全ての階級と階層を網羅し、彼らの利益を代表する大衆団体がなければならなかった。

わが党は、各階層の大衆を結束させる活動を力強く推し進めた。

解放直後、わが国には複数の政党と共に数多くの階層別大衆団体が自然発生的に組織され、不必要な重複と対立、無意味な争いと競争が作用していて、そうでなくても複雑な政局をさらに騒然とさせていた。

その中でも一番複雑なのは青年運動だった。

統一的な中央もなしに道別に、あるいは地方別に共青(共産主義青年同盟)をはじめ「建国青年同盟」「農民青年同盟」「キリスト教青年会」などさまざまな系統のそれぞれ異なる名称を持つ団体が組織されていた。

特に、当時平壌と各地方に分散的に組織されて自分なりに活動していた共青は、小数の先進分子のみを受け入れる中核中心の青年組織で、解放された朝鮮の青年を一つに結集させるのにはあまりにも狭小な組織だった。

わが党はこのような政局を安定させ、青年を民主建国の先頭に立たせるために民主青年同盟創立路線を打ち出した。

このために、共青を労働者、農民だけでなく学生、知識青年をはじめとする各階層の広範な青年を網羅する大衆的な青年組織である民青(民主青年同盟)に改編するようにした。

1945年10月29日に開かれた民主青年熱誠者大会では、民青創立の必要性と民青組織路線をあくまで貫徹するための方途が討議された。

民青は共青に比べられない大きな「器」だった。わが党はその「器」にわが国の全ての青年を盛ろうとした。

しかし、民青の結成は順調に進まなかった。

少なからぬ共青員はあえて民青に背を向けて組織を別途につくり、民青に頭を下げて入る必要はないとして、はては民青の結成を妨げた。

それに、党内の極左的な一部の人は「青年運動の後退」だの「右傾化」だのといって民青創立路線を陰で反対した。

彼らは共青を民青に改編するという決定を採択する際は賛成して、陰では引き続き妨げながら共青を固執した。

彼らの主張は、革命は選ばれた数人の精鋭分子で行い、残りは彼らに仕えなければならないという誤った大衆観に根差していた。

これらの傾向を正し、青年たちを民主主義の旗の下に団結させたのはほかならぬ金日成主席だった。

主席は1945年10月末に行われた民主青年熱誠者大会で、民青結成の準備と関連した具体的な課題と方途を示し、この年の11月下旬、平安南道民主青年団体結成大会に出席して民青の結成を指導し、その経験を全国に一般化するようにした。

団結の旗印を高く掲げ、全ての青年を新しい祖国建設のための壮大な偉業の実現に結集させようとする主席の愛国・愛族の気高い経綸は、新しいものに敏感で進取の気性に富んだ青年・学生の熱烈な支持と呼応を受けた。

ついに1946年1月、平壌では民主青年同盟の結成を宣布する歴史的な朝鮮民主青年同盟団体代表者会議が開かれた。

民青は、各階層の広範な青年を大きな「器」に盛ってその誕生を世界に宣言した。

民青の創立後、朝鮮青年運動はその発展の新しい全盛期を開いた。

民青員たちは民主建国の日々、朝鮮青年の気概を余すところなく発揮し、祖国解放戦争の時期には李寿福、張太華のような数多くの民青員が祖国のために青春も生命もささげて英雄的に戦った。

その栄えある伝統は今日、朝鮮労働党の青年重視思想と路線によってしっかり受け継がれている。

民青の創立前の1945年11月18日、民主女性同盟がその創立を世界に宣言した。

革命の参謀部としての党が創立されてからわずか1カ月余りの間、他の大衆団体がまだ建設過程にあったときに女性たちの組織が真っ先に創立を宣言したのは、いとも驚くべきことだった。

朝鮮の女性は人口の半分を占めていたが、結婚の自由も、学ぶ権利も持てず、早婚や蓄妾をはじめ政治的・法律的・封建的抑圧の下で無条件の服従を宿命として数千年を生きてきた。

そのような朝鮮女性があらゆる社会的無権利から抜け出して、民主建国の道に真っ先に敢然として立ち上がったのである。

女性同盟は1945年11月に創立されたが、女性に対する社会の認識を正す転機となったのは、1946年5月に開かれた民主女性同盟第1回代表者会議だった。

党は女性同盟代表者会議の参加者のために15日間の特別講習会を開いた。

そのとき平壌では、雨季になれば氾濫する川水による水難から市民を永遠に解放させるための普通江改修工事が本格的に行われていた。

このような工事現場に、女性たちが隊伍を組んで太鼓やドラを打ち鳴らし、歌を歌いながら行進してくると、工事現場にいた数千人の男たちは驚きの目で彼女らを眺めた。

彼女らは全国の各地から女性同盟第1回代表者会議に参加するために上京した女性代表たちであり、特別講習会の途中、抗日の女性英雄金正淑女史の発起で工事現場に駆け付けてきたことを知り、工事現場の雰囲気は一変した。

こうして、日本帝国主義が10年をかけても完成できなかったこの工事を、わが人民は団結の力でわずか40余日間に完工した。

団結の力はこのように大きいものである。主人としての自覚を持ち、自力を信じて立ち上がった大衆の力はそれこそ無尽であるということを、わが人民は現実を通じて悟るようになった。

解放後、共産党が政権党となり、民主的政党、大衆団体が組織された条件の下で、わが党は民族統一戦線を抗日革

命闘争の時期とは異なって政党・大衆団体の連合の形態で組織した。

わが党は、民族主義者と宗教家との活動にも深い関心を払った。

主席は1945年11月、民族主義運動家たちとの談話で、民主主義自主独立国家を建設するためには、全ての人が民主主義の旗の下に一つに固く団結しなければならない、民族主義者は共産主義者に対する正しい認識を持ち、互いに排斥すべきではなく合作すべきだと言った。

宗教家たちに会っては、信者は天を信じても朝鮮の天を信じなければならない、一言で言って朝鮮を信じるべきだと諭した。

そうして少なからぬ宗教家が目覚めるようになり、朝鮮キリスト教連盟が創設されて統一戦線運動に参加するようになった。

わが国では、民主青年同盟と民主女性同盟だけでなく、労働組合連盟、農民組合連盟、芸術総連盟など階層別の団体が組織され、複数の民主政党も次々と結成された。

わが党は人民政権を樹立し、民主改革を実施するに当たって、主動的に民主的政党・大衆団体と共同行動を強化した。

これらの成果に基づき、1946年7月、各民主政党と大衆団体を網羅する統一戦線組織体である民主主義民族統一戦線が結成された。

これには共産党、民主党、新民党、天道教青友党、職業同盟、農民同盟、民主女性同盟、民主青年同盟、キリスト教連盟、芸術総連盟、仏教徒連盟をはじめ4つの政党と13の大衆団体が加わった。

その傘下に、当時の人口の過半数を占める600万余もの各階層の大衆が結集して新しい祖国の建設に奮い立った。

3. 新しい民主朝鮮建設のために

解放の歓喜は人々に喜びを与えたが、当時の国の状態は困難を極めていた。

労働者は「これから工場は誰が管理し、われわれに賃金は誰が払うのか」、農民は「われわれは引き続き地主に縛られて小作暮らしをしなければならないのか」、知識人は「われわれはどうすべきなのか」、企業家は「われわれは清算されはしないだろうか」とそれぞれ疑問を抱き、危惧の念で解放の日々を過ごしていた。

わが党はこのような状態を打開するために、民主諸改革の遂行へ全党と全人民を奮い立たせ、初の民主改革として土地改革を実施するようにした。

それは解放直後、わが国で農民が人口のほとんど80パーセントを占めていたからである。

全農家戸数の4パーセントしかならない地主が総耕地面積の58.2パーセントを占めていたし、農家戸数の56.7パーセントに及ぶ貧農の耕地面積は5.4パーセントに過ぎなかった。

農民は自分の土地を持つことを熱望していたが、それはまだ世紀の宿望として残っていた。

代を継いで宿命のように見なしてきた封建の搾取がどれほど

不当なものであるかを悟るには、農民を政治的に自覚させなければならなかった。

わが党は、創立直後の1945年10月16日に開かれた党中央組織委員会第1回拡大執行委員会で『土地問題に関する決定』を採択し、第2回拡大執行委員会では、土地改革のための常設機関として土地問題委員会を設置する一方、農民がまずは小作料3・7制闘争を展開するようにした。

各地の農村では3・7制を実施するための農民の闘争が始まった。

新聞や放送などあらゆる宣伝手段が総動員されて、3・7制の実施と関連した一大宣伝攻勢を繰り広げた。

農民は階級的に自覚し始め、これまで彼らの目に見えなかった地主階級の搾取的本性がさらけ出された。

その結果、3・7制は基本的に実施され、それを通じて農民は階級的に覚醒した。

1946年2月からわが国の農村では、耕作する農民に土地を与えることを求める農民の請願運動が力強く展開された。

大衆的運動として力強く繰り広げられた請願運動は、農民が自分の階級的立場を正しく認識して地主階級に反対する闘争に立ち上がるようにし、地主をはじめとする反動勢力を大きく威圧し気をくじいた。

恐れをなした地主の中で土地所有権を放棄する傾向が日ごとに増え、新義州では24名の地主が総5万7000坪の土地所有権を

放棄し、そのような傾向は价川郡、順川郡、平原郡などの各地で現れた。

当時土地改革の実施における最も鋭い問題の一つは、無償没収、無償分配の原則だった。

無償没収は熾烈な階級闘争を伴った。

「即刻の社会主義」を唱えていた人々まで「無償没収」という言葉にびっくりし、地主が報復に出れば困ると憂えるほど、当時としては少なからぬ人々が強い不安を抱いていた問題だった。

しかしわが党は、土地改革を先に行った外国の経験とわが国の実情を研究・分析した上で、徹底的に無償没収、無償分配の原則に基づいて土地改革を行い、耕作する農民を土地の真の主人にならしめた。

そして、没収した土地を国家所有ではなく、農民の個人所有にするようにした。

封建的な土地所有制度が長い間存続してきたわが国では、土地に対する農民の所有観念が非常に高かった。

農民たちは土地を持てなかったせいで地主の過酷な搾取を受け、悲惨な暮らしをしてきたため、自分の土地を持って思う存分農業を営んでみたいというのが彼らの一生の願いだった。

農民のこうした切々たる念願を無視して外国でのように没収した土地を国有化するならば、彼らの革命的熱意を高

めることができず、土地改革の成果を保障することもできなかった。

土地改革を実施する上でまた重要な問題は、土地没収の対象と基本闘争対象を正しく定めることだった。

清算すべき地主をどのように規定するか。

もし土地所有関係を具体的に考慮せず、少しの土地でも小作に出した人や土地を多く持っている人を一律に地主と規定するならば、土地改革で獲得すべき対象を闘争対象にして、階級闘争を困難かつ複雑にする恐れがあった。

わが国の農村の実情に合う土地没収対象と没収及び分配方法、小作制度を永遠に廃止するための方途などを正しく確定する唯一の方法は農民大衆にあった。

それは彼らが搾取と抑圧を直接受けてきたからである。

金日成主席は、1945年12月から翌年2月まで3カ月の間、大同郡をはじめとする各郡の農村へ出向いて、農村の状況と農民の要求をつぶさに聞き取り、この過程でわが国の実情に合う土地改革の原則と方途を確定した。

主席は農民の意見をそのまま土地改革政策に反映した。

これに従い、5ヘクタール以上の土地を持ち、それを土地を持っていない農民に小作に出して働かずに暮らした者を地主と規定した。

当時わが国の実情を見ると、小作に出して働かずに暮らす地主は5ヘクタール以上の土地を所有した者だった。

そのように規定してみると、当時わが国には地主が4万4000戸程度であり、その反面、土地がないか少ししかない農民は72万戸を超えた。

次に、地主の場合は彼らが所有していた土地ばかりでなく財産を全部没収するようにし、5ヘクタール以上の土地を持っていても小作に出していない土地は没収しなかった。

1946年3月5日、歴史的な土地改革法令が発布された。

わが党は、農民自身を土地改革の主動に立たせるために、農村の雇農と貧農で1万1500余の農村委員会を組織し、彼らが土地改革を直接遂行するようにし、1万余人の先進的な労働者で土地改革支援隊を組んで各地の農村に派遣した。

土地改革は、わずか20日余りの間に成功裏に終わった。

土地改革により、日本帝国主義者と親日派、民族反逆者及び5ヘクタール以上の土地を持った地主の100万ヘクタール以上の土地が無償で没収され、土地がないか少ししかない72万4522戸の農民に無償で分与された。

実に土地改革は、わが国の農村で数千年の間引き継がれてきた搾取の鉄鎖を完全に断ち切った、文字通り天地開闢のごとき出来事だった。

1969年10月11日、主席は党・国家機関の活動家の前で行った講義で、土地改革の偉大な生命力は祖国解放戦争で遺憾なく発揮されたとして、われわれの農民は自分たちに土地を与え、自由で幸せな生活をもたらした党と人民政権を守り、民主改革の

成果を守り抜くために、前線と後方で愛国的献身性と犠牲的精神を発揮して英雄的に戦ったと述べた。

わが青壮年は、1950年6月に戦争が起こるや鎌と手鍬を銃に換えて勇躍前線に志願し、二度と土地を奪われまいと生命を賭して戦った。

解放後わが国では、土地改革についで重要産業の国有化も勝利のうちに完成した。

重要産業国有化の実施は、わが党の提示した反帝反封建民主主義革命課題の一つであり、労働者階級をはじめとする全ての人民を生産手段の主人とし、国と人民の隆盛・繁栄と社会主義への経済的基礎を築くための今一つの革命だった。

重要産業の国有化は、単に経済に限られた問題ではなかった。

国の自主権と利益を固守できるか否かという鋭い政治的問題でもあった。

解放前、わが国の産業は日本帝国主義と親日的朝鮮人が独占していたし、経済の発展は甚だしく抑制された。

日本帝国主義が発表した統計資料によれば、解放前、わが国の資本総額中、日本人の資本は93パーセントで、その他の外国人の資本は2パーセント、朝鮮人資本はわずか5パーセントに過ぎなかった。

その上、解放直後のわが国の経済はゼロの状態も同然だった。

敗北を前にした日本帝国主義は、わが国の原料資源を略奪す

るために建設した不十分な工業施設さえ残らず破壊して逃走したのである。

主席は1945年9月、抗日革命闘士を各地方に派遣して建党・建国・建軍のための基礎づくりをするようにした。

抗日革命闘士は工場で労働者大会を開いて中核労働者で工場委員会をつくり、労働者が工場、企業の主人だということを宣言した。

こうして咸鏡南道の各工場委員会では、労働者を奮い立たせて24の主要な工場と224の中・小規模の工場・企業を掌握した。

平安北道人民委員会も69の工場と13の炭鉱を掌握し、清津、羅津などでも鉄道委員会が組織されてわずか3カ月の間に朝鮮東海沿線の基本駅を掌握し、鉄道運行を保障した。

咸鏡北道人民委員会は160の工場、企業を人民政権機関の当該部署にそれぞれ配属させた。

重要産業の国有化法令が発布される以前に、すでにわが国では、80～90パーセントの工場、企業が人民委員会の手中に入った。

現実は、一日も早く重要産業の国有化法令が発布されることを求めていた。産業の国有化法令を発布して、重要産業が人民の所有であることを法律的に固定化しなければならなかった。

当時、わが党と人民政権の施策を中傷し、民主勢力を分裂させようと策動していた反動分子はさまざまなデマを広めた。

臨時人民委員会が数人の労働者を採用している中・小規模の企業まで全部没収して国有化しようとするだの、産業を国有化して直ちに社会主義を建設しようとするだのと言いふらした。

それに驚いた一部の中小企業家は、資金や設備、資材を死蔵させたり、企業活動をためらっていた。

一部の労働者の間でも、社会主義社会を建設するのはよいことだが、まだ復旧されていない工場にそれができるわけがない、あっさり故郷へ帰って野良仕事でもしたいと言う人もいた。

このような実態の報告を受けた主席は、わが党の政策を全国の人民がよく理解し共感できるように『20カ条政綱』の条項に一つ一つ書き入れた。

……

(9) 大企業、運輸機関、銀行、鉱山、山林を国有化すること。

(10) 個人の手工業と商業の自由を認め、これを奨励すること。

……

主席が1946年3月に放送演説で発表した『20カ条政綱』は、わが国の民主的政府が実現すべき政治、経済、社会・文化分野の課題を全面的に明らかにした政綱だった。

それに従って、資金の不足する企業家には融資を行ったり、原料のない企業家には原料を斡旋する国家的措置が次々と講じられた。

愛国的な企業家は精を出して新しい祖国の建設に奮闘した。

産業国有化を実施したとき、朝鮮人資本家として工場を奪われた人は数人の親日資本家しかいなかった。

これは、かつてわが国に民族資本家が非常に少なかったことを物語っている。

民族資本家や中小企業家には手をつけなかった。

ゴム靴をつくったり、精米業をする個人手工業者や中小企業家の企業活動を奨励して、差し当たり人民生活に必要な商品問題を解決できるように励ました。

1946年8月10日、『産業、交通運輸、逓信、銀行などの国有化に関する法令』が発布された。

この法令により、日本帝国主義者が解放前、わが人民の膏血を搾ってつくり上げた全ての工場、鉱山、発電所、鉄道運輸、逓信、銀行、商業、文化機関などが、その唯一の合法的な主人であるわが人民の所有となった。

日本人と共に逃亡した者や親日派、民族反逆者が所有していた工場、企業も全て無償で没収され、人民の所有となった。

重要産業国有化法令の発布により、わが国では当時の産業全体の90パーセントに達する日本帝国主義及び親日資本家が所有していた1000余の工場、企業が一挙に全人民的・全国家的所有となり、人民経済の主導的部門である工業部門では国営経済が指導的地位を占めるようになった。

わが党は、重要産業国有化に先立って労働者、事務員の8時間労働制を実施するようにした。

日本帝国主義によって経済が破壊されたのも胸の痛むことであったが、搾取と抑圧の残りかすである過酷な長い労働時間は、労働者を苦しめる一つの桎梏であった。

わが党にとって8時間労働制は、日本帝国主義の虐政に苦しんでいた労働者に対する単なる同情ではなく、新しい国づくりで何らかの人気を得るための政治的看板でもなかった。

それは人民への絶対的な奉仕精神であり、新しい朝鮮を人民の国につくる限りない責任感の発現だった。

1946年6月24日、臨時人民委員会第9回会議では労働者、事務員に対する労働法令が正式に公表された。

労働法令の発布は、かつて不遇な運命の受難者であった勤労者大衆が新時代の主人公、歴史の主人公に登場し、民主主義的自由と権利を思う存分行使できるようにして、彼らの社会的地位を一躍高める歴史的な出来事だった。

1950年6月24日付の『労働新聞』に掲載された歴史的な労働法令発布4周年に関連した社説は次のように指摘した。

「労働法令の実施後4年目に、共和国労働者の物質・文化生活は、共和国政府の日常的な配慮によって飛躍的に向上し、また不断に向上している。

労働者の収入は既存の賃金よりも平均63.5パーセントも増えた。

賃金以外にも各自の労働力の量と質に従って数億ウォンもの各種

の賞金、賞品、加算金を受け、作業服などを無料で支給された。

国家の利益と自分の利益が必然的に結び付いていることを深く認識している全ての労働者は、自発的に労働規律を強化し、愛国的増産運動を広範に展開して、1946年に比べ1949年には労働生産性を283.4パーセントに向上させ、工業生産高を377パーセントに増加させた」

このように、わが党の指導の下に民主諸改革が成功裏に遂行されたことによって、わが国では古い植民地的及び封建的社会関係が一掃され、新しい民主主義的社会関係が確立されるようになった。

わが党は、知識人問題を革命と建設の成敗を左右する重大な問題と見なし、知識人の教育・改造に深い関心を払った。

振り返ってみると、解放後わが国にはわずか数人の、指で数えるほどの知識人しかいなかった。それさえも、出身や経歴からしてみると、使い道のあるような人は一人もいないと言うべきであろう。

しかしわが党は、彼らの愛国心を信じてためらうことなく新しい朝鮮建設の一翼を担った幹部として重視し押し立てた。

曲折の多い運命の道を歩んできた古い知識人に対するわが党の信頼には限りがなかった。

親日派と決め付けられていたある知識人に寄せた信頼だけ見てもそれが十分に分かる。

わが党は彼に新設される保安幹部訓練大隊部直属病院院長の

職務を与え、中佐の軍事階級を授与した。

彼の妻は日本人だった。数十年の間わが人民を苦しめた日本帝国主義に対するわが人民の積もりに積もった憤怒は、解放直後、日本人という言葉を聞くだけでも敵愾心に燃えていた。

そのことで悩んでいた彼は妻と別れようとさえ考えていた。

彼は主席に会った機会に、自分が人情にとらわれて日本人に対するわが人民の血塗られた感情に考えが及ばなかった、日本居留民が本国へ帰る際に自分の妻も帰らせるつもりだとし、これは自分の意思であると同時に妻の決心でもあると言った。

彼の話を聞いた主席は、唖然としてしばらくの間黙っていた。

植民地知識人としての曲折の多い運命の道を歩んできた彼の心の中の傷と苦しみを自身の痛みのように受け入れた主席は、必ず別れるべきなのか、他に方途はないのか、もう少し考えてみよう、ともどかしそうに言ってこう続けた。

「李先生、私が先生を信じるように先生の婦人を信じてもいけないでしょうか」

「えっ?!……」

「それでも別れるつもりですか」

「将軍……」

彼は激情に駆られてその場に座り込んでしまった。

主席はそのような彼に懇ろに言った。

今日から先生は私を信じ、私は先生を信じて一緒に手を取り合って働いていこう。われわれは一時的な道連れではなく、永遠なる同行者とならなければならない。

先生はいつもわが党と人民政権を信じ、希望と楽観に満ちて強く生きなければならない。……

永遠なる同行者！わが党が知識人に与えたこの貴い称号はその後、われわれの知識人を労働者、農民と共に新しい朝鮮を打ち立て、人民大衆中心の社会主義国家を打ち立てる揺るぎない柱に育て上げた。

主席の懐を求めて解放されたその年の10月末から数多くの知識人が平壌を訪れてきた。

彼らが山々を越えてきたり、危険極まりない小船に身を乗せて訪ねてきたりしたのは、決して平壌に近い親類や特別な縁故者がいるからではなかった。

彼らは皆わが党の政策を支持し、新社会の建設と社会主義祖国の隆盛・繁栄のために特出した功績を立てた。

解放なった翌年の7月下旬のある日、党旗が制定されていた歴史のその日々にあったことである。

当時一部の人は、党マークに筆を記した党はどの国にもないと言った。

主席は彼らの主張に、わが国の知識人は革命の対象ではなく革命の原動力である、マルクスも知識人であり、レーニンも毛沢東も知識人である、革命に参加した多くの人が知識

人である、だから知識人が革命の原動力になれない理由はない、と言った。

わが党のマークと党旗はこのように世に生まれた。

朝鮮労働党旗に記されたハンマーと鎌と筆は、そのままわが党の卓抜した政治経綸を刻み込んだものであり、植民地弱小国だったわが国が、80年が過ぎた今日いかに自主的な社会主義国家に建設されるようになったかを雄弁に物語っている。

4. 労働党になった経緯

解放なったわが国で革命的な党を創立する偉業は実現したが、当時の社会的環境は共産党を勤労人民の大衆的な政党に発展させることを求めていた。

それはまず、鍛えられた共産主義者が少ないことに起因していた。

解放後、わが国の社会関係から見れば、労働者階級はまだ幼弱であり、人民は日本帝国主義の悪宣伝と分派分子の策動のため共産主義に対する正しい認識に欠けていた。

このような状況下で、党が広範な勤労人民大衆の中に深く根を下ろすためには、鍛えられた共産主義者と労働者階級の先進分子だけでなく、農民やインテリを党に受け入れて共産党を大衆的政党に発展させることが必要だった。

当時、わが国には共産党と共に勤労者が少なからず加わっている新民党が存在していた。

新民党は1946年2月に創立された民主的政党で、インテリと小ブルジョアジーの利益を代表していたが、創立後、小ブルジョアジーばかりでなく、次第に労働者、農民の中へその勢力を拡大した。

これは勤労者大衆を分裂させうる条件となった。

勤労者大衆の分裂を防ぎ、彼らを一つの政治勢力に結集させて新しい祖国建設を力強く推し進めるためには、共産党と新民党を合わせて勤労人民の大衆的政党に発展させなければならなかった。

解放後、人民政権が樹立し、民主改革が実施される過程で労働者階級の指導的地位は一層強固になり、労働者階級と農民、インテリの同盟が強化され、彼らは新しい民主朝鮮の建設で利害関係を共にするようになった。

変化した社会・階級関係からしてもそうだし、当面の闘争綱領でも大概一致する共産党と新民党が合同するのは当然なことだった。

共産党を労働者階級をはじめとする全ての勤労人民の統一的な党に発展させるのは、解放後、朝鮮革命と党そのものの発展の合法則的要求として提起された。

金日成主席は1946年6月26日、共産党責任幹部協議会で共産党を勤労人民の大衆的政党に発展させるという方針を提示した。

当時、新民党内の一部の分派分子は「党の合同は共産主義者の謀略だ」「共産党は新民党の幹部を信頼していない」などのデマを流し、新民党員が共産党に反感を抱いて合同に反対するようそそのかした。

しかし、解放後共産党の指導の下に実施された民主諸改革の恩恵を実生活を通じて体験した新民党の党員大衆は、共産

党への厚い尊敬と信頼を持っていたし、それは何をもってしても壊しがたいものとなった。

こうして新民党は、1946年7月21日に合同を支持する立場を公式表明し、2日後の7月23日には自党の代表を通じて共産党に合同提議書を送った。

「……本党は、民主朝鮮の建設においてより強力な力を発揮し、建国大業を急ピッチで完成すべく、いかなる方法をもってしても両党の勢力を糾合・統一し、朝鮮の諸般の現実が要求する適切な組織体としてより広範な労働者、農民、インテリを一つに結集することにより、朝鮮の民主主義的独立国家建設の偉業を速やかに実現することができると認めます。

本党の常務委員会は過去の本党の組織経験、多数の党員の要望、貴党との関係、人民の反響、国内情勢などを周到かつ綿密に考慮して、あえて貴党との組織的統合問題を提議する次第です。これは本党の民主朝鮮の建設を目指す誠意から出た意見であることをご了承し、この建議を受け入れて研究・討論した後の貴党の誠意ある回答を期待してやみません。……」

7月24日、党中央委員会常務執行委員会は共産党と新民党の合同問題を討議し、新民党に送る回答書簡を採択した。

いざ共産党と新民党の合同が策定されると、分派分子らは合同をすれば党の性格が変わるだろうから、もう労働者階級の革命思想を指導思想とすることはできないという右傾的な主張まで持ち出し、党を統一戦線体のような組織につくり

上げ、そこに種々雑多な者まで引き入れようとした。

1946年7月27日に開かれた党第8回拡大執行委員会は、かつてなく厳かな雰囲気の中で行われた。

会議では、共産党及び新民党中央委員会拡大連席会議に提出する報告『今日の政治情勢とわれわれの新しい任務』と、合同した党の名称と宣言書、綱領、規約(草案)、党中央指導機関の選挙細則などが議題として討議された。

主席は会議の議題にある合同問題を討議する席で、代表たちに疑問があれば率直に提起するようにと言った。

主席が発言の機会を与えると、会議の参加者たちは席から立ち上がった。

—わが国にはいくつもの政党があるのに、なぜ新民党とだけ合同するか。

—私も同じ意見である。合同するからには青友党や民主党とも合同することができるじゃないか。

大概、こういう質問だった。

当時一部の人は、わが党の大衆的政党建設路線を正しく認識していなかった。

金日成主席は、次のように説明した。

——青友党や民主党と合同しようという見解は、それらの党の階級的性格をよく認識していないことから出たものだ。一般的に、党というものは階級の前衛部隊である。今、われわれが創立しようとする労働党は、労働者、農民、インテリ

の利益を代表・擁護する勤労者階級の前衛部隊になるだろう。ところが、民主党や青友党はどういう党なのか。民主党は有産階級の政党であり、青友党は宗教的な党である。それゆえ、もしわが党が民主党や青友党と合同するならば、労働党は勤労者大衆の前衛部隊というより何らかの組合のようなものになるだろう。だから、民主党、青友党とは民主主義民族統一戦線を通じて団結しなければならない。合同するからといって、組合のように全部を合わせるのではない。……

主席は、合同後にも党の性格は変わることがなく、わが党の指導思想が何らかの他の思想に変わることはないと言明した。

また、合同が党を「小ブルジョアジー化」「右傾化」するものだという見解は、小市民的英雄主義と排外主義から出たものであり、このような独善的かつ極左的な見解は裏返した右傾と同じだと指摘した。

そして、党に種々雑多な者まで引き入れようとするのは、党を勤労者大衆の前衛部隊ではなく、何らかの「組合」のようなものにすることだと批判した。

それに対して主席は、労働について言えば普通、工場や鉱山で働く労働者を頭に浮かべるが、そうとばかり考えてはいけない、労働者はもちろん、農民も労働をし、事務員も精神労働をしている、われわれが両党を合同して創立する党は、共に労働に参加する労働者、農民、インテリの先進分子の組織であるだけに、その名称を労働党と呼ぶのが妥当である、と言った。

主席の言葉に会議の参加者たちはうなずき、賛同の表示として熱狂的な拍手を送った。

質問する人々の中には、あまりにも当たり前の問題を提起して会議参加者の非難を受ける者もいた。

主席はそんな質問を少しも気にせず、最後の一人の質問にまで真摯に答えた。

大衆的な政党建設思想を古典の命題でなくても分かりやすく掘り下げて説明する主席の言葉は、会議参加者に合同に関する十分な認識を与えた。

会議参加者が既成観念から抜け出して労働者、農民と共にインテリも党の構成部分になるという一致した見解を持つようになると、主席は自ら作成した合同活動計画を発表した。

主席は、7月29日に開かれた共産党及び新民党中央委員会拡大連席会議で合同の目的と可能性を再び明らかにし、その実現のための課題を提示した。

これで、両党を合同するための実際の活動が開始された。

1946年8月初めから両党の細胞から道党に至るまで、下部から上部へ上がっていく方法で順次合同が行われ、1カ月という短期間に労働党の各級党組織が結成された。

1946年8月28日から30日にかけて、平壌では共産党と新民党の合同大会が開かれた。

大会には、27万6000余の共産党員と9万余の新民党員を代表して801名の代表が参加し、各政党・大衆団体の代表100余名がオブザーバーとして参加した。

金日成主席が『勤労者大衆の統一的党を創立するために』という報告を行った。

報告は、労働党は朝鮮勤労者大衆の利益を代表・擁護する党であり、富強な民主主義自主独立国家の建設を目的とする党として朝鮮の自主独立と民主化を目指す闘争において当然、主導的な力とならなければならず、現段階における党の基本的任務は、広範な人民大衆を立ち上がらせて全国にわたって反帝反封建的民主改革を徹底的に遂行し、民主主義人民共和国を打ち立てることだと明らかにした。

全ての会議参加者は、合同こそ祖国の自由と民主主義的独立のための最も正しい方針であるという認識を固めた。

会議では、新民党の多くの中央委員が労働党中央指導機関のメンバーとなった。

朝鮮の共産主義運動史においてこのように全党が一致した意思を持って統一団結を実現した例はなかった。

大会は党の綱領と規約を採択し、共産党機関紙『正路』と新民党機関紙『前進』を統合して労働党機関紙『労働新聞』と政治理論雑誌『勤労者』を発刊することを決定した。

党のマークに描かれたハンマーと鎌と筆は、労働者、農民、インテリの利益を代表する大衆的政党としての党の性格

と、革命的な党建設の新しい道を切り開いていくわが党の権威と尊厳の象徴となった。

労働党の創立により、わが党は勤労人民の利益を統一的に代表する唯一の大衆的政党として強化・発展されるようになった。これは、党建設と革命発展において画期的な意義を持つ出来事であった。

わが党は大衆の中に一層深く根を下ろし、その周りにより広範な革命勢力をしっかり結束できるようになった。

5. 正規軍を建設する日々に

わが党が創立されて数カ月後のある日。

当時、党中央組織委員会のある幹部が人民の正規軍を建設するための準備で多忙を極めていた抗日革命闘士を訪ねてきた。

「もしや正規軍を組織しようとするのではありませんか」

「それが何か間違っていますか。われわれも早く正規軍を建設すべきではありませんか」

「ずっと聞きたかったことですが、ソ連軍が駐屯している状況下で軍の建設は急ぐような問題ではないじゃありませんか」

「私も聞きたいんです。ソ連軍は日本軍の武装解除のために進駐しているのに、われわれの軍建設と何の関係がありますか」

「関係があります。先日、『プラウダ』にソ連の立場に関する記事が載っていましたが……」

彼は『プラウダ』の記事を丸暗記したようにそらんじるのだった。

「偉大なソ連の武力、すなわち平和の旗印である正義の銃剣が守ってくれる限り、欧州の各国人民は強固な平和と安定を保証されると書かれていました」

彼は長広舌をふるった。

「偉大なソ連の正義の銃剣がわが朝鮮を守っているのに、

どうして平和を疑うのですか」

「それじゃ、あなたはいつまでもソ連軍がこの地に駐留してほしいと哀願するつもりですか」

「それは違います。戦時協定によって定められた日程表通り撤収するでしょう」

「ならば、そのときになって軍建設を始めようと言っているのですか」

「それでも遅くはないと思います。経済的土台が築かれてから……」

「ハッハハ……」

抗日革命闘士はわれ知らずあきれたように吹き出した。

これが、正規軍創設に関する当時の人々の一般的な見解だった。

もちろん、国家が創建されて一定の期間、経済的土台が築かれた後に軍を創設するのは公認された手順である。

しかし、わが人民が直面した情勢はそれを許さなかった。

朝鮮半島の半分に進駐した米軍の動きがただならぬものだったからである。

1945年11月13日、米軍政長官アーノルドは「国防司令部」を設置するという「軍政法令」第28号を公布し、「軍事英語学校」を設立・運営することを計画し、その募集を始めた。

「国防司令部」はアメリカ帝国主義のシナリオに従って「国防計画」なるものを作成し、米軍の指揮の下に各軍種・兵種の

武装部隊を編制する一方、共和国地域にテロ団と破壊・謀略分子を不断に潜入させた。

これと共に、アメリカ帝国主義は韓国軍に莫大な資金をつぎ込んだ。

アメリカ帝国主義が挑発した祖国解放戦争時期、韓国軍の武力装備が朝鮮人民軍より優勢だったのは、米国の腹黒い「援助」があったからである。

これら全てのことは自分らの「世界制覇戦略」実現の一環として朝鮮半島を占領するためのアメリカ帝国主義の侵略政策の所産であった。

このような情勢にもかかわらず、外国を頼りにしていた人々、外部勢力に依存して軍隊を建設する荒唐無稽な夢を見ていた人々は、いまだに目を覚ましていなかった。

主席はこのように困難な状況の下でも、抗日戦の日々に日本帝国主義を打ちのめし国を取り戻すために白頭山へわが子を送ったわが人民の愛国心を信じ、正規軍の創設を力強く推し進めた。

まず、人民の愛国心を奮い起こした。

その代表的な実例が、平壌学院の学生募集要綱であった。

主席は、かつて強力な民族軍隊がなくて日本帝国主義に国をそっくり奪われて強いられた亡国の民の運命と不幸について、そして血をもって取り戻した祖国と、解放された人民が二度と帝国主義侵略者の靴の下に踏みにじられるようなことがないよう強力な正規軍を創建しなければならないという心

情を込めて、学院の創立目的と使命、募集対象、募集期間、募集推薦様式などを自ら作成した。

要綱を読んだ多くの愛国青年が平壌学院の入学を志願した。

平壌学院は、正規軍の建設で根幹になる軍事・政治幹部を育成する目的で、解放後3カ月目に創設された軍事学院であった。

労働党は、正規軍の建設で軍事・政治幹部の養成に優先的な力を向けたのである。

その後、学院を母体として1946年4月に中央保安幹部学校が創設された。

主席は、党中央組織委員会直属の平壌学院党部を設け、その下に党細胞を組織して正規軍の建設を党が全的に担当するようにした。

これと共に、数多くの抗日革命闘士を正規軍の建設事業に優先的に派遣し、彼らが中枢的な役割を果たすようにした。

こうして、抗日革命闘士の大半が解放戦争の疲労をほぐす暇もなしに平壌学院と中央保安幹部学校などで将来の正規軍の根幹を養成する活動に自分の心身をささげた。

いざ平壌学院が創設されると、それまで腕をこまぬいていた事大主義者らは正規軍建設の既存の慣例と経験を云々した。

「軍事教育機関の学制を4～5年にすべきだ」

しかし、それは現実に顔を背けた空しい夢に過ぎなかった。

一人の正規軍人もなく、緊迫した当時の情勢の下で軍事・

政治幹部を育成するために4～5年をかける余裕がなく、資金もなかった。

あるのはただ一つ、抗日戦の日々に創造された軍・政学習の経験だけだった。

抗日戦の日々、朝鮮の革命家が初の武装組織を結成するときから最も難儀した問題の一つは、一つの戦闘、一つの戦場の指揮を担当できる軍事・政治幹部が足りないことだった。

主席は、当時の心情についてこう語っている。

「私はこのときほど、われわれに軍事学校のないことを残念に思ったことはない」

主席は、その代わり軍・政学習をしばしば行うようにした。

主席は、革命の前途に困難かつ複雑な問題が持ち上がるたびに、朝鮮人民革命軍隊員の政治的・軍事的水準を高めるために東崗と馬塘溝、白石灘などで軍・政学習を行い、朝鮮人民革命軍の指揮幹部を手塩にかけて育成した。

わが党は、抗日戦の日々に創造された軍・政学習の経験に照らし、軍事指揮官を育てる中央保安幹部学校の教育期間を、情勢の要求と国の実情に合わせて1年とすることにした。

当時、多くの人がこれに疑問を抱いていた。

彼らは皆東欧諸国のようにわれわれもソ連に依拠して軍事幹部問題を解決すべきではないかという意見を持っていた。

わが党はその意見を受け入れなかった。

それは、軍事・政治幹部を外国に頼って育成すれば国防分野

全般が縛られるようになり、主体的な建軍方針を正しく貫徹することもできないと認めたからだった。

このようにして整えられた軍事・政治幹部養成拠点では、正規軍の建設に寄与する労働者、農民出身の多数の軍事・政治幹部が養成された。

一方、正規の革命武力の中核部隊を創設し、正規軍の建設に必要な軍種、兵種の部隊を新たにつくることにも大きな力が向けられた。

わが党は、抗日革命闘士を根幹とし、平壌学院の卒業生を中核として、解放直後に各地に組織された保安隊、鉄道警備隊、国境警備隊を土台にして保安幹部訓練所を設置した。

1946年8月には价川、羅南、平壌に保安幹部訓練所第1、第2、第3所が組織され、その管下の分所が各所に設置された。

保安幹部訓練所の創設は、正規軍を建設するための強固な土台となった。

保安幹部訓練所への統一的な指導のために保安幹部訓練大隊部が組織された。

この保安幹部訓練大隊部が、共和国の創建後、朝鮮民主主義人民共和国民族保衛省、人民武力部、国防省に強化・発展された。

新しい朝鮮の人民空軍と海軍も自力で創設した。

主席の指導の下に平壌、新義州、咸興、清津、会寧など各地に航空協会支部が設置され、それに基づいて1945年12月、朝鮮航空協会が創設された。

航空協会メンバーの一致した意思によって、主席が朝鮮航空協会会長に推戴された。

1947年8月、平壌学院航空班の卒業生と航空技術者でわが国の初の飛行隊が発足した。

発足当時、飛行隊が保有した航空機は20余機だった。

このときから1年が過ぎた1948年9月には、民族保衛省直属の独立飛行連隊が編制された。

この飛行連隊を母体にして1949年10月下旬、朝鮮人民軍第11飛行師団が組織された。

1946年6月には朝鮮東海と西海に水上保安隊が組織されて海軍創設の土台となった。

ところが、艦隊の創設は文字通り難題であった。当時わが国には、艦隊の創設を担当しうる技術者や経験が全くなかった。

だからといって、正規の海軍武力の創設もそれ以上延ばすことはできなかった。

わが国は長い海岸線を有する国である。

それゆえ、久しい前から島国日本の侵略のときにもそうだったが、米国の侵略船「シャーマン」号と「シナンドアー」号も海から侵入してきた。

米国の政治活動家テンネットは、著書『ルーズベルトと日露戦争』で、米国が1860〜1870年代に東方のアジアにおける海軍根拠地の獲得問題を審議した際、朝鮮は将来の根拠地の一つに挙げられた、と書いている。

そのアメリカ帝国主義が朝鮮半島の半分を占領している状況の下で、いつ侵略の砲声を上げるかは誰も分からないことだった。

実際に当時、米国の使嗾を受けた韓国のスパイ、破壊・謀略分子が警備の緩んでいる海岸を通じて潜入していた。

主席は、自力でわが国の領海を守る海軍を創設しなければならないという確固たる意志を持って、抗日革命闘士を派遣して海軍の創設を推し進めた。

そうして1948年1月、元山北港に海軍幹部養成拠点である水上保安幹部学校が開校し、11月に朝鮮人民軍海軍軍官学校に改称された。

1946年6月には海岸警備任務を遂行する水上保安隊が朝鮮東・西海に組織され、1948年11月下旬には東・西海の水上保安隊を発展的に解散し、それぞれ海岸警備隊を組織した。

1949年8月、朝鮮艦隊司令部が設置され、28日には朝鮮艦隊の創設儀式が行われた。

4隻の小砲艇と200トン級の掃海艇である「勝利」号、「民主」号、「解放」号、そして5隻の魚雷艇が艦隊の基本構成をなしていた。

この幼弱な艦隊が、去る祖国解放戦争時期、注文津海戦で4隻の魚雷艇をもって「海の島」と豪語していたアメリカ帝国主義の重巡洋艦「ボルチモア」号を撃沈し、1万4000トン級の軽巡洋艦を撃破した。沿岸砲兵部隊は、5万余名の大兵力と数百隻の艦

船、約1000機の飛行機で攻撃してくるアメリカ帝国主義侵略者と決死の覚悟で戦い、敵の月尾島上陸を3日間も遅らせた。

わが党はこれと共に、正規軍の建設に必要な物質的土台を築く活動も積極的に推し進めた。

主席は1945年10月2日、平壌市平川里(当時)に位置していた日本帝国主義支配時代の兵器製造所の跡を見て回り、自国の兵器工業を創設・発展させるべきだと指摘した。

そうして1947年6月、朝鮮の初の兵器工場が立ち上がり、自力で各種の武器と軍事装備を生産し始めた。

わが党は、正規の革命武力建設の要求に即して軍事編制を改め、戦闘政治訓練と給養活動で正規化の体系を確立し、軍事規定と教範、軍旗と軍人宣誓を制定・実施するようにした。

そして人民軍行進曲を創作し、人民軍新聞を創刊するようにした。

わが党は、このような準備に基づいて1948年2月8日、正規の革命武力である朝鮮人民軍を創建した。

この日平壌では閲兵式が行われ、主席が『朝鮮人民軍の創建に際して』という歴史的な演説を行った。

主席は演説で、わが人民軍は民主朝鮮の正規軍として今日創建されるが、実際には長い歴史的根源を持つ軍隊であり、抗日遊撃闘争の革命伝統と貴重な闘争経験と不屈の愛国精神を受け継いだ栄えある軍隊である、ただ銃剣で武装したばかりでなく、革命先輩の実際の闘争経験と、熱烈な祖国愛と気高い革命

精神で武装したわが人民軍は、鉄の軍隊であり、いかなる敵の侵略をも撃退し、常に百戦百勝するであろう、と述べた。

抗日の伝統を継承した朝鮮人民軍は、抗日革命闘士を根幹とし、労働者、農民をはじめとする勤労人民の息子・娘で組織された。

その後、人民軍は政治的・軍事的に強化され、去る祖国解放戦争で新生朝鮮の尊厳と栄光をあまねく轟かせた。

6. 人民朝鮮の誕生

「金日成将軍はどんな部類の人がお好きでしょうか。将軍が友人として付き合う人々についてお聞かせ下さい」

これは1947年8月、金日成主席の接見を受けた米国の女流記者アンナ・ルイス・ストロングが、当時の人民政権機関の幹部たちに提起した質問である。

彼女は解放直後、西側の記者としては最初に主席に会った女性である。

当時、彼女は主席に、朝鮮に統一政府が樹立されれば金日成将軍が必ず大統領になるだろうと自分は確信している、今後、統一政府が樹立されたとき再会することを望んでいる、と言った。

彼女がわが国に滞在した期間は長くない。

しかし、彼女は主席が一番敬い愛する人はどういう人であるかを知るために多くの人々に会って話を聞いた。

そのとき、彼女が一番関心を寄せたのは、平凡な労働者、農民、知識人が政治の主役として登場したことだったという。

彼女が言ったように、どの国にも政治の主役を演じるエリートがいる。

社会制度によってそれぞれ異なるのは事実だが、共産主義者

が政権を執った国でも平凡な勤労者大衆は政治の対象になるだけで、決して政治を主導する主役として登場した例はないというのが彼女の見解だった。

そのためなのか、彼女はわが国に来て、主席が愛し押し立てた人々の資料を多く収集した。

愛国米運動の先駆者である載寧平野の金済元農民、日本帝国主義が破壊した機関車を自らの力と技術で復旧して鉄道運行を保障した、金会日運動の先駆者である定州機関区の金会日をはじめ、新しい朝鮮建設の主人公の資料を自分の取材手帳に一杯書き込んで帰国した。

いかなる革命においても主権の問題は、基本的な問題として提起される。

わが党は創立直後、その政治路線で全ての人民の望む民主主義人民共和国の創建を基本的課題として規定し、その実現のための4大当面課題を打ち出した。

しかし当時、わが人民の前途には大きな障害が立ちはだかっていた。

1945年12月16日から26日まで、ソ連外相モロトフ、米国務長官バーンズ、英国外相ベビンはモスクワに集まって一連の戦後処理問題を討議し、朝鮮問題に関する決定を採択した。

……

①朝鮮を独立国に復興させ、朝鮮が民主主義の原則に基づいて発展するようにし、長期間にわたる日本支配の悪結果を速や

かに一掃する条件をつくる目的から臨時朝鮮政府を樹立し、この政府が朝鮮の経済と文化の発展のための対策を講じるようにする。

②臨時朝鮮政府を樹立するためにソ米両軍の共同委員会を設置し、この委員会は朝鮮の諸政党・大衆団体と協議して活動し、委員会の作成した建議案は4カ国の審議を受けてこそソ米両国によって決定される。

③共同委員会は、臨時朝鮮政府と民主団体を参加させて、社会の進歩と民主主義的自治の発展と朝鮮の国家的独立の確立を援助・協力する諸対策を作成する。

共同委員会の提案は、臨時朝鮮政府と協議した後、5年を期限とする朝鮮への4カ国の後見協定を作成するために、ソ、米、英、中（国民党中国）政府の審議を受けなければならない。

④全朝鮮的な緊急問題の解決とソ米両軍司令部間の行政経済分野の日常的な調整を図る対策を講じるため、ソ米両軍代表者会議を2週間内に招集する。

……

1945年12月29日、主席は執務室でラジオを通じてこのニュースを聞いていた。

後日、主席はこのことについてしばしば口にしたが、全く思いがけない決定なので非常に驚き、不機嫌になった。

もちろん、当時の朝鮮は脆弱で貧しい国であった。

特に、真の人民の政府さえ樹立していない有様であった。

だからといって、当事者である朝鮮人の参加やその意思も聞かず、3カ国の外相が集まって朝鮮問題を意のままに討議・決定するのは、徹頭徹尾、わが人民の自主権を蹂躙する行為だった。

そのような決定が採択されたのはわが人民の意思でもなかったし、誰かが請願したり要請したことでもなかった。

1945年12月31日、党中央組織委員会部長協議会が招集された。

主席は協議会で、『朝鮮問題に関するモスクワ3国外相会議の決定について』と題する演説を行った。

主席は演説で、自身の意図を説明した後、3国外相会議の決定が採択されたからといって、民主主義的臨時政府が決してひとりでに樹立されるのではない、この決定が妥当性があり、たとえ列強の後援が私心のないものだとしても、わが民族が進めるべき建国事業を外国が代行することはできない、われわれはこの決定に全面的な期待をかけてはいけないし、外国に依拠して建国をしようとしてもいけない、と強調した。

決定について支持か反対かと是非を論じていた協議会の参加者たちは、たとえ国際的な合意だとしても、朝鮮人の好みに合わなければ許さず、朝鮮革命の利益に合致してこそ受け入れる主席のしっかりした自主的立場に共感した。

「朝鮮に民主主義臨時政府を早急に樹立するか否かの問題は、われわれが民主主義民族統一戦線を結成して全ての愛国的民主勢力をしっかり結集するか否かに大きくかかっています。

われわれは3国外相会議の決定を支持し、実行する過程を通じて、各政党・大衆団体との統一戦線を一層強化しなければなりません」

主席はこの日、わが党が他の政党・大衆団体と協議して3国外相会議の決定を支持する共同声明を発表する問題、各道党委員会と大衆団体、そして個別的な人士の名義でもこの決定を支持する声明を発表すべきだとし、それに伴う措置も講じた。

わが国の各政党、各派は、解放された祖国に全人民の願う中央政府を一日も早く樹立しようという同じ立場を取っていた。

このようなとき、モスクワ3国外相会議の決定という国際的合意を云々しながら、外部勢力が介入したのである。

そういう意味で3国外相会議の決定は、外部勢力が朝鮮に統一政府を樹立してやるか、そうでなければ朝鮮人が自力で自主独立政府を樹立するかという分岐点になったとも言えた。

しかし、アメリカ帝国主義はこれを誤った方向に導く荒唐無稽な論調をでっち上げ、わが人民の前進を阻もうと狂奔した。

実際、モスクワ3国外相会議を急遽招集し、朝鮮に対する決

定を採択するよう仕向けたのはほかならぬ米国だった。

わが国に自主独立国家が建設される場合、それは朝鮮半島を「大陸を狙った短剣」「アジア大陸へ通じる出入り口」と見なし、その従属を重要な国策としてまで定めた米国にとって、自国の「国家利益」への挑戦となるからであった。

米国は内心非常に焦っていた。

モスクワ3国外相会議が比較的順調に開催されると、米国務長官バーンズはワシントンの指図に従って朝鮮問題を基本議題として持ち出した。

この日のバーンズの発言内容は後日になって公開されたが、朝鮮民族の自尊心を甚だしく踏みにじるものだった。

「朝鮮で長期的な軍政を実施し、軍政が終わった後10年間ソ連、米国、英国、中国の4カ国が行政機関を創設し、朝鮮人民に自主独立国家建設の自由を与えない。

『行政権、立法権、司法権』を掌握して信託統治を実施し、軍政と信託統治が終わる結果に従って後見制を実施する」

即座にソ連外相がこの提議に反対した。

彼の頑強な反対で、米国はその要求を実現することができなくなった。

3国外相会議ではソ連側の意見に従って、朝鮮人民に主権を移譲して民主主義臨時政府を樹立させ、朝鮮の民主主義的発展を保障するために5年間の後見制を実施するという決定を採択した。

しかし、主席はこの決定が採択される前にすでに、わが国に中央政府を樹立するための準備を推し進めていた。

革命は自主性のための闘争であり、自主性は国家主権によって保障される。人々の自主的権利は国家主権で集中的に現れ、勤労人民大衆が自主性を完全に実現するためには何よりも政権の主人にならなければならない。

このように政権建設問題が重要であるため、主席は抗日武装闘争時期、祖国が解放されれば真の朝鮮人民政府を樹立するという問題を『祖国光復会10大綱領』の第1条に明記していた。

そして祖国が解放されると、直ちに抗日革命闘士を全国の各地に派遣して各地方に自治機関を設置し、それを強化・発展させる方法で朝鮮人民の意思と利益を代表する統一的な組織体系と権能を持つ政権機関を創設するようにした。

1945年10月8日にすでに臨時の5道行政局(当時)が組織され、社会経済生活で現れる不合理な問題を是正するための対策が講じられた。

その年の11月19日、各道人民委員会代表の連合会議では、産業局、交通局、逓信局、農林局、商業局、財政局、教育局、保健局、司法局、保安局からなる行政10局の組織を宣布した。

当時、朝鮮駐屯ソ連軍司令官であったチスチャコフはスチコフ大将に次のように言った。

私はもともと軍人出身なので、社会政治や経済生活については

よく分からない。それで、パルチザン英雄である金日成同志も政権建設や経済問題については大きな関心を払わないだろうと思っていた。

しかし驚くべきことに、金日成同志は政治、経済、文化の各分野について専門家以上の該博な識見を持っているばかりでなく、国の統率者として各分野を非凡な指導力で導いている。

朝鮮には自分の右に出る者はいないと自称する「理論家」が大勢いるが、金日成同志の前では巨木の下の雑灌木に過ぎない。……

その後主席は、1946年2月5日に開かれた党中央組織委員会常務執行委員会で行った演説で、わが国にすでに中央政府を樹立できる基礎が築かれたと誇り高く宣言した。

1946年2月7日、各政党、各道人民委員会及び大衆団体指導者連席会議では、臨時人民委員会の樹立を全会一致で可決し、金日成主席を臨時人民委員会委員長に推戴した。

その後、わが党は反帝反封建民主主義革命の課題が完遂されるにつれて、国の具体的実情から出発して臨時人民委員会をさらに発展させるという課題を提示した。

主席は、人民政権を新しい革命任務の遂行にふさわしく民主選挙を通じて法律的に強化する方法で発展させるという方針を打ち出した。

それに従って、1946年9月5日に行われた臨時人民委員会第2

回拡大委員会では、11月3日に国の全地域で道・市・郡人民委員会委員選挙を一斉に実施することを決定し、選挙に関する規定を採択した。

選挙規定には、一般、平等、直接の原則に基づく秘密投票の方法で選挙を実施すると明記されていた。

1946年11月3日、わが国の歴史で初めて道・市・郡人民委員会委員選挙が行われた。

主席はこの日、平壌市第6号選挙区第52号分区に出向き、労働者出身の候補者に賛成投票した。

民主選挙の成果に基づいて1947年2月17日、平壌で道・市・郡人民委員会大会が招集された。

大会には道・市・郡人民委員会と民主的政党・大衆団体から選出された代表1159人が参加した。

大会では、最高主権機関である人民会議を創設することを決定し、大会に参加した代表5人当たり1人の比率で秘密投票の方法によって237人の代議員を選出した。

2月21日から22日まで人民会議第1回会議が開かれ、全人民の一致した意思と念願を込めて主席を人民委員会委員長に推戴し、最高行政執行機関である人民委員会を組織した。

人民委員会は、反帝反封建民主主義革命を引き続き遂行するために闘い、次第に社会主義へ移行する過渡期の任務を遂行しなければならなかった。

その後、1948年6月29日に開かれた各政党・大衆団体の指導

者協議会では、総選挙を実施し、それに基づいた最高人民会議を構成して各代表からなる中央政府である朝鮮民主主義人民共和国を創建することを決定した。

1948年7月に開かれた党中央委員会第2回会議では、朝鮮民主主義人民共和国憲法の実施と最高人民会議選挙のための活動において党組織に提起される課題を討議した。

1948年8月25日、国の全地域で最高人民会議代議員選挙が成功裏に行われた。

自由な雰囲気の中で行われた選挙には有権者の99.97パーセントが参加し、212人の最高人民会議代議員を選出した。

総選挙の輝かしい勝利に基づいて1948年9月2日、平壌では朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議第1回会議が開かれた。

最高人民会議では朝鮮民主主義人民共和国憲法を採択し、全朝鮮人民の一致した意思と念願を込めて金日成主席を朝鮮民主主義人民共和国内閣首相、国家元首に推戴した。

主席は1948年9月9日、わが人民の統一的な中央政府である朝鮮民主主義人民共和国政府を組織し、朝鮮民主主義人民共和国の創建を全世界に宣布した。

また、9月10日には『朝鮮民主主義人民共和国政府の政綱』を発表した。

朝鮮民主主義人民共和国は、全朝鮮人民の総意によって樹立された唯一の合法的国家であり、労働者、農民、勤労インテリをはじめとする人民大衆の利益を代表し、彼らの自主性を

徹底的に擁護する真の人民の政権である。

共和国の創建によって、朝鮮人民は自分の運命を自主的に切り開いていく力強くて尊厳ある人民となり、朝鮮民主主義人民共和国はれっきとした自主独立国家として国際舞台に堂々と登場することができた。

朝鮮民主主義人民共和国の創建によって、民主主義自主独立国家を建設するための朝鮮労働党の闘争は新たな段階に入った。

7. 人民の国を守って

1947年からわが国に対する武力挑発を強行し、局地戦争を年々エスカレートさせてきたアメリカ帝国主義は1950年6月25日未明4時、韓国軍をそそのかして全面的な武力侵攻を開始した。

アメリカ帝国主義者が侵略戦争を引き起こした目的は、わが国を揺らん期に転覆し、朝鮮半島を自国の植民地に、アジア大陸への侵略と世界制覇の野望を実現するための軍事的橋頭堡にするところにあった。

そうして、このときから3年間にわたって、わが人民の偉大な祖国解放戦争が繰り広げられた。

創建されて2年足らずの朝鮮民主主義人民共和国が、100余年の侵略史と世界「最強」を誇るアメリカ帝国主義を頭とする帝国主義列強の侵略を撃退するために繰り広げた祖国解放戦争は、熾烈さと対決の深刻さにおいて世界戦争史上その類例のない戦争だった。

アメリカ帝国主義は朝鮮戦争に自国の陸軍の3分の1、空軍の5分の1、太平洋艦隊のほとんどと地中海艦隊の一部、そして15の追随国軍と韓国軍及び日本反動をはじめおよそ200万人余りの大兵力を動員し、当時までは最も近代化された最新型の武力装備を投入した。

数的にも軍事技術的にも比べものにならないこの戦争で、わが人民と人民軍は主席の指導の下、祖国の自由と独立を立派に守り抜いた。

祖国解放戦争時期、わが党は戦争の最終的勝利を達成する上で決定的役割を果たした。

朝鮮労働党中央委員会政治委員会は、戦争が勃発した翌日の1950年6月26日、金日成主席を首位とする朝鮮民主主義人民共和国軍事委員会を組織し、ここに国家及び軍事の全ての権力を集中させた。

また、国の全ての活動を戦時体制に切り替え、全ての人的・物的力を戦争勝利へ動員することを討議・決定した。

6月27日、朝鮮労働党中央委員会政治委員会は全ての党組織と党員に送る党中央委員会の手紙を採択し、労働党、民主党、天道教青友党の道委員会委員長連席会議では各政党が統一戦線を一層強化し、戦争勝利を目指す闘争へ広範な人民を立ち上がらせることを強調した。

それに従って、各級党組織と政権機関、大衆団体の活動が戦時状況に即して改められ、人民軍の戦闘指揮体系が戦時に合わせて改編され、抗日革命闘士と優れた党員たちが人民軍に派遣された。

戦争勃発後、短期間に80万を超える青年が前線に志願し、主要な工場地区では労働者連隊などが組織されて前線に出動した。

主席は祖国解放戦争の日々、朝鮮労働党中央委員会委員長、朝鮮民主主義人民共和国内閣首相、朝鮮民主主義人民共和国軍事委員会委員長、朝鮮人民軍最高司令官として、前線と後方の重荷と祖国と人民の運命を一身に担い、折り重なる難関と試練を切り抜けてわが人民を輝かしい勝利へと導いた。

ポルトガルの元大統領フランシスコ・ダコスタ・ゴメスは次のように語っている。

「当時、米国が立てた作戦計画は、米国の側に立った西側諸国の参謀長、軍事専門家である数十人の将軍が何回も集まって討議した末につくり上げたものである。ところが、金日成主席はそれを単独で撃破した。

私はこれを目の当たりにし、金日成主席こそはこの世に一人しかいない天才的な軍事戦略家であり、偉大な総帥であることを知り尽くされた」

戦争挑発に関する報告を受けた主席は、主力部隊を速やかに前線に進出させて反攻撃集団を編制し、敵に強い打撃を与えて朝鮮人の気概を遺憾なく示すべきだとし、反攻撃戦略の実現で提起される問題を具体的に示した。

主席は、現段階におけるわれわれの戦略的方針は、直ちに反攻撃に移行して米国が朝鮮戦線に自分らの大兵力を投入する前に迅速な機動と連続的な打撃で敵を撃滅し、人民軍部隊を機動的に配置して米侵略軍の増援部隊が上陸でき

ないようにすることだと述べた。

この戦略的方針は、彼我の力関係を正確に計算した戦略で、敵の一挙一動を鋭く見抜き、敵の致命的な弱点を科学的に見極めた賢明な戦略であった。

当時、米国が本土から大兵力を引き入れるには少なくとも1カ月以上の時間がかかり、日本にある米第8軍の4個師団の兵力を朝鮮戦線に投入しようとしても1週間以上の時間を要した。

さらに米国は、戦争の遂行で軍隊の政治的・思想的・道徳的優越性の威力については見ようともしなかった。

敵のこうした弱点と、敵軍に比べた政治的・思想的及び戦略・戦術的優越性に基づき、朝鮮人民軍は戦争初期、前線に素早く力を集中して強い攻撃力を用意することができ、米軍が兵力を増強する前に敵の基本集団を撃滅・掃討し、反攻撃の目的を実現することができた。

主席は、反攻撃戦略を実現する上で提起される具体的な問題も明らかにした。

それは、三つの作戦からなる戦略的方針であった。

第1次作戦では敵の不意の侵攻を挫折させ、反攻撃に移って3日後にソウルを解放し、その後2日間に水原まで進出し、第2次作戦では8〜10日間に大田まで、第3次作戦では大邱を解放し、海岸界線まで進出して迅速に海岸防御に移り、米軍の大兵力が上陸できないようにすることだった。

主席は続けて、この戦略的方針を成功裏に実現するための威力ある方途は連続攻撃作戦であると教えた。

朝鮮人民軍は主席の命令に従い、全前線にわたって即時的かつ決定的な反攻撃へ移った。

わが方の地域の1〜2キロも侵攻していた敵の攻撃隊形はあっけなく崩れ、3日間に戦争を締めくくると豪語していた敵は、朝鮮人民軍の強力な攻撃に度肝を抜かれて敗走し始めた。

人民軍が敵の不意の侵攻を断固阻止し、わずか90分後に全前線にわたって決定的な反攻撃に転じたのは、敵にとってそれこそ青天の霹靂のようなことだった。

三つの攻撃方向に沿って、人民軍の攻撃隊形はまるで敵の胸板を突き刺す鋭い三つ穂槍のように、もっぱらソウルの敵陣に向けて進撃した。

人民軍の強力な反攻撃に出くわした敵は完全な崩壊の危機に瀕した。

6月28日の11時30分、ソウル市は完全に解放された。

英雄的な朝鮮人民軍はソウル解放作戦の成果に基づき、その後1カ月足らずの間に敵が占めていた領土の92パーセント、人口の90パーセント以上を解放する奇跡を創造した。

当時の人民軍の戦果を見ると、反攻撃の開始後3日間におよそ6万の敵兵を殺傷または捕虜にし、4万3000余挺の狙撃兵器を鹵獲し、1400余台の自動車、142門の各種の砲、その他飛行

機、艦船をはじめとする数多くの戦闘技術機材を敵の戦力から除去した。

敵もこれについて「全体の半分以上がソウル陥落前の3日間に戦死したり、負傷または捕虜になった」と慨嘆し、「陸軍本部は9万8000余人であった兵籍簿でわずか2万2000人しか確認できなかった」と悲鳴を上げた。

人民軍のこうした戦果は、敵に比べて兵力や戦闘技術機材が優れていたからではなかった。

敵も認めているように、韓国軍の兵力数は10万で、皆が米国製の兵器で武装し、米軍事顧問団が訓練を与えた。それに、空中作戦と海上作戦は米軍の空軍と海軍が全面的に受け持っていた。

しかし、開戦4日後にはその4分の3が行方不明となり、敵の基本集団は単に敗北しただけでなく崩壊した。

これは、主席が示した独創的な反攻撃戦略思想と、主要攻撃方向をソウルにするという大胆な軍事作戦の勝利であると同時に、大部隊戦と小部隊戦を組み合わせた主体的な軍事戦法の輝かしい勝利であった。

奇跡は陸地でのみ起こったのではない。

朝鮮東海に侵入し、傲慢に振舞っていた米艦船集団を朝鮮人民軍海軍は4隻の小さい魚雷艇をもって撃破し、米国侵略者に朝鮮人の気概を示したのである。

1950年7月初め、朝鮮戦争に焦点を合わせていた世界のマス

メディアは、朝鮮東海上の注文津沖で行われた海戦に関する記事や軍事論評家の文を大見出しで大々的に報じた。

「朝鮮人民軍の海軍、魚雷艇で米海軍の重巡洋艦を撃沈！」

「魚雷艇で重巡洋艦を撃沈、これは単なる戦果ではなく奇跡である」

「朝鮮人民軍海軍の4隻の魚雷艇は米第7艦隊所属の重巡洋艦『ボルチモア』号を撃沈し、1隻の軽巡洋艦を撃破した。これは、雄牛とツチバチとの戦いで巨体の雄牛がツチバチの針に刺されて完全に倒れたも同然である。これこそ世界海戦史上初めての奇跡中の奇跡である」

この報に接した世界の人々は驚きを禁じ得なかった。

主席が、朝鮮東海岸に侵入した米海軍の重巡洋艦を含む艦船集団が南へ進撃する人民軍の地上部隊と平和な都市や村に無差別の艦砲射撃を強行しているという報告を受けたのは、ソウルが解放された翌日の1950年6月29日の夕方だった。

主席は海軍司令官に、敵が意のままに振舞っているのを座視することはできない、どんなことがあっても敵の重巡洋艦集団を掃滅すべきだとし、第2魚雷艇隊を出動させて米艦船集団を掃滅する戦闘命令を下した。

海軍司令官は、主席の厳かな言葉に驚いた。

彼は、米第7艦隊所属の機動分艦隊が東海岸に侵入して戦闘行動に移ったということを知って対応策を立てていた

が、断固と立ち向かって海上戦を行おうとはせず、機雷を敷設したり海岸砲をもって防御することばかり考えていたのである。

それもそのはず、海へ出す戦闘艦船もなく、攻撃兵力としてはただ魚雷艇5隻が全部である第2魚雷艇隊があるのみだった。

それも1隻は故障して修理中なので、実際に戦闘に投入できる魚雷艇は4隻しかなかった。

敵の艦船集団は1万7300トン級の重巡洋艦1隻、1万4000トン級の軽巡洋艦1隻、3500トン級の駆逐艦1隻からなっていた。

全体の武力装備は203ミリ大口径砲をはじめとする各種口径の砲170余門、飛行機、複数の魚雷発射装置、3500余人の乗船兵員……。

敵が一名「海上に浮かぶ島」と呼んでいた「ボルチモア」号にしても、長さ205メートル、兵力数1700余人、各種艦砲69門に飛行機まで搭載していた。

反面、朝鮮人民軍海軍第2魚雷艇隊は、長さ21メートル、重量17トンの魚雷艇4隻と魚雷8発、12.7ミリ高射機関銃4挺、戦闘人員30人余りが全部だった。

彼我の力の差はあまりにも甚だしくて比べものにならなかった。

主席は海軍司令官に、魚雷艇をもって重巡洋艦のような大

きな艦船を攻撃するには近距離戦をすべきだ、重巡洋艦は舷高が高いから、魚雷艇が近くまで接近すると艦砲射撃ができない、と言った。

主席が教えたパルチザン式の戦法で戦えば必ず勝利するという確信に満ちて、人民軍海兵たちは敵の艦船集団を探して出港し、注文津海上で戦闘を繰り広げた。

3発の魚雷に命中された「ボルチモア」号からはすぐ大きな火炎が立ち上がり、しばらくして巨大な怪物は徐々に沈没し始めた。

戦闘開始4時間後の1950年7月2日9時10分、マストに星条旗を掲げて太平洋と大西洋を勝手に横行し、主人顔をしていた「ボルチモア」号、第2次世界大戦時期に米大統領専用艦船だと言われてきた重巡洋艦は悲惨にもその存在を終えた。

人民軍空軍の飛行士も祖国の青空を守って敵機を容赦なく撃墜した。

太平洋戦争で勇猛を発揮したという日本軍の特攻飛行士も、肉弾になって米軍の戦略爆撃機「B―29」を攻撃したが、その側にも近寄れずに強力な火力に遭って皆撃墜され、それ以来この爆撃機の名を聞いただけでも恐れをなして対戦する考えもできなかったという。

しかし、わが国の勇敢な飛行士たちは開戦15日後に米軍が「空の要塞」と誇っていた戦略爆撃機「B―29」とジェット機

「F―80」を撃墜して、敵の「空中での優勢」をことごとく粉砕した。

人民軍はこのような勢いで1950年7月4日、「常勝師団」として知られた米第24師団の「先遣隊」を烏山地域でわずか2時間にして壊滅させた。

7月20日、大田を解放する総攻撃戦を開始し、米第24歩兵師団と韓国軍第1師団、第7師団の兵力を完全に撃滅し、米第24師団長ディーンを含む数万人の敵兵を殺傷または捕虜にし、数多くの戦車、自動車、数百門の各種の砲、数万余挺の狙撃兵器をはじめとする兵器、戦闘技術機材を破壊・鹵獲する戦果を上げた。

大田解放作戦で輝かしい勝利を収めたことにより、人民軍は、米軍の「強大さ」に関する神話を余すところなく打ち破ってしまった。

祖国解放戦争は厳しかったが、集団的英雄主義を通じて、わが人民はもはやさげすまれてきた受難の多い植民地弱小国の人民ではないことを世界にはっきりと示した。

わが党は1950年7月13日、前線で党と領袖、祖国と人民のために勇敢に戦っている軍人たちを火線で入党させるようにした。

結果、人民軍内で党の隊伍が急速に成長し、軍人たちはアメリカ帝国主義侵略者との戦いでさらなる勇敢さと犠牲的精神を発揮した。

人民軍兵士は各決戦場で「私を朝鮮労働党員と呼んでくれ！」と叫びながら部隊の進撃路を開いた。

しかし、勝利への道は遠くて険しかった。

1950年9月に至り、戦争の形勢は急変して共和国には厳しい難局が横たわった。

朝鮮人民軍の英雄的な闘争によって惨敗を繰り返した米国は、自分らの侵略的目的をどうしても達成するために兵力を大々的に増強し、洛東江前線で「総攻勢」を繰り広げる一方、仁川地区で大規模の上陸作戦を企てた。

28万人余りの兵力、4700余門の大砲と970余台の戦車、1800余機の飛行機、300余隻の艦船を持つ敵の大兵力が朝鮮半島へ押し寄せてきた。

主席は直面した厳しい難局を打開するために、戦争第2段階の戦略的方針を示した。

それは、敵の進攻速度を最大限に遅らせつつ時間を稼いで人民軍の主力部隊を救出し、新たな後続部隊を編制して強力な反攻撃集団を形成し、計画的な後退を行うことであった。

この方針を貫徹するための最初のキーポイントはほかならぬ月尾島防衛戦だった。

当時、米軍は仁川上陸作戦に5万余の大兵員と数百隻の艦船、約1000機の飛行機を動員した。

月尾島の防衛者たちは9月13日から15日までの3日間、敵の駆逐艦3隻を含む各種の艦船13隻を撃沈・撃破し、敵の上陸を

遅らせることによって、仁川―ソウル地域防御部隊に貴重な時間を与え、この地域の全般的防御作戦の遂行に大いに寄与した。

仁川―ソウル地域防御部隊も、14日間も敵の攻撃を防いで人民軍主力部隊の組織的後退を成功裏に保障した。

後日米国のAP通信は、南部前線の朝鮮人民軍がいかに「国連軍」の追撃から抜け出したかというのは戦局の一つの謎であり、彼らは煙のように消えた、彼らはほとんど一夜のうちに姿を消した、と報じた。

米国は人民軍の組織的後退を防いでみようと狂気じみた軍事的攻勢を強行したが、人民軍部隊と人民は困難かつ複雑な後退を成功裏に果たした。朝鮮人民軍は早い時日内に反攻撃兵力をしっかりと固め、1950年10月下旬から反攻撃を開始した。

そうして、この時期から戦局は新たな段階に入るようになった。

反攻撃に移行した前線の主要攻撃方向の人民軍連合部隊は、わずか3〜4日の間に、米第8軍管下の第1、第9軍団、韓国軍第2軍団、トルコ旅団を清川江と大同江上流地域で大量に包囲・掃滅し、前線西部の敵の主力集団を全面的な崩壊状態に陥れた。

その日々、米第8軍司令官ウォーカーが人民軍の若い小隊長が率いる6人の襲撃班によって犬死にし、米軍が誇りにして

いた「将軍」らが「無卒将軍」となった。

わが党は、戦争の困難な中でもアメリカ帝国主義の野蛮な爆撃と略奪によって零落した人民生活を安定させるための対策を講じた。

1951年1月21日と3月19日、朝鮮労働党中央委員会政治委員会の決定に従って中央と道、市、郡に、その後には末端行政単位である里にまで戦災民救護委員会が設けられ、貧農と戦災民に莫大な量の国家穀物と衣服などの生活用品が供給され、労働者、事務員には生活必需品が供給された。

愛国烈士遺族と人民軍留守家族に対する国家的及び社会的な支援活動が広範に行われ、戦傷栄誉軍人学校と遺児学院、保育院、初等学院が建てられ、戦時教育に関する決定が採択されて戦時の状況でも教育活動は中断することなく続いた。

このような後方の復旧・整備は、人民軍を強め、人民軍部隊の戦闘成果を引き続き拡大させた。

1951年11月初めに開かれた朝鮮労働党中央委員会第4回総会では、当面の状況に照らして党を大衆的な政党に拡大・強化するための課題を提示した。

わが党は、総会の決定を貫徹するために1952年1月、新しい『朝鮮労働党規約』で党勢拡大活動の規範を現実的要求に即して制定し、前線と後方で愛国的熱意と献身性を発揮

した数十万の先進分子を入党させた。

人民軍だけでも短期間に約14万人の優れた軍人が入党した。

党中央委員会第4回総会が開かれたときから1年後、わが党は100万以上の党員と4万8933の初級党組織を持つ威力ある大衆的な政党に成長・強化された。

朝鮮戦争で莫大な軍事的・政治的敗北を喫したアメリカ帝国主義は最後のあがきをしつつ、新たな大規模の軍事攻勢を企図した。

1952年12月、米大統領に当選したアイゼンハワーは「交渉より行動が一番」だとし、朝鮮の東・西海岸で膨大な兵力による上陸作戦を展開して前線と後方を分離させ、人民軍の主力を一挙に包囲･掃滅するという冒険的な「新攻勢」の準備を進めた。

わが党は、情勢が複雑を極めているときほど党を組織的・思想的に強化し、それに基づいて戦争の最終的勝利を早めるための対策を講じた。

1952年12月、歴史的な朝鮮労働党中央委員会第5回総会が平壌の牡丹峰地下劇場で行われた。

主席は会議で『党の組織的・思想的強化はわれわれの勝利の基礎』と題する報告を行った。

総会後、各級党組織で総会文献受容討議が高い政治的・思想的雰囲気の中で行われた。分派主義、自由主義をはじめ

あらゆる反党的・非党的行為に対する強い思想闘争が繰り広げられた。

前線の情勢がますます緊迫していた時期に行われた党中央委員会第5回総会文献受容討議を通じて党員の党性が非常に高まり、党の戦闘力が一層強化された。

1953年1月、全ての党組織と党員に送った党中央委員会の手紙は、全ての党員と人民が侵略者にせん滅的な打撃を加えるための態勢をしっかり整え、もし敵が新しい軍事的冒険を強行するならばそれを粉砕し、アメリカ帝国主義侵略者を落日の運命に落ち込ませ、祖国の領土から最終的に追い出すための決戦にこぞって奮起するよう訴えた。

党中央委員会の手紙を支持して労働党員を先頭に全人民と人民軍将兵は、戦争の最終的勝利を目指す決戦にこぞって立ち上がる万端の準備を整えていった。

1953年1月下旬のT字型高地戦闘は、アメリカ帝国主義が「新攻勢」作戦の幕開けとして企んだ戦闘だった。

アメリカ帝国主義はT字型高地戦闘を「模範戦闘」だとうそぶき、3個師団の兵力と数多くの兵器、戦闘技術機材を小さいこの高地に投入した。

高地の人民軍勇士たちは、朝鮮人民軍最高司令部の命令に従って緊急に機動してきた砲兵部隊の強力な支援の下、堅固につくられた坑道陣地に依拠して波状攻撃を強行する敵に容赦なき火の雨を浴びせ、アメリカ帝国主義が最後の

力を振り絞って準備した「新攻勢」企図を放棄せざるを得なくした。

その後、人民軍部隊は1953年5月から7月下旬まで3回にわたって強力な攻撃戦を展開して多くの地帯で敵を大量に掃滅し、343平方キロの地域を占領した。

これらの攻撃戦は、敵に比べて人民軍の兵力が決定的に優勢であることを実証し、敵があえて停戦会談の幕裏で狡猾に策動しながら侵略戦争を続けるならば、より大きな破滅に直面するだろうということをはっきり示した。

アメリカ帝国主義はやむを得ず1953年7月27日午前10時、板門店で停戦協定に調印した。

こうして3年間の祖国解放戦争はわが人民の勝利に終わった。

金日成主席の指導の下に朝鮮労働党は、戦争の全期間、その隊伍をしっかり固め、戦闘的機能を絶えず高め、全人民と人民軍に対する導き手、組織者としての役割を立派に果たした。

また、人民軍を不敗の革命武力に強化・発展させ、チュチェの軍事戦略と戦法を巧みに適用し、後方を鉄壁のように固め、世界の革命的人民との連帯を絶えず強化した。

党と領袖に限りなく忠実なわが人民と人民軍は、無比の勇敢さと犠牲的精神、集団的英雄主義を余すところなく発揮した。

世界のメディアは「米国との戦争で発揮された朝鮮人民と軍隊の無比の犠牲的精神と英雄主義は奇跡をもたらした。彼らは驚くべきほど固く結束し、立ち遅れた兵器で米国という巨人を打ち負かす20世紀の神話を創造した」とし、世界「最強」を誇る米国に史上初めて惨敗を与えた朝鮮人民と、その導き手である朝鮮労働党に敬意を表した。

8. 伝説のチョンリマを駆って

3年間の祖国解放戦争を通じて、史上初めてアメリカ帝国主義の「強大さ」の神話を粉砕した朝鮮民主主義人民共和国と朝鮮人民は世界に英雄朝鮮、英雄人民として浮上したが、廃虚と化した都市と工場、爆弾の穴だらけの田畑を復旧するのは戦争に劣らぬ困難な闘争だった。

アメリカ帝国主義の野蛮な破壊行為によって5万余棟の工場、企業が全壊し、207万余棟の住宅と2万8632余棟の学校、4534余棟の病院と診療所をはじめとする保健医療施設、579棟の科学研究機関と8163棟の出版及び文化機関建物が甚だしく破壊された。

文字通りわが国は廃虚と化した。

ゼロの状態から再出発しなければならない戦後の人民経済をどの方面からどの段階を経て復興・発展させるべきかは、わが党に提起された焦眉の問題だった。

こうした状況の下で1953年8月、朝鮮労働党中央委員会第6回総会が開かれた。

金日成主席は総会で『全てを戦後の人民経済復興発展のために』と題する報告を行った。

会議では、人民経済が甚だしく破壊されて全般的な部門を

同時に復興するのが不可能な状況下で、復興建設を三つの段階に分けて進めることにした。

第1段階は、半年ないし1年の間に破壊された人民経済を全般的に復興建設するための準備と整備事業を進め、第2段階は、人民経済復興発展3カ年計画を遂行して人民経済の全ての部門を戦前の水準に回復し、第3段階は、5カ年計画を遂行して社会主義的工業化の基礎を築くことだった。

戦後、社会主義革命と社会主義建設を本格的に進めるのは、わが国の社会・経済状況と人民の生活上の要求からして緊切な問題として提起されていた。

解放後、わが人民は重要産業国有化と土地改革などの社会革命を通じて反帝反封建民主主義革命の課題を完遂し、社会主義革命の段階に入った。

戦争によってあらゆるものが甚だしく破壊され、人民の生活が零落した状況下で、社会主義への漸次的な移行は、わが国において社会経済発展の必然的な要求であったし、共和国を政治的・経済的・軍事的に強化するためにも切実に求められていた。

総会では、戦後の経済建設の基本路線が規定された。

それは、重工業の優先的な復興・発展を保障しながら、同時に軽工業と農業を発展させる方向へ進むことであった。

戦後の経済建設の基本路線は、わが党の主体的立場が具現された独創的な経済建設路線であった。

従来は軽工業を先に発展させて資本を蓄積してから重工業を建設したり、一定の期間重工業を強硬に建設してから軽工業を発展させるのが、経済建設における一つの公式と見なされていた。

わが党は史上初めて、既成理論や外国の経験にこだわらず、わが国の具体的な現実を踏まえて経済土台の構築や人民生活の向上の相互関係問題を最も合理的に解決できる道を明示した。

戦後の経済建設の基本路線に従い、わが党は、党員の党性を強め、戦後の復興建設で前衛的役割を強めるようにした。

そして全ての工場、企業が復興建設に必要な製品を優先的に生産・供給するようにさせる一方、戦争によって破壊された農業を速やかに復興するようにした。また、党・政権機関、大衆団体、経済機関の優れた活動家を派遣して破壊された工場、企業を計画的に復興し、労働者、事務員の住宅を建設して彼らの生活を安定させるようにした。

わが人民と人民軍軍人は、自力更生の革命精神と愛国的献身性を高く発揮し、降仙製鋼所をはじめ数多くの工場、企業で停戦後わずか2週間目に一部の施設を復旧して操業を開始した。鉄道部門の労働者は、停戦後1週間にして幹線鉄道の列車運行を行った。

こうして戦後の復興建設の準備段階の課題は、わずか5カ月間に見事に遂行され、1954年からわが人民は3カ年人民経済計

画の遂行に入るようになった。

この時期、分派分子と事大主義者、教条主義者は既成理論や外国の経験のみを絶対化し、当面の情勢とわが国の具体的実情に合わない主張を持ち出してわが人民の前進を妨げていた。

主席は、人民に社会主義に対する信念を抱かせ、社会主義革命と社会主義建設を本格的に推進させるために、1955年4月、党中央委員会総会でわが革命の性格と課題に関するテーゼを発表した。

主席はテーゼで、わが革命の発展過程とわが国の戦後の情勢を科学的に分析した上で、わが革命の性格と基本任務を示した。

金日成主席は次のように述べている。

「社会主義へ進む過渡期の現段階でわが党の果たすべき基本任務は、労働者と農民の同盟を一層強化しながら、戦後人民経済の復興発展のための闘争で勝ち取った成果を踏まえて、社会主義の基礎を建設することである」

この時期、主体性を確立するためのわが党の闘争において転機となったのは、1955年12月に行われた朝鮮労働党第1回思想活動家大会だった。

主席は大会で、『思想活動において教条主義と形式主義を一掃し、主体性を確立するために』と題する歴史的な演説を行った。

主席は演説で、思想活動において主体性を確立するための

原則的な問題を明らかにし、次のように述べた。

「わが党の思想活動における主体とはなんでしょうか。われわれは何をしているのでしょうか。われわれは、どこかよその国の革命を行っているのではなく、まさに朝鮮革命を行っているのです。この朝鮮革命こそ、わが党の思想活動の主体なのです。従って全ての思想活動は、必ず朝鮮革命の利益に服従させなければなりません」

この大会を契機に、わが党は思想分野において主体性を確立するための闘争を優先させながら、政治における自主、経済における自立、国防における自衛の原則を貫徹していった。

わが党はまず、大国主義者、修正主義者の圧力に屈したり、誰かの顔色を窺う事大主義的傾向を徹底的に克服し、わが国の実情とわが人民の志向と要求に即して路線と政策を立て、それを自分の力で貫徹するようにした。

わが党が革命と建設において自主的芯をしっかり堅持し、自分の信念と意志によって路線と政策を立てて実行したため、わが人民は社会主義建設を自分の方式で推し進めることができた。

わが党と人民は英雄的な闘争を繰り広げて、戦後廃虚の上で3カ年人民経済計画を2年8カ月で立派に完遂した。

1956年に至って工業総生産額は戦前の1949年に比べて1.8倍に伸び、穀物生産も戦前の水準を上回った。

結果、産業の植民地的跛行性が著しく克服され、経済の自

立的土台が築かれ、経済全般で社会主義的経済形態の支配的地位が強化された。

こうした成果に基づいて、わが党は人民経済発展5カ年計画を遂行するための闘争へと人民を奮い立たせた。

5カ年計画を遂行するためには、いろいろな困難を克服しなければならなかった。

5カ年計画は膨大な投資と高い技術を要したが、当時われわれには資材と資金が不足し、技術も立ち遅れた状態にあり、人民生活も戦前の水準に至っていなかった。

事大主義者と保守主義、消極性の虜になった人たちは、難関に屈して前進速度を緩めようと言い出し、一部の人は外国から借款を受けることを提案した。

その上、帝国主義者と世界反動勢力の「反共」騒ぎがいつにもまして強まり、大国主義者は、5カ年計画が具体的な可能性を考慮に入れずやたらに作成されたと非難した。

こうした困難なとき、わが党はひたすら人民大衆を信じ、彼らを奮い立たせて社会主義建設で大高揚を起こすことを決心した。

1956年12月に開かれた朝鮮労働党中央委員会総会では、5カ年計画の初年である1957年の人民経済計画とその遂行方法が討議された。

総会で当面の難関を克服して社会主義建設で一大高揚を起こすという革命的方針を提示した主席は、その足で降仙製鋼

所を訪ねて幹部及び模範労働者の前で『内部の潜在力を最大限に引き出し、さらに多くの鋼材を生産しよう』と題する演説を行った。

主席は、党中央委員会12月総会の基本精神と5カ年計画の膨大な課題と国内外の情勢、翌年の人民経済計画遂行で提起される障害と難関について述べ、党は革命の主力部隊である労働者階級を信頼し、皆さんを頼りにしている、皆さんが来年に鋼材を1万トンだけ増産すれば、国が一息つける、逼迫した鋼材問題の解決いかんは、全て降仙製鋼所の労働者の闘争にかかっている、われわれの前進を阻む消極性と保守主義を粉砕し、不足する国の鋼材問題を解決するために全力を尽くそう、とアピールした。

演説の終わりに主席は、降仙製鋼所の労働者たちが党中央委員会12月総会の決定を支持して集団的革新運動の烽火をさらに高く掲げることを熱烈に呼び掛けた。

主席のアピールに応えてわが人民は「チョンリマを駆る勢いで前進しよう！」というスローガンを高く掲げ、社会主義建設の全ての部門で革命的大高揚を起こした。

降仙の労働者たちは内部の潜在力を極力引き出し、設備の使用率を最大限に高め、消極性と保守主義、技術神秘主義を打破し、年産6万トン能力の分塊圧延機で12万トンの鋼片を生産する奇跡を生み出した。

金策製鉄所では年産19万トン能力の設備で27万トンの銑鉄

を生産し、黄海製鉄所では1年足らずの間に自らの力と技術で大型溶鉱炉を建てた。

全国の農民も3カ月以上続いた日照りを克服して農業生産で革新を起こした。

こうしたかつてない人民挙げての革命的高揚の中で、膨大な5カ年計画の初年度の課題が成功裏に遂行された。

アメリカ帝国主義と敵対勢力の「反共」「北進」騒ぎも粉砕された。

大衆の間でわが党の権威と威信は非常に高まり、党と人民の統一団結が一層強化され、社会主義建設がかつてない速いテンポで推進され、社会主義工業化の基礎を築く事業が成功裏に進められた。

わが国で社会主義建設の大高揚とチョンリマ運動はこのように始まった。

歴史的な12月総会を契機に起きたチョンリマ運動は、わが党の賢明な指導の集中的な表出であり、自力更生、刻苦奮闘の革命精神と朝鮮労働党の伝統的な大衆工作方法の輝かしい具現であった。

チョンリマ運動は、経済と文化、思想と道徳の各分野であらゆる立ち遅れたものを一掃して絶えず革新を起こし、社会主義建設を最大限に促す数百万の勤労者の大衆運動となった。

「一人はみんなのために、みんなは一人のために！」

これは当時、全国に広がったチョンリマ作業班運動を象徴

するスローガンとなった。

進んだ作業班は立ち遅れた作業班を助け、後れている人は進んでいる人を追いつき、追い越すために努力しながら互いに助け、協力するチョンリマ作業班運動の炎の中で、わが国では農業協同化と個人商工業の社会主義的改造も成功裏に完成した。

これと共に、わが人民は技術神秘主義、保守主義を粉砕し、トラック、トラクター、ブルドーザー、掘削機、8メートルターニング・ミルなど、当時近代工業の精粋とされていた設備を次々とつくり出した。

1950年代にアメリカ帝国主義を打ち破り英雄朝鮮として名を轟かせたわが国は、1960年代には社会主義建設の大進軍を通じてチョンリマ朝鮮として世界に名を馳せた。

わが党の大衆指導方法は現実で大きな威力を発揮し、わが人民はチョンリマを駆る勢いで5カ年計画を2年半の間に完遂した。

1960年度の工業総生産額は1956年に比べて3.5倍、穀物生産量は1.3倍以上増え、国の総生産額で工業の占める比率は71パーセントになり、わが国は社会主義的生産関係と自立的民族経済の強固な土台を持つ社会主義工業・農業国になった。

わが党は全国青年総動員大会を開き、大高揚のための闘争で先鋒隊、突撃隊の役割を果たすよう青年を奮い立たせ、第2回全国チョンリマ作業班運動先駆者大会を開き、チョンリマ作業班運動を一層深化・発展させるようにした。

そうして、革命的大高揚の熱風は全国にさらに激しく巻き起こった。

わが党は新たな革命的大高揚を引き続き堅持しながら、社会主義工業化を完成するための闘争を速いスピードで推し進めた。

1969年12月に開かれた朝鮮労働党中央委員会第4期第20回拡大総会は、7カ年計画遂行の最終段階の課題を討議し、第5回党大会に際して7カ年計画を完遂しようと呼び掛けた。

全ての党員と勤労者は党のアピールに応えて、人民経済の各部門で絶え間ない奇跡と革新を起こし、その過程で新しいチョンリマ速度、チョンサンリ精神、チョンサンリ方法が生まれ、一般化された。

革命的大高揚によって7カ年計画は成功裏に完遂された。

7カ年計画を遂行する期間、国防建設に追加的に大きな力を振り向ける状況下でも工業生産は年平均12.8パーセントの成長を記録し、1970年の工業総生産額は1956年に比べて11.6倍、そのうち生産手段の生産は13.3倍、消費財の生産は9.3倍に増大した。

工業と農業の総生産額で工業の占める比重は1956年に34パーセントだったが、1969年には74パーセントに伸びた。

工業部門では重工業が速やかに発展して自らの強力な機械製作工業を中核とする基幹部門を全部揃えるようになり、軽

工業部門でも前進が遂げられて、消費財の需要を自力で十分に充たせる近代的な軽工業基地が整えられた。

強力な重工業基地に依拠して全面的な技術改造が成功裏に推し進められた結果、人民経済の全ての部門は近代技術の土台の上に引き上げられた。

工業生産の機械化の比重が高まり、一部の部分はオートメ化された。

農業で水利化体系が立てられ、電化が実現し、機械化、化学化においても前進が遂げられた。

こうしてわが国では、社会主義工業化が14年という短期間に実現し、わが国は自立的な近代工業と発達した農業を持つ社会主義工業国になった。

社会主義工業化の実現によって、わが国では社会主義の物質的・技術的土台がしっかり築かれた。

9. 並進の道

わが党はそれまでの数十年間、アジア太平洋地域の情勢を科学的に分析した上で自衛的軍事力を築き、今日は強力な核抑止力をもって敵対勢力の戦争挑発策動をことごとく粉砕することによって、朝鮮半島と世界の平和と安全をしっかりと守っている。

その過程でわが国の軍事力は、世界を驚嘆させる飛躍的な発展を遂げた。

世紀を超えて続く敵対勢力の絶え間ない新たな戦争挑発策動のため、常に核戦争の危険が漂う世界最大のホット・スポットである朝鮮半島で戦争を防止し平和を守るのは、世界の平和と安全を保障する上で焦眉の問題となっている。

このような厳しい環境の中で、わが党は自衛の国防力を高度に近代化し、質と量の両面から固めるための活動を系統的に推し進めた。

こうしてわが国の国防工業部門では、主体的先端武力装備を意のままにつくり出しており、最新型戦略兵器を開発することによって、アメリカ帝国主義の侵略と核威嚇の歴史に終止符を打った。

前述したように、アメリカ帝国主義は1950年6月25日、新生朝鮮に反対する戦争を挑発し、膨大な侵略兵力を動員した。

しかし、党の周りに固く団結したわが人民の決死抗戦によって敗北を繰り返すようになると、わが国で核兵器まで使用しようと企んだ。

もちろん、世界の多くの平和愛護国と人民の抗議と糾弾によってアメリカ帝国主義の計画は実現されなかったが、そのときからアメリカ帝国主義はわが国に対する核兵器使用を既成の事実とし、戦後数十年間、わが人民を核をもって威嚇した。

去る祖国解放戦争の経験とアメリカ帝国主義の恒常的な戦争挑発策動から祖国と人民をしっかり守るために、わが党は国防力の強化を目指す活動を力強く進めてきた。

その活動で初の転機となったのは、朝鮮労働党中央委員会第4期第5回総会だった。

党中央委員会第4期第5回総会が開かれた1960年代の前半期、情勢はアメリカ帝国主義の新たな戦争挑発策動によって一層緊張していた。

アメリカ帝国主義は核戦争、「局地戦争」「特殊戦争」に共に対処するという新たな戦略を打ち出し、侵略戦争の準備を推し進める一方、小さい国を一つ一つ侵略しようと露骨に策動した。

1962年10月、アメリカ帝国主義がキューバ共和国に反対して起こしたカリブ海の危機は、その代表的実例である。

そのとき、アメリカ帝国主義はわが国に反対して韓国に新型兵器を大々的に搬入し、戦争挑発策動を一層強化した。

1962年の1年間だけでも、「U―2」スパイ機を共和国領空に侵入させた事件をはじめ、1487件の敵対行為を働いた。

わが党は、当面の重大な情勢に対処して経済建設を促進する一方、国防力を強化するための決定的な対策を講じた。

1962年12月10日から14日にかけて歴史的な朝鮮労働党中央委員会第4期第5回総会が開かれた。

総会で金日成主席は、現情勢と関連して経済建設と国防建設を並進させるという新たな戦略的方針を打ち出し、経済建設を促進する一方、国防力を一層強化するための一連の重要な対策を講じた。

経済建設と国防建設の並進という新しい戦略的方針の基本的要求は、国防建設の比重を経済建設に劣らず高め、経済建設と国防建設を共に掌握して引き続き高い速度で推し進めることによって、国防力と経済的土台を強化し、人民生活も向上させることであった。

総会では、全ての党員と勤労者が常に緊張した動員態勢を堅持し、「片手には銃を、片手には鎌とハンマーを！」というスローガンを掲げて社会主義建設を最大限に推し進め、国防力を一層強化しなければならないと強調し、必要な決定を採択した。

かつてわが人民は、軍事力が弱いせいで侵略者に国を奪われ、亡国の民の運命を強いられざるを得なかった。

このような歴史の苦い教訓からわが党は、総会後、自衛的国

防力を強化するための活動を力強く推し進めた。

まず、国防力の中核勢力である人民軍を強化する活動が優先的に行われた。

1963年2月、主席は大徳山の軍営を訪れ、「一当百」の戦闘的スローガンを提示した。

「一当百」のスローガンは人民軍の幹部化、近代化を進め、全ての軍人を政治的・思想的・軍事技術的にしっかり準備された勇猛なつわものに育てられる革命的な建軍方針である。

わが党は全ての軍人を「一当百」に準備させるため、彼らを政治的・思想的に武装させることに深い関心を払った。

次に、武力装備を近代化する活動をより力強く推し進めた。

そのためにわが党は、1964年6月、国防科学研究機関を創設して武力装備の近代化を進められる科学技術的な保証をもたらし、1967年には人民軍の武力装備の近代化に必要な各研究委員会を設け、自立的国防工業を急速に発展させるための革命的な措置を講じた。

また、全人民武装化と全国土要塞化を推し進める活動にも深い関心を払った。

わが党は、1959年1月に創建された労農赤衛軍を強力な民間軍事組織として強化・発展させるため、除隊軍人をはじめとする優れた青壮年でその隊伍を固め、整然とした指導体系を確立し、訓練を一層強化するようにした。

周知のように、去る朝鮮戦争のとき、アメリカ帝国主義者はあらゆる蛮行を働いた。これは、朝鮮人民の心の中に永遠に癒えない傷痕、しこりとして残っていた。

人民はわれわれにも銃をくれ、銃をもってヤンキーどもと戦って仇を討つ、と口を揃えてわが党に申し出た。こうして労農赤衛軍が創建されたのである。

党の並進路線を貫徹するために全人民が奮い立った。

国防工業に従事する勤労者だけでなく、全人民が自分の故郷、自分の職場を自分の力で守らなければならないという覚悟を持ち、国防力の強化にこぞって立ち上がった。また全国土を要塞化し、対空防御と海岸防御を強化し、地下に多くの工場を建設する事業が本格的に推し進められた。

わが党は、後方を強固にすることに力を入れて、軍需工業を発展させ、物資の予備を十分に確保し、全ての工場が戦時の状況でも生産を続けられる準備を整えるようにした。

また、有事の際には人民経済の全ての部門が軍事に服従するように準備を整えた。

こうして、わが人民は増大する敵対勢力の軍事挑発策動の中でも社会主義建設を力強く推し進めることができた。

1968年に起こった武装情報収集艦「プエブロ」号拿捕事件を通じてもそれがよく分かる。

1968年1月23日、海上巡察任務遂行中の朝鮮人民軍海軍の艦艇は、元山沖の麗島から7.6カイリの水域に侵入してスパイ行

為を働いていた「プエブロ」号を拿捕し、乗組員80余名を捕らえた。

「プエブロ」号は米中央情報局から直接派遣された武装情報収集艦であり、そこにはレーダーによって外国の軍事基地の位置を探し当てる、極めて精密かつ近代的な各種の情報収集設備が備えつけられていた。

「プエブロ」号の乗組員が持っていた地図にはわが国の軍事基地の位置が記されており、また、艦船位置日日記録帳にはすでに前年12月、上部の命令で日本の佐世保港を出航し、わが国の領海に何回も侵入してスパイ行為を働いたことが詳細に記録されていた。

「プエブロ」号の拿捕は、主権国家である朝鮮民主主義人民共和国の正当な自主権の行使であり、国の尊厳と安全を守るための朝鮮人民軍の自衛的措置であった。

午前2時に「プエブロ」号拿捕の急報を受けた米大統領ジョンソンは、「プエブロ」号は公海上で航海中だった、スパイ行為を働いていない、と強弁し、盗人猛々しく報復を云々し、わが国を脅かした。

米国は1月24と25日に相次いで「国家安全保障会議」を開き、「軍事的報復措置」を取ることを決定した。

それに従って、ベトナムへ向かっていた核空母「エンタープライズ」号と4隻の駆逐艦からなる艦隊を朝鮮沿海方向に機動させた。

また、1つの飛行大隊を韓国に急派し、日本・韓国駐屯の米軍に非常動員令を下した。

そして、空母「ヨークタウン」号と「レーンジャー」号、武装情報収集艦「バナー」号を次々と出動させ、「元山を爆撃する」「船を奪取する」と騒ぎ立て、情勢を戦争瀬戸際に追いやった。

「プエブロ」号の拿捕後3日目の1月26日、朝鮮駐在のある国の大使は、この事件は重大な結果を招きかねない、船と乗組員を公海上に追放するのが望ましいという自国政府の意思を公式に共和国政府に伝達した。

戦争策動に狂奔する米国との対決で、果たして朝鮮が耐えられるのか、報復を云々して核の棍棒を振りかざす米国が果たしてどんな決断を下すのだろうか。

世界の耳目がわが国へ注がれていた厳しいとき、主席は金正日（キムジョンイル）国防委員長と席を共にした。

主席は国防委員長に、最高司令官の立場で「プエブロ」号をどう処理すればよいのか決心してみるようにと言った。

国防委員長は、米国が降伏書を出す前には絶対に「プエブロ」号の船員を釈放しないし、たとえ降伏書を出すとしても「プエブロ」号はわれわれの戦利品として返さない、将来にはわれわれの人民軍が拿捕した米軍情報収集艦を博物館に展示して、次世代に、これはわれわれがアメリカ帝国主義者から奪い取った戦利品だと言って上げる、と断言した。

それからしばらく経った2月8日、主席はある演説で、われわれは戦争を望まないが、決して戦争を恐れてはいない、わが人民と人民軍はアメリカ帝国主義者の「報復」には報復で、全面戦争には全面戦争で応えるであろうと宣言した。

わが人民と人民軍は最大の臨戦態勢に入った。

当時の緊迫した情勢のため、人民軍では準備していた芸術公演やスポーツ競技を全て中止した。

これについて報告を受けた国防委員長は、米国が戦争熱に浮かされて傲慢に威嚇するほど、全国が賑わうように歌も高らかに歌い、これ見よがしにスポーツ競技も行うようにした。

そうして、全軍的な記念行事が予定通り行われ、人民代表団が各人民軍部隊に派遣され、全国農業大会も日程通りに開催された。

大敵が襲いかかっても微動だにせず、自信に満ちて事態に応じるわが党と人民の気概の前で、米国はついに屈服した。

当時、ある国の出版物は次のような文を載せた。

「『果たしてワシントンは、平壌を屈服させることができるだろうか』

政見の違う100人の人士はこの質問を受けて一様に答えた。

『もう戦争は終わった。平壌は勝った』」

1968年12月23日、米国は「プエブロ」号の不法侵入とスパイ行為を認め、朝鮮民主主義人民共和国政府に正式に謝罪した。

米大統領ジョンソンは謝罪文を読んでみて、「米国が生まれて歴史に残した謝罪文はただこれ一つだけである」と慨嘆した。

外国のある図書には、武装情報収集艦「プエブロ」号拿捕事件をめぐる朝米対決の結果について次のように評した。

「『プエブロ』号拿捕事件で一体誰が謝罪し、誰が勝利したのか。屈服したのは米国である。

『プエブロ』号が拿捕され、乗組員が朝鮮に抑留されているにもかかわらず、米第7艦隊は静かに朝鮮海峡を離れてしまった。

米兵士の捕虜生活はほぼ1年近くかかり、同年12月23日、米政府が領海侵犯を認め、謝罪文を発表した後、彼らはやっと釈放された。

……朝鮮で敗北したジョンソン大統領は再選できなかった。

……ケネディのキューバ危機は、米国だけでなく全世界で記録映画としてしばしば再放映されているが、『プエブロ』号拿捕事件をめぐる朝米軍事対決と米国の屈服はそれ以上の歴史的意味を持つ事件である」

後日、金正日国防委員長は「プエブロ」号を1866年に米国の侵略船「シャーマン」号が沈没された大同江のその位置に移し、そこを朝鮮に対する米国の侵略史を見せる博物館にするようにした。現在「プエブロ」号は、祖国解放戦争勝利記念館が位置した普通江畔に展示されている。

「プエブロ」号を見て回った一外国人は、「ヤンキーどもは口を開けば『自由の女神』像と世界第一の軍事力が米合衆国の象徴だと公言している。それは誤った見解である。米国の象徴は、虜になって大同江畔に係留されている『プエブロ』号である」と語った。

米海軍の一退役少将は「プエブロ」号拿捕事件について追憶しながら、米海軍史において最も恥ずかしい日が三つあったが、その一つが「プエブロ」号拿捕事件だと言った。

「プエブロ」号拿捕事件があった翌年の1969年、朝鮮人民軍空軍によって米国の「EC―121」大型スパイ機が撃墜されたとき、世界は今一度驚いた。

「いかにして小さな国の朝鮮が巨大な悪魔の帝国―米国に強打を与えることができたのか。いかにして朝鮮は米国の挑発に対応できる力を持つようになったのか」

それは、わが党の並進路線とそれを無条件に貫徹してきたわが人民の闘争の結実であり、わが祖国と人民は1960年代に今一度英雄朝鮮、英雄人民の気概を世界に誇示した。

10. 党活動における新たな転換

1960年代はわが祖国において激変の時代だった。

当時わが党は、対外的に世界の自主化と国際共産主義運動の統一と団結を実現するための闘争の先頭に立っていたし、対内的には第4回党大会で提示された第1次7カ年計画の高い目標を占領する闘争を力強く繰り広げていた。

全面的技術改造の旗印を高く掲げて、わが人民は年平均19.1パーセントの経済成長を成し遂げていた。

帝国主義者の新たな戦争挑発策動が露骨になり、国際共産主義運動内に修正主義の毒素が流入して人々の思想を変質させていたときがまさにこの頃だった。

まさにそうしたときの1964年6月19日、偉大な指導者金正日同志が朝鮮労働党中央委員会で活動を開始した。

後日金正日国防委員長は、そのときのことを振り返りながら、栄光はこの上なく大きかったが足取りは重く、胸は使命感で高鳴ったが気持ちは錯綜していたと語った。

「率直に言って、私たちはあのとき、今後多くのことを教えてもらいたいと言う金正日同志の謙虚な言葉をそのまま受け入れたとしても過言ではない。とにかく、10余年間、あるいはそれ以上の党活動経歴を持っている私たちが、新参の

金正日同志を迎えたからである。しかし、私たちが教えることは果たして何かと考えるようになったのは、その後のことである。その当座は、何よりも誇らしく、嬉しく、光栄に思うばかりだった」

これは後日、1960年代に党中央委員会で活動した一幹部が金正日国防委員長との最初の対面について回想した文章である。

金正日国防委員長が党中央委員会で活動を始めてからしばらく後のことである。

党中央委員会本庁舎の前庭に人々が集まって話し合っていた。

党中央委員会本庁舎の屋上に、党旗がはためいていたのである。

党旗を掲揚するようにしたのは、ほかならぬ金正日国防委員長だった。

金正日国防委員長の息吹、金正日国防委員長の意志はこのように静かに人々の胸に流れ込み始めた。

金正日国防委員長は、あの旗は火の海をくぐり抜け厳しい試練の峠を越えてきた革命の旗であるとし、次のように述べた。

「わが党は金日成同志が創建し導く金日成同志の党であり、金日成同志の思想と指導を実現する政治組織です。

わが党は創建当初から金日成同志の党です。党中央委員会に勤務する幹部は、わが党の根源についてしっかりと認識しなければなりません。

わが党について語るとき、金日成同志の尊名と切り離して考えることはできません。わが党は昨日と今日だけでなく、今後も永遠に変わりなく栄えある金日成同志の党として強化され発展しなければなりません。

わが党を永遠に金日成同志の党として強化、発展させること、これが私の畢生の課題です」

金正日国防委員長が担っている使命感と責任感について改めて思い知らせる言葉である。

「わが党の旗の歴史は、金日成同志が打倒帝国主義同盟を結成し革命の赤旗を掲げたときから始まりました。

そのときから、わが党の根もしっかりと張り始めました。

わが党の歴史は赤旗と共に歩んできた最も栄えある輝かしい歴史です。

わが党旗には金日成同志の偉大な革命活動史がそのまま映されています。

これからは、われわれがあの赤旗を高くひるがえすべきです。

革命の前途にいかなる難関と試練が立ちはだかろうと、われわれは革命の赤旗を高く掲げ、金日成同志の偉業を達成するため一層強く闘っていかなければなりません。

金日成同志は、初期革命活動時期の青年共産主義者である金赫、車光秀について感慨深く回顧し、私を党中央委員会で活動させると言いました。

昨日、金日成同志から党中央委員会で活動する任務を

受けた私は、感無量である一方、党と革命に対する責任が一層重くなるのを感じました。

私は金日成同志に一層忠誠を尽くし、金日成同志の意図通りわが党を担っていく決心を固めました。

党中央委員会はわが革命の最高参謀部であり、われわれはまさにここで活動する職業的な革命家です。

わが革命の最高参謀部で、わが党の創建者であり偉大な指導者である金日成同志の身近で、その革命戦士として活動するより大きな栄誉と誇りはありません」

党活動の基本を領袖中心論の見地から定立した金正日国防委員長の言葉は、朝鮮労働党史に明記すべき貴重なものだった。

1967年5月に行われた朝鮮労働党中央委員会第4期第15回総会は、領袖の革命思想に基づいた党隊伍の統一と団結を強化するための朝鮮労働党の闘争において大きな意義を持つ歴史的な会議だった。

この会議が成功裏に行われ、会議以降党活動に画期的な転換がもたらされたのは、全て金正日国防委員長の指導によるものだった。

これに先立って1967年4月中旬に開かれた朝鮮労働党中央委員会幹部会議では、党内に潜入して面従腹背しながら、党の組織活動と思想活動をはじめ革命と建設の各分野に悪影響を及ぼした反党修正主義分子らの罪業がことごとく暴露された。

金正日国防委員長は会議の過程で、党内に唯一思想体系を確立すべきだという決心をさらに固め、われわれの主張する党の思想体系は名実共に党の唯一思想体系であり、それはすなわち金日成主席の思想体系を意味すると明らかにした。

このときから朝鮮労働党は唯一という単語を使うようになり、これは、唯一という文字をもって党の統一団結の組織的・思想的基礎を不変のものにした古典的定式化だった。

1967年5月4日から8日まで行われた歴史的な朝鮮労働党中央委員会第4期第15回総会では、党の唯一思想体系を確立する問題が討議され、反党修正主義分子らが党と革命に犯した罪業を暴露・粉砕する思想闘争が繰り広げられた。

総会は、会議参加者の一致した意思に従い、反党修正主義分子らを党から除名する断固たる措置を取った。

総会では、党の唯一思想体系の確立を党の思想活動の総体的方向と規定し、反党修正主義分子らの及ぼした思想的毒素を一掃し、全ての党員と勤労者をわが党の唯一思想、金日成主席の革命思想で武装させるための全党的な闘争を繰り広げることを決定した。

党の唯一思想体系を確立する活動は、党員の党生活を強化し、革命課題を遂行するための実践活動と密接に結びついて行われた。

金正日国防委員長の卓抜した思想的・理論的活動と賢明な指導によって、1970年代にわが党は金日成主義を最高綱領と

する人民大衆の党としてさらに強化された。

1974年2月19日、金正日国防委員長は朝鮮労働党第3回思想活動家大会で行った歴史的な結語『全社会を金日成主義化するための党の思想活動の当面のいくつかの課題について』で、金日成主席の革命思想を金日成主義として定式化して宣布した。

金日成主義の真髄をなすチュチェ思想は、人類思想史において新しく発見された独創的な思想であり、人間中心の新たな哲学的原理とチュチェの社会・歴史原理、革命と建設の指導的原則を明らかにしている。

チュチェの革命理論は、新しい時代の革命実践が提起した問題に解答を与えた革命理論であり、チュチェ思想に基づいて現時代の民族解放、階級解放、人間解放に関する理論を全面的に盛り込んでいる。

金日成主義はまた、指導方法問題を新しく提起して解明し、独自の構成部分として体系化した。

金日成主義がチュチェの思想、理論及び方法の全一的な体系として定式化されることによって、わが党は人民大衆の自主偉業を実現するための指導思想を持つようになった。

金正日国防委員長は、金日成主席の革命思想を金日成主義として定式化するため、昼夜を分かたぬ思想・理論活動を展開し、労働者階級の100年思想史を総括した。

その日々に耽読した古典は大変な量で、後日金正日国防委員長

は、自分が読み通した書籍を積み上げたら、チュチェ思想塔の台石ほどになるだろうと言った。

金正日国防委員長は、全社会を金日成主義で一色化できる全ての主体的・客観的条件が十分に整えられた1970年代中頃、全社会の金日成主義化をわが党の最高綱領として宣布した。

その後、わが党は1970年代に、革命と建設で飛躍的な成果を達成した。

経済部門の成果を見てもそれがよく分かる。

1974年の下半期だけでも、数千件の新しい技術と発明によって数億ウォンの利潤を得、4万5000トンの鋼材を生産し、41万トンのくず鉄、4000トンのくず銅をはじめ莫大な原料と燃料の予備を探し出し、数千台の設備を生産した。

また、金策製鉄所に大型溶鉱炉が新たに建てられて1975年の新年を迎えて初の出銑作業を行い、平壌紡織工場をはじめ1100余の工場、企業が6カ年人民経済計画を2年以上繰り上げて遂行し、人民経済の全ての部門、単位で当該年度の人民経済計画を超過遂行した。

大規模の冶金・化学・機械・建材基地が新たに建てられてチュチェ工業の威容を誇示した。

わが国の工業は、2500馬力の中速エンジンと3000馬力の高速エンジン、2500馬力のディーゼル機関車、1万4000トン級の大型貨物船、20メートルの大型旋盤、12万立方メートルの大

型高圧送風機、20万キロワットの大型変圧器をはじめとする近代的な大型機械設備を自分の力と技術でつくり出す驚異的な成果を収めた。

工業生産は1.7倍、輸出額は2倍に増大した。

石炭は1.7倍、鉄鉱石は1.6倍、鉛・亜鉛は1.5倍、銅は2.6倍に生産量が増えた。

農業部門では大豊作を収めた前年に比べて大幅な上昇を成し遂げた。

実際、主観的欲望だけでは解決できないのが経済部門だと言える。さまざまな要所でなされており、互いに制約し働きかけて連鎖反応を起こす経済の発展と停滞には、主観的欲望とは関わらない客観的法則が作用する。

一方、ブルジョア政治家と経済学者は、経済の発展と停滞現象は「見えない手」によって統制される不可避の現象だと主張し、経済活動における人間の主導的な役割を否定していた。

しかし、わが人民は奇跡を創造した。

世界が「奇跡」と言って賛嘆の声を上げた朝鮮の経済成長の統計数字は、『国連年鑑』の極東欄にも載せられた。

金正日国防委員長が党中央委員会で活動を開始することにより、わが党は領袖の思想体系と指導体系が確立した革命的な党、鉄の規律と戦闘力を備えた党として強化・発展されたのである。

11. 真の母なる党に

偉大な指導者金正日国防委員長が党中央委員会で活動を始めたときからわが党の活動で起きた今一つの変化は、党活動が名実共に対人活動に切り替えられたことであった。

金正日国防委員長が党中央委員会に来て一緒に仕事をする部署の人々に最初に頼んだことは、自分が席を外したときに訪れる人がいれば、職場や住所、名前をメモして必ず知らせてほしいということであった。

国防委員長にとって人に会うことより重要なことはなさそうだった。

一部の幹部は、若い方が年配の人々と狭い事務室に共にいるのが息苦しいからだとばかり考えていた。

ところが、ほとんど毎日のように国防委員長に会おうと訪ねる人々は多かったが、他の幹部を訪ねてくる人はいくらもいなかった。

以前には深く考えていなかったこの問題が決して軽く見ることではないと感じた幹部たちは、自分を訪ねてくる人々がいないという事実に、恥ずかしがりながらも残念に思った。

彼らにとって、いつでも自分を訪ねてくる人がいれば必ず知らせてほしいと言った国防委員長の初の頼みが一般的な

頼みではなかったと思われた。

会えなかった人々を訪ねて職場に行き、時間が許さなかったら電話でもかけてこそ安心する国防委員長の活動態度は、党活動家はいつも人民の声に耳を傾け、人民と話し合い、人民の心を読み取らなければならないという党活動の真理を導き出す過程であった。

「人民大衆との渾然一体、これはわが党の存在方式です。

エンゲルスは蛋白体の存在方式が生命だと言いましたが、われわれは人民大衆との渾然一体こそ労働者階級の党の存在方式だと言うのです」

この命題は、国防委員長が1970年6月29日、朝鮮労働党中央委員会宣伝扇動部の幹部に言った言葉である。

国防委員長は、党活動家が人間を把握できずに党活動を行おうとするのは、盲人が糸を針穴に通そうとするにひとしい、幹部は、党員自身が自発的に訪ねてきて意見を言うときに一番喜び、彼らが訪ねてこなければ党活動家としての役割を円滑に果たしていないことと見なすべきだと言った。

史上初めて、労働者階級の党の存在方式は人民大衆との渾然一体だという偉大な発見をし、それを朝鮮労働党の生命力として規定した国防委員長の業績は、背の低い片袖机と椅子、書類箱が置かれていた1964年の党中央委員会の庁舎のさほど大きくない部屋から始まった。

人民大衆第一主義を自分の本態と見なしたわが党にとって

絶対に容認できないことは、人民の尊厳と利益を侵害することであり、天が崩れ落ちようとも放棄し得ないのは、人民の幸福と安寧のための滅私奉仕である。

国防委員長は久しい前に、朝鮮労働党にとって最も立派な教師は人民大衆であり、彼らが受け入れない要求はもう要求ではなく主観主義、官僚主義だと指摘した。

1974年3月、平壌で金日成主席の出席の下に全国工業大会が開かれたときのことである。

大会終了後、主席は大会の成功的な開催に満足を表し、大会の参加者と共に記念写真を撮った。

ところが、記念写真を撮るとき、大会を成功させるために動員された幹部たちの不手際のために国防委員長から厳しく叱責された。

記念写真は三つの組に分かれて撮ったが、党中央委員会の幹部たちは皆第1組の前列に立って写真を撮った。

彼らは、行事を主管する人たちが事前に指定した前列に立って写真を撮るのを当たり前のことと思い、後列の人たちも党中央の幹部が前列に立つのは当然の道徳だと考えた。

主席と国防委員長の身近で活動した党中央委員会の幹部たちは、記念写真を撮る機会が多いだろうと考える人もいるだろうが、実際、1970年代はもちろん、今も党中央委員会の幹部にとってその栄光の場に立つのはまれなことである。

一生、党から与えられた職責で誠実に仕事をしながらも、

勲章やメダルの少ない人々が党活動家である。

常日頃から国防委員長は、党活動家という呼び名そのものが大きな表彰である、党活動家は人民のための骨の折れる仕事を真っ先に引き受け、喜ばしいことがあれば他人に譲るべきだと述べていた。

当時幹部たちは、主席と共に、それも身近で記念写真を撮る喜びにひたって、一時的にしろ国防委員長の言葉を忘れていた。

撮影が終わった後、国防委員長は幹部たちを呼び、緊急協議会を開いた。

大会を成功裏に終え、主席と共に記念写真まで撮った幹部たちは随分興奮していた。

「われわれは皆興奮して、椅子にも座らずに立ち並んでいた。すると、金正日同志も席から立ち上がった。私たちはそのとき、金日成同志が参加した重要大会を成功裏に保障したから評価を受けるだろうと考えていた。ところが、意外にも金正日同志は、今日記念写真を撮るとき、あなたたちの誤った行動のため、工業大会の記念写真ではなく、党中央と政務院の責任幹部が金日成同志と共に撮った記念写真のようになったと指摘した。そのときになって私たちは失策に気づき、自分らの本分を守れなかったことに顔を赤らめた」

当時、協議会に参加した一幹部はこのように振り返った。

その日国防委員長は、久々に平壌に来た労働革新者たちが

金日成同志と共に記念写真を撮るのに、どうして幹部たちが大勢押しかけて前列に立ったのか、皆さんの行動は党性、労働者階級性、人民性に欠けた表現だ、これは党活動家が貴族化しており、党の権能を振りかざしたことを示している、と厳しく批判した。

「金日成同志は、わが党は労働者階級の党、革命を進める党になるべきであって、幹部党、貴族党になってはならないと教えました。

ところが、皆さんは今回、金日成同志の意図に反して行動しました。

党活動家が尊大ぶり、人前に出るのを好むのは結局、貴族党、幹部党の真似をすることであり、党第一主義の表現です」

貴族党、幹部党、党第一主義……

一言一言が手厳しい警告だった。

わが党は幹部党ではなく人民の党であり、党第一主義ではなく人民大衆第一主義を堅持すべきだという国防委員長の言葉は、全党の金日成主義化偉業の実現と共に変貌を遂げるわが党の姿はどうあるべきかを幹部たちに描いてみせたスケッチのようなものだった。

国防委員長は、それから数カ月後に開かれた朝鮮労働党第4回組織活動家大会でも、記念撮影の時の教訓を示唆する意義深い教示を行った。

それが1974年8月2日の国防委員長の歴史的な結語『党活動

を根本的に改善し、全社会の金日成主義化を力強く推し進めよう』である。

「幹部の官僚化は政権党にとって最も警戒すべき問題です。

幹部は官僚ではなく、人民の忠僕です。

尊大ぶって横柄な態度をとり、権勢を振るいながら下部の人と大衆の意見に耳を傾けず、怒鳴りつけ、抑えつけ、特恵にあずかろうとするのは、共産主義者とは縁もゆかりもない古い搾取社会の官僚の思考方式であり、行動です。

これは、抗日遊撃隊式の活動気風、生活気風とは根本的に対立します。

抗日遊撃隊の指揮官は、兵士と同じ釜の飯を食べながら生活し、功労と恩恵は兵士に譲り、戦闘をはじめ困難な仕事の先頭に立ちました。

金日成同志によって築かれ培われたこのような高尚な革命的活動気風と生活気風の伝統を持つわが党の幹部が、尊大ぶって権勢を振るったり、特恵にあずかろうとする恥ずべき行動をしてよいものでしょうか。

党組織は党政策の貫徹を妨げ、党と大衆を離脱させる官僚化を絶対に許さず、徹底的に克服することによって、全党に抗日遊撃隊式の活動気風と生活気風が確立するようにすべきです」

1982年12月初めのことである。

国防委員長の提議によって、朝鮮労働党中央委員会政治局拡大会議が緊急招集された。

議題は、慈江道の山奥に位置している8月8日鉱山の労働保護条件に関する問題だった。

その鉱山の黒鉛精鉱乾燥場は、黒鉛のほこりがたくさん漂っているため、労働者たちの顔は真っ黒で、家族でさえ見分けがつかないほどだということだった。

実際、黒鉛を扱う労働者の顔にその粉塵がつくのはどうすることもできないことではないか。これは、8月8日鉱山が位置した慈江道の党責任幹部やそこに行ってきた中央の幹部、また現場で働く労働者も同じ考えだった。

しかし、国防委員長はそう思わなかった。

この問題は単なる労働条件に関する問題ではなかった。

ほかならぬ人民に対する観点、人民大衆に対する問題だった。

党中央委員会政治局非常拡大会議では、政治局員らが当時の慈江道党責任書記の欠陥を分析・批判した。

会議が終わった後、慈江道党責任書記は国防委員長の前で自分の誤りを深刻に反省した。

国防委員長は、あなたは職責をまっとうに果たせず、申し訳ないと言っているが、それは私ではなく労働者の前で謝罪すべきだ、道党責任書記はもちろん、総理も、私もそのような作業条件で働かせたことに対して労働者にひざまずいて謝罪すべきだ、と厳しく言った。

こうして翌日、8月8日鉱山の文化会館では、党中央委員会政治局非常拡大会議の延長として謝罪集会が開かれた。

党中央委員会、政務院、各道党の責任幹部と8月8日鉱山の労働者が謝罪集会に参加した。

道党責任書記が胸を叩きながら労働者たちに謝罪した。

彼の発言が終わるまで会議場は水を打ったように静まり返った。

にわかに、堰を切ったように参加者が総立ちになって「親愛なる指導者同志万歳！」「朝鮮労働党万歳！」を叫んだ。

場内の人々は感涙にむせんだ。

道党責任書記も、労働者も、他道の党責任書記も、党中央委員会と政務院の幹部も皆熱い涙を流した。

こうして、人民の心の中から労働党万歳の声が上がったのである。

党活動家が人民の前で謝罪をし、労働者たちが党活動家を判決するこのような集会は、ひたすら人民大衆第一主義の党である朝鮮労働党でのみ見られることである。

謝罪集会後、国防委員長は慈江道党責任書記を再び呼び、黒鉛精鉱乾燥場を改造するための対策を相談した。

8月8日鉱山の生産が中断される場合、電極生産に影響を及ぼし、国の鋼材生産量が落ちて国家の経済活動全般に悪影響を及ぼしかねなかった。

しかし国防委員長は、わが党が労働者たちの前でした謝罪

は空言ではないとし、断固とした語調で言った。

「……生産がしばらく中断されてもかまいません。

黒鉛が生産されなければ鋼材生産にも支障をきたす恐れがありますが、だからといって労働者をいつまでもそんな作業場で働かせるわけにはいきません。

労働者にした謝罪が空言になってはいけません。

もし、黒鉛生産量が落ち、人民経済計画の遂行に支障をきたして法律的に問題が提起されても、あなたと私が法的責任を負うべきです。

必要なら私が法的責任を負います。

われわれは人民のための仕事、労働者のための仕事なら、法律だけではなく、刃の上にも立つべきです」

まさにこれが、人民大衆第一主義で呼吸する朝鮮労働党の性格である。

その後、国に一つしかなかった工場である南浦電極工場も、解放後の城津製鋼所の原鉄炉のように凄まじい爆音を立てながら爆破された。

これは、人民のためのことなら収支のバランスを考えないのが朝鮮労働党の計算法だという偉人の名言が響いていた時代に生まれた今一つの伝説のようなエピソードである。

このように、人民のためなら全てをささげる朝鮮労働党を仰いで、わが人民は母なる党であるとたたえ、自分の運命と未来の全てを託している。

12. 歴史の渦中で

反社会主義の狂風の中でも朝鮮労働党中央委員会の庁舎の屋上で力強くはためく赤い党旗には、激変の渦中でチュチェの社会主義を守り抜いたわが党の歴史がこもっている。

1990年代、アメリカ帝国主義をはじめとする帝国主義反動勢力は、東欧社会主義諸国が崩壊すると、社会主義は歴史の舞台に「偶然に出現した非科学的理念」であり、「前途のない社会」だとし、社会主義の「終焉」を喧伝した。

卑劣な社会主義の背信者らも、社会主義理念そのものが間違ったものであり、社会主義革命を行ったそのものが誤りだといってそれに便乗しながら、自分らの万古の罪悪を弁明した。

このような詭弁が出るようになったのは、社会主義建設が深化するにつれて従来の労働者階級の革命思想と理論、特に社会主義建設理論の制約が明確に現れたところにも重要な原因があった。

これは、事態の真相を正しく把握できなかった人々の間で思想的混乱を引き起こし、社会主義に対する信念を弱化させ、社会主義の偉業遂行に深刻な悪影響を及ぼした。

わが党は、社会主義の科学性を明らかにし、人々に社会主

義に対する信念を植えつけるための思想・理論活動を力強く展開した。

そこで重要な位置を占めるのは、金正日国防委員長が1992年1月3日、党中央委員会責任幹部への談話『社会主義建設の歴史的教訓とわが党の総路線』と、1993年3月1日に発表した談話『社会主義に対する誹謗は許されない』、1994年に発表した著作『社会主義は科学である』である。

国防委員長はこれらの不朽の著作で、一部の国で社会主義が挫折した原因を究明し、そこから汲み取るべき教訓、社会主義を誹謗中傷する敵のあらゆる詭弁の不当性とそれを粉砕して社会主義の偉業をあくまで成し遂げる上で提起される原則的問題と社会主義の勝利について科学的に論証した。

国防委員長の諸著作の発表は、社会主義の崩壊によって方向を失って右往左往していた国際共産主義運動に希望を与える出来事であり、その結果、平壌宣言という実が結ばれるようになった。

1992年4月20日に採択された平壌宣言『社会主義偉業を擁護し前進させよう』には、社会主義偉業を擁護し前進させようとする世界各国の共産党、労働者党の確固たる意志が反映されている。

当時、宣言に署名した政党は70だったが、6カ月後にはその数が140余に、1年後には170余に増え、今日では数百に達している。

平壌宣言が発表されてから5年後の1997年8月30日、米国の

VOA放送は、ハーバード大学の国際政治経済関係大学院の上級研究員との談話を報じた。

問：1992年に平壌で採択された平壌宣言は、21世紀の「共産党宣言」と呼ばれている。

平壌は社会主義のとりで、世界社会主義の心臓部だと言ってもよいだろう。

国際共産主義運動で平壌宣言の占める地位と役割、その影響力をどう評価すべきなのか。

答：冷戦の終焉と理念対決の終息、共産主義はこれ以上存在しないという現実にもかかわらず、朝鮮が社会主義・共産主義の強硬なとりでとして存在していることは否認しがたい現実である。

今日、コミンテルンが事実上、平壌に移されたと言っても過言ではないだろう。

それは、朝鮮には共産主義理念に徹底している金日成主義者である金正日指導者が健在しており、その政治勢力が世界に大きな影響を及ぼす勢力として存在しているからである。

朝鮮の共産主義者と人民、軍隊は、たとえ全ての人が倒れても、自分の社会主義祖国だけは捨てられないという確固たる信念を抱いている。

特に、労働党員と軍隊は依然として自己の領袖の周りに結集しており、またその周りには進取の気性に富む新世代の青年が結束している。

……

1990年代の中葉に入り、わが人民はさらに重大な情勢に直面した。

世界における社会主義体制の崩壊を奇貨としてアメリカ帝国主義をはじめとする帝国主義反動勢力は、自主の旗、社会主義の旗を揺るぎなく掲げて前進する朝鮮に攻撃の矛先を向けた。

以前の社会主義対帝国主義という対決構図が、朝鮮対帝国主義という構図に変わったのである。

この厳しい現実は、わが国の対外的環境も過酷だと言えるほど不利に変化させた。

特にアメリカ帝国主義は、わが人民が最大の痛恨事(1994年7月8日、朝鮮労働党の創立者であり社会主義朝鮮の始祖である金日成主席が逝去した)に見舞われた後、朝鮮に対する軍事的侵略策動をいつにもまして強化する一方、政治、経済、思想・文化、外交の各分野で圧力を加えながら朝鮮を窒息させようと狂奔した。

アメリカ帝国主義は、朝鮮を侵奪する目的で強行してきた「ウルチ」と「フォーカス・レンズ」戦争演習を1994年から統合してより大規模な「ウルチ・フォーカス・レンズ」に拡大し、毎年「フォール・イーグル」合同軍事演習まで行い、その規模を拡大した。

アメリカ帝国主義はまた、朝鮮の核問題に関する交渉が妥

結しない場合、「朝鮮に軍事力使用の威嚇を加える」と公然と唱えた。

こうして、わが国にはいつ戦争が起こるか分からない一触即発の情勢が生じた。

一方、わが人民の経済的困難も極に達した。

多くの国で社会主義が挫折し、社会主義世界市場が消失した結果、わが国は重要な戦略物資と社会主義建設に必要な一部の原料と資材、設備を資本主義市場を通して解決しなければならなかった。

これを奇貨として帝国主義者は、わが国が1996年5月まで持ち堪えないだろうという「5月の危機」説を言い触らしながら必死になって各種の経済制裁を追求し、「対共産圏輸出統制委員会」(当時)などのさまざまの国際的な統制手段を総動員してわが国を「非最恵国及び敵国関税」地域名簿に載せて差別的な関税政策を実施した。

わが国が物資を一切輸出入できないようにし、国際的な金融取引の道を完全に遮断することによって、わが国を経済的に窒息させ、圧殺するのが敵対勢力の企図であった。

そのため、わが国に必要な技術と資金、物資の搬入が遮断され、他国がわが国との経済取引に参加するのが不可能になった。

これはわが国の経済建設全般に重大な悪影響を及ぼした。

国の重要経済部門間の生産的連係が断ち切られ、少なから

ぬ工場、企業が切実に必要な原料、資材の不足で生産を中止したり調整しなければならなくなった。

これにひどい自然災害まで重なった。

1994年から1997年にかけて毎年、冷害と干害を受け、特に、豪雨と津波によって堤防と貯水池が破壊され、数万ヘクタールの耕地と炭鉱、鉱山が浸水した。また、多くの都市や農村が水浸しになり、船舶と浅海養殖場、塩田、鉄道と橋梁が破壊された。

甚だしい食糧難、燃料難、動力難などが相次いで重なった。

そのため、わが人民は「苦難の行軍」を余儀なくされた。

「苦難の行軍」は、わが党とわが人民にとって苦難に満ちた厳しい試練であった。

われわれが直面した試練と難関を見て、世界は、わが党がこの難局をいかに切り抜けるのかを息を殺して注視していた。

1995年1月1日、国防委員長は朝鮮人民軍のある区分隊を視察した。

国防委員長は、国と人民、チュチェの革命偉業の運命を決する重大な問題について思索に思索を重ね、その過程で銃剣重視、軍事先行の原則に立って軍事を全ての事業に優先させ、久しい前から指導してきた人民軍を中核、主力部隊とし、それに依拠して社会主義偉業を前進させていく確固たる決意を固めた。

国防委員長の人民軍区分隊への視察は、わが党にとって社

会主義を固守するのが優先であり、そのためにはアメリカ帝国主義との対決で強硬な姿勢を堅持すべきであり、軍事力を強化するのが第一であることを示した歴史的な壮挙だった。

この日国防委員長は幹部たちに、敵との対決でたった一度も譲歩してはならない、われわれが敵に一度譲歩すれば二度譲歩するようになり、二度譲歩すれば三度譲歩するようになる、われわれはいつでも一度は必ずアメリカ帝国主義侵略者と決戦を展開すべきであり、この戦いで勝利者になるためには銃剣を強化しなければならないと言い、次のように述べた。

「私は党と共に人民軍を非常に重視しています。

人民軍の強化に第一義的な力を注ぎ、銃剣をもって朝鮮式社会主義を固守し、金日成同志が開拓したチュチェの革命偉業をあくまで完成していくのは、わが党の確固不動の信念であり、意志です。

人民軍の銃剣の上に平和があり、わが人民の自主的かつ創造的で幸せな生活があり、社会主義の勝利があります」

それ以来国防委員長は、未曽有の先軍の道を歩み続けた。その後、全党と全社会に革命的軍人精神に見習う気風が高く発揮され、人民軍の威力が一層強化されたとき、国防委員長はわが党の指導は先軍指導であり、自分の政治は先軍政治だと明らかにした。

このときから、政治辞典にもなかった朝鮮労働党の先軍政治が始まった。

先軍長征の道を先頭に立って切り開いていく国防委員長の姿は、そのまま人民大衆中心の朝鮮式社会主義を守っているわが党の姿であった。

その日々、国防委員長は最前線に位置する五聖山を訪ねた。

標高1000メートルを超すその山は、そそり立つ断崖と深い渓谷からなっていた。

敵の軍営は目と鼻の先にあった。

国防委員長が五聖山に登ろうと言うと、幹部たちが押し留めた。

「最高司令官同志、豪雨で峠道が洗い流され、ところどころ陥没して登れそうもありません。

道路を修理してから登って下さい」

「今回だけは私たちの願いを聞き入れて下さい」

彼らの哀願するまなざしを見つめていた国防委員長は、険しい峠道を見上げた。

「ありがとう、私を思うあなた方のその気持ちが……」

しかし国防委員長は決心を変えなかった。国防委員長は高地に人民軍の軍人たちがいるのに、ここまで来て高地に行かなくてはいけない、最高司令官が今日のような悪天候の日に前線の険しい峠道を歩んでみなければ兵士たちの生活を知ることができない、と言って、決然と車に乗るのだった。

車は高地の頂点にある前方指揮所へ向かって走り出した。

峠道は152曲がりであった。

激しい暴風雨で道端の草は根こそぎにされ、逆巻く濁流に洗われてあらわな石だけ残った道を進むと、車は大きく揺れた。

下方を見下ろすと険しい断崖だった。

みんなが手に汗を握っているとき、いきなりバーンという音がしてとがった石を踏んだ車のタイヤが破裂した。

スペア・タイヤに取り替えて車はまた前進した。

そうしていくつかのカーブを曲がったときだった。急に車が傾いたかと思うと、崖ぶちに滑り落ちかけた。背筋がぞっとする瞬間、運転手がハンドルを回転させて車は幸いにも道路上に戻った。危険極まる瞬間だった。国防委員長は何事もなかったかのように、後ろの車が見えないと心配した。

車は山の中腹に登りついた。そのときまたもタイヤが破裂する音が鼓膜を打った。汗みずくになった運転手が素早く飛び下りてタイヤを交換した。もうスペア・タイヤは一本しか残っていなかった。

再び山頂に向かって進んでいた車が車輪を空転させて滑り降り始めた。

事態が容易でないと見てとった国防委員長は車から降り、車体に肩を当てて力一杯押した。

随員たちも加勢して車を押し上げた。辛苦の末にとうとう152曲がりを回りに回って前方指揮所に到着した。

「ご苦労さんです。前線でさぞ苦労が多いことでしょう」

泥水のはねた国防委員長の服装を見た部隊の指揮官たちは、迎接報告もできず、目頭を拭うのみだった。

しばらくして指揮官は涙声で言った。

「敬愛する最高司令官同志、ここがどこだと思ってこんなところまでお出でになったのですか……」

このような決死の先軍の道があったがゆえに、わが祖国と人民の今日があるのである。

一方わが党は、先軍政治の実施に即してわが国の国家政治体制を先軍指導体制に強化・発展させた。

それに従い、国防委員会を中枢とする新しい国家機構体系を確立するという新憲法が作成されて、1998年9月の朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議第10期第1回会議で採択され、金正日同志を朝鮮民主主義人民共和国国防委員会委員長に推戴した。

その1年前の1997年10月８日、朝鮮労働党は金正日同志を朝鮮労働党総書記に推戴した。

わが党の先軍政治はこのように、帝国主義者の策動によってつくり出された厳しい難局を切り抜ける過程で一つの威力ある政治方式として全面的に確立された。

わが党はまた、当面の情勢の要請から国防力の強化を社会主義建設の必須の要求とし、この活動に拍車をかけた。

わが党はまず、人民軍を全面的に強化することに引き続き大きな力を入れる一方、国防工業を発展させることを国防力を固めるための重要な課題として一貫して堅持した。

国防委員長は2003年8月、党・国家経済機関の責任幹部への談話『党が示した先軍時代の経済建設路線を貫徹しよう』で、国防工業を優先的に発展させながら同時に軽工業と農業を発展させるという先軍時代の経済建設路線を打ち出した。

先軍時代の経済建設路線は、国防工業を優先的に発展させながら、同時に軽工業と農業を発展させることである。

わが党は、国防工業を優先的に発展させるという路線を貫徹するための闘争へ全党、全国、全人民を奮い立たせた。

軍需生産を高い水準で正常化し、軍需品の質を決定的に高めるようにした。

こうして、国家の経済活動全般を国防工業の優先的発展へ志向させ、人民経済の全ての部門で国防工業に必要な労働力と設備、原料、資材、電力を最優先的に保障するための活動が力強く繰り広げられた。

一方、軍需工業の発展趨勢に即して軍需工業をさらに近代化、情報化することに大きな関心を払い、それを自国の実情に合わせて自分の方式で行うための活動も推し進めながら生産工程の近代化を積極的に実現するようにした。

わが党は、世界の国防科学技術発展の趨勢に即して国防科学技術を急速に発展させ、国防工業部門の科学者、技術者が集団的技術革新運動を一層活発に行うようにし、先端技術に基づく近代的戦闘技術機材を積極的に開発するようにした。

特に、日増しに激化するアメリカ帝国主義の反共和国孤立・

圧殺策動に対処して核技術の発展に大きな力を注いだ。

わが党の戦略的構想に従い、わが国の科学者、技術者は、自らの力と技術によって2006年10月と2009年5月、二度にわたる地下核実験を成功させ、われわれの知恵と技術に基づく核抑止力を築き、敵対勢力の露骨な核先制攻撃の威嚇や反共和国孤立・圧殺策動に風穴を開けた。

そうして、わが国の国防工業は、現代戦争の要求する膨大な軍事的需要も自力で充足させうる自立的な国防工業、近代的な攻撃及び防御手段、特に、先端軍事科学技術の総合体である核兵器と強力な運搬手段までも自力で生産する世界的な競争力を持つ近代的国防工業に発展するようになった。

これは言うまでもなく、わが人民が困苦欠乏に耐えなかったら達成できない成果であった。

しかしわが人民は、難関に屈したり動揺したりしなかった。

たとえアメがなくても生きていけるが、銃弾がなくては生きていけないということが朝鮮人民の鉄の信念である。

朝鮮が長い期間、敵対勢力の恒常的な挑戦と軍事的脅威にさらされている中でも社会主義の赤旗をしっかりと固守し、自分の発展の道に沿って前進することができたのは、わが党の自衛の思想と党の指導によって打ち固められた軍事的力、自己の運命を手中にしっかりと握って、二度と帝国主義の奴隷の人生を送るまいとするわが人民の闘争精神、困苦欠乏に耐えながら打ち固めた強大な国防工業があったからである。

わが党が存在する限り、人民大衆中心の朝鮮式社会主義という巨木は、いかなる狂風にも絶対に微動だにしないというのが、20世紀が証明した事実である。

13. 人民大衆第一主義を政治理念として

わが党は、人民大衆を政治の主人として押し立て、その人民のために滅私奉仕する党である。

朝鮮労働党の指導思想は金日成・金正日主義であり、金日成・金正日主義は本質において人民大衆第一主義である。

人民大衆第一主義は、わが党がその赤旗にハンマーと鎌、筆を記したときから一貫して堅持してきた人民重視の政治理念、政治方式がそのまま継承されたわが党の政治理念、政治方式である。

わが党はまず、政治の実現における全ての問題を、人民大衆の要求と人民の利益を第一義とし、人民大衆に依拠して解決した。

「全てを人民のために、全てを人民大衆に依拠して！」という党のスローガンには、金日成主席と金正日国防委員長を戴くように人民をあがめ、全党に人民への愛と信頼をみなぎらせようとする金正恩(キムジョンウン)総書記の確固たる決意と意志が込められている。

金正恩総書記は、全党に人民の力を信じ、人民に依拠する気風をみなぎらせることを人民大衆第一主義の政治理念、政治方式を具現するための基本的要求として提示した。

わが党にとって、人民を信じ人民に依拠して活動するのは党本来の要求であり、人民のための政治、人民大衆の自主性を実現するための革命指導における必須の要求である。

わが党の歴史は、すなわち人民の力を信じ、それに依拠して勝利してきた百戦百勝の歴史である。

総書記は「全党が大衆の中へ！」「全党が対人活動に力を注ごう！」というスローガンを高く掲げ、幹部が常に人民の中に深く入って信頼と愛情を注ぎ、彼らと苦楽を共にしながら、大衆から学び、大衆の革命的熱意と創造的積極性を引き出して革命課題を遂行する革命的かつ人民的な活動気風を確立するようにした。

わが党の人民大衆第一主義思想において基本は、人民に対する滅私奉仕精神である。

そのため総書記は、全党に人民のために滅私奉仕する革命的党風を確立するようにした。

今もわが人民の胸が熱くなるエピソードがある。

金正日国防委員長が急逝した翌日の2011年12月18日、党中央委員会の幹部たちは、国防委員長の恩情こもる措置によって出漁していた漁船が12月16日夕、ある漁港に帰港したという報に接した。

ところが、国防委員長の急逝でなすべきことが山積している総書記にこのことを報告することは控えるべきではないかと一時は躊躇したものの、国防委員長の恩情がこもるこの魚類について報告を伏せておくわけにはいかないと思い返した。

以前、平壌市民に美味しい魚を供給するようにした国防委員長は、新年を迎えてまた平壌市民に贈ろうとして、12月16日、平壌市民のための魚類供給案にサインをしていたのである。

これは国防委員長の最後の署名文書だった。

悲痛な面持ちで語る関係幹部の報告を受けて、耐えがたい喪失の痛みの中でも、人民への金正日国防委員長の恩情を今更のように痛感した総書記は、金正日同志が親しく配慮したかけ替えのない贈り物を平壌市民に一時も早く届けるべきだとし、特別列車を編成して魚を平壌まで集中輸送するよう具体的な対策を立てた。

全国が民族の最大の痛恨事に沈んでいたとき、思いもよらぬ鮮魚の供給を受けることになった首都の市民たちは感激の涙を流した。

総書記の人民愛により、哀悼期間に人民は新鮮な魚を供給されるという伝説のような光景が繰り広げられた。

それればかりではなかった。国防委員長の不慮の急逝で全国が深い悲哀に沈んでいた2011年12月の一日一日が流れていた。

国防委員長の逝去を天も悲しみ、むせび泣いているのか大雪がこんこんと降りしきったが、弔意式場を訪れた無数の人々は寒さも積雪も認識せず、国防委員長の霊を慰めんものと夜を徹した。

総書記は、酷寒の夜、雪に打たれながらも国防委員長の太陽像（肖像）の前で通夜をする人たちが凍傷にかかるようなこ

とがあってはと、必要な対策を手落ちなく立てるよう幾度となく強調した。

そして、野外の弔意式場を訪れる人たちや通夜をする人たちが防寒帽やマフラー、手袋、耳覆いを着用して、弔意を表するときにだけ脱ぐようにし、応急手当ての対策も立て、弔意式場周辺には体を温める場所を設けるようにと指示した。

また、通夜をする人たちが手足を温める数万個の発熱テープと発熱敷き革を提供し、野生蜂蜜や粉ミルク、パン、菓子など多くの食品も送る配慮をめぐらした。

ほかにも寒い冬の日に弔意式場を訪れる人たちに白湯をもてなすより砂糖湯をもてなせば喜ばれるだろうとして、大量の砂糖を各地の弔意式場に送る措置も講じた。

このように万全の措置を取りながらも気持ちがおさまらず、どうすれば人民の悲しみを軽減できようかと気を配っていた総書記は、一字一字心を込めて書いた自筆の指示を関係部門の幹部たちに送った。

「今日のこの心の痛みを癒す上で市党委員会の任務は極めて重要です。

平壌市党委員会の活動家たちは首都市民の真の奉仕者、人民の忠僕としての自覚と正しい観点を持って、市民たちの便益を図ることに力を注がなければなりません。

そして母親の心情、母親のような手配りで首都市民の心痛を慰めてくれるよう願います。

2011. 12. 25

金正恩」

総書記は、人々の心の痛みと悲しみを慈父や母親の愛情で慰めながら、大国喪という厳しい試練を乗り越えたのである。

2015年8月末、羅先市は集中豪雨によって思いもよらぬ大災害に見舞われた。

多数の住宅が倒壊し、鉄道路盤が沈下し、通信網がずたずたになり、飲料水の供給が断たれた。

瞬く間に市街は泥に埋もれ、多くの人々が退避した。

被害のあまりにものひどさに、人々はただ唖然とするばかりだった。

水害に関する報告を受けた総書記は、その日のうちに羅先市の幹部に破壊された住宅と道路、鉄道、電力、通信を早急に復旧して水害を一日も早く癒すための対策を講じるよう指示した。

そして、党中央軍事委員会拡大会議で、羅先市の被害復旧を人民軍が一手に引き受けて、党創立記念日の10月10日以前に完了せよとの最高司令官命令を下した。

そうして、人民軍部隊がすぐ出動し、全国が羅先市の被害復旧を支援するために立ち上がった。

水害復旧がたけなわの同年の9月、建設現場を視察していた総書記は、幹部から一つの事実についての報告を受けた。

一部の住民が、家屋を失った人たちに立派な新しい住宅を

建ててくれるという話を伝え聞いて、修理すれば使える家を自分たちの手で取り壊したということだった。

報告を受けた総書記は、それを問題視すべきではない、彼らがわが党を信頼していなかったとしたら、あえてそんなことはできなかっただろう、わが党に対する人民のその信頼こそわれわれには何よりも大切だ、財産の中でも最も貴重な財産は人民の信頼だ、と言った。

周辺の人々は言うまでもなく、過ちを犯した当事者も自分たちの妄動を自責しているとき、総書記は彼らを恩愛と信頼で包容したのである。

同年の10月、完工した住宅を見て回った総書記は、わずか30日余りという短期間に今一つの仙境村が生まれたとすこぶる満足し、家を失くし野宿している被災民に素晴らしい住宅を提供したのでもう安心できる、われわれがこんなに嬉しいのに、新しい住宅を与えられる人民はなんと喜ぶだろうか、と言った。

総書記が2017年の新年に際して祖国と人民の前で立てた盟約は、人民に対する滅私奉仕が紙の上の文章ではなく、人民への奉仕をその崇高な使命とする朝鮮労働党の本分であることを示す真心の吐露、熱烈なアピールだった。

「新しい一年が始まるこの場に立つと、私を固く信じ、一心同体となって熱烈に支持してくれる、この世で一番素晴らしいわが人民を、どうすれば神聖に、より高く戴くことができるかという心配で心が重くなります。

いつも気持ちだけで、能力が追いつかないもどかしさと自責の念に駆られながら昨年を送りましたが、今年は一層奮発して全身全霊を打ち込み、人民のためにより多くの仕事をするつもりです。

私は、全人民が金日成同志と金正日同志を信頼し、前途を楽観して『われら幸せうたう』を歌っていた時代を、過ぎ去った歴史の中の瞬間ではなく、今日の現実にするために奮励努力するつもりであり、一点のくもりもない清らかな心で人民に忠実に仕える人民の真の忠僕、忠実なしもべになることを、この元旦に厳かに盟約します。

そして、全党に人民に滅私奉仕する革命的党風を確立するために力強く闘うつもりです」

わが党の活動は、ひたすら人民に対する滅私奉仕で一貫しており、それを自分の活動の根本目的としている。

ここ数年間、わが国では毎年、首都平壌に近代的に建設される1万世帯の住宅と各地の農村地域に建てられる農村文化住宅、山間、中山間地帯に建てられる山間都市など全国的に数万世帯の住宅が立ち上がり、山河は言うまでもなく、人々も変わっている。

もちろん、このように建てられた住宅は、勤労者に無料で提供されている。

これについて、世界の人々は首を傾げている。

「敵対勢力と恒常的に対峙している朝鮮が、どのようにし

てあんな建設を進めることができるのか。だからといって経済に影響を及ぼすのでもない。

最近、朝鮮の経済は持続的な上昇推移を維持している」

2021年1月、朝鮮労働党第8回大会は、2025年まで首都に5万世帯の住宅を建設することを政策として打ち出した。

そのために、2021年から毎年1万世帯ずつ建設することにした。

これは、並々ならぬ苦慮の末に決められた問題だった。

当時、世界的な公共保健事態によって多くの国で経済が停滞し、わが国でも非常防疫措置の実施であらゆるものが足りない困難な時期だった。

一言で言って、いつにもまして多くの挑戦と難関が立ちはだかっていた当時の状況で、このような大規模の建設を計画したそのものが想像を絶することだった。

当時、一部の幹部は毎年1万世帯の住宅を建設するという党大会の決定にもかかわらず、経済的条件にかこつけながら世帯数を減らす計画を立てた。

党中央委員会第8期第2回総会では、幹部たちのこのような観点と態度が分析・批判され、毎年1万世帯の住宅建設を無条件推し進めることを決定した。

わが党と政府にとってこの事業は、単なる住宅建設ではなく、首都市民により安定した文化的な生活条件を提供する活動、彼らの生活と直結した最も重要な課題、宿願事業だったのである。

わが党と政府は、前もって首都で不足する住宅数を把握し、その解決策を深く研究し、人民大衆第一主義をしっかり具現する原則に立って建築発展の構想と建設政策を再確定し、国家建設総予算の多くの分を住宅建設に支出するようにした。

2021年3月23日、平壌の松新・松花地区で1万世帯住宅建設の着工式が行われ、翌年から平壌には毎年1万世帯の建築群が間違いなく立ち上がって新しい市街が形成された。

2022年4月には松花通りと普通江川岸段々式住宅区が、2023年4月には和盛通りが、2024年4月と5月には林興通りと前衛通りが立ち上がり、2025年4月には和盛地区第3段階1万世帯住宅が竣工して人民を喜ばせている。

これと共にわが党は、人民の生活上の福祉を図って全国の農村を改造するための農村住宅建設を本格的に推し進めた。

2021年12月に行われた朝鮮労働党中央委員会第8期第4回総会は、朝鮮における農村振興の新しい序幕を告げる会議だった。

総書記は会議で、『朝鮮式社会主義農村発展の偉大な新時代を開いていこう』と題する歴史的な報告を行った。

総書記は報告で、農村の様相と環境を抜本的に改造することを社会主義農村建設における最も重要な課題として提示した。

近い将来に全国の全ての農村を三池淵市の農村の水準に、裕福かつ文化的な社会主義理想村にするのが、わが党の農村建設政策である。

国の経済活動がまだ困難な状況下で行われ、膨大な社会主

義建設課題が提起されているときに、全国の農村を飛躍的に振興させるために取られた重大措置は、わが党と政府の革命的な農村建設政策の発現であった。

この構想と政策を実現するのは、全人民が望み、歓呼する人民的な事業だった。

それ以来、朝鮮の各地ではその地方の特色が生かされ、近代的美感に合う農村文化住宅が建設された。

この他にも、2019年からわが国では、仲坪、連浦、江東地区に集約化、最適化、知能化された温室農場が建設され、人民生活の向上に寄与している。

これで、わが国には地方が様変わりする新しい局面が開かれ、社会の進歩と繁栄のためのこれらの事業を通じてわが国の全面的発展の時代が始まった。

わが党はまた、党活動の全般に人民大衆第一主義をしっかりと具現するために、全ての党組織と党活動家が民心を把握し、大衆との活動に力を入れて、広範な大衆が党と血縁の情で固く結ばれるようにした。

特に、何かの仕事の手配をしたり、人々の運命に関わる問題を処理する場合、それが一心団結に役立つかどうかを検討し、提起される問題を一心団結を強化する原則に基づいて慎重に処理するようにした。

朝鮮少年団創立66周年慶祝行事にも労働者、農民、軍人、知識人の子女を参加させ、国に罪を犯した人の子女であっても学習と少年団組織生活に模範的な児童・生徒は差別せず代表として推薦するようにした。

わが党は、幹部の中で人民の生活上の苦衷に背を向ける傾向、熱しやすく冷めやすい仕事ぶり、形式主義、要領主義に走る傾向などあらゆる誤った活動態度や活動気風を正すための闘争を強力に展開し、一旦手をつけた仕事は人民がその恩恵をこうむるまでねばり強く推し進めるようにした。

これと共に、わが党と国家の人民的な施策が確実に実施されて人民により多くの恩恵が与えられるようにし、各地の育児院と愛育院、養老院と養生院を立派に整え、孤児と身寄りのない老人、障害者が不便を感じることなく生活できるように深い関心を払った。

わが党は、全ての問題を人民大衆に依拠して解決する気風を全党にみなぎらせることに大きな力を入れるとともに、大衆の精神力を奮起させて党政策の貫徹で提起される問題を解決する気風を確立するようにした。

そのために、全ての幹部が事務室に居座ろうとばかりせず、常に大衆の中に深く入って大衆といささかの間隔もおかずに苦楽を共にしながら、党の路線と方針を貫徹するための正しい妙策と方法論を見いだすようにした。

この過程で全党には、人民のために滅私奉仕する気風が確立された。

14. 現実となっている人民の夢

今日、わが党は人民が願っていた夢と理想を現実として開花させている。

それを実証する最初の実体は、われわれの強大な国力である。

世紀を継いで持続する敵対勢力の反共和国圧殺策動は、2010年代に入って一層危険な様相を呈した。

2012年12月、わが国の衛星打ち上げを問題視した米国とその追随勢力は、国連安全保障理事会で強盗さながらの「制裁決議」をつくり上げ、主権国家の合法的な衛星打ち上げの権利さえ非合法化し、わが国に対する制裁を国際化する敵対行為を働いた。

米国は、史上初めて3大核打撃手段を朝鮮半島に同時投入して情勢を極度に激化させ、2012年1月から2015年12月にかけて、朝鮮西海の五つの島一帯とわが国の領海水域を目標にした海上射撃訓練と「キー・リゾルブ」「フォール・イーグル」合同軍事演習をはじめ各種の大規模軍事演習を数十回も強行した。

わが党は、米国の無分別で狂気じみた振舞いに対処し、祖国と人民の運命を守るための決死の道を選択し、自衛的核抑止力を中枢とする国防力の強化に一層拍車をかけた。

こうした状況の下、2013年3月30日と31日に朝鮮労働党中央委員会総会が開かれた。

金正恩総書記は会議で、経済建設と核武力建設を並進させるという新たな戦略的路線を打ち出した。

この路線は、単に軍事的目的から打ち出されたものではなく、強力な核抑止力に依拠して経済建設に力を集中することで、近い将来に人民に社会主義の万福を享受させ、国防費の追加支出なしに戦争抑止力と防衛力の効果を画期的に高めて、経済建設と人民の生活向上に力を集中することを可能にする路線である。

相手は世界最大の核保有国の米国であり、米国が恒常的にわが国を核で威嚇している状況下で、核武力を質と量の両面から強化しなければならず、強大な核武力の上に平和もあり、富強・繁栄と人民の幸せな生活もあるというのがわが党の見解である。

総書記は総会で、党の並進路線を貫徹する上で最も重要な問題は、全力を集中して経済強国建設で画期的な転換を成し遂げることだと指摘した。

経済建設と核武力建設の並進路線が打ち出された朝鮮労働党中央委員会2013年3月総会は、激変する情勢に対処するための一時的な対応策ではなく、朝鮮革命の最高の利益から恒久的に堅持すべき戦略的路線を採択した歴史の分水嶺だった。

この時期からわが国では、国家防衛力強化の新しい全盛期が開かれた。

2013年2月、わが国の北部地下核実験場では、国家の安全と自主権を守り抜くための実際的対応措置として高水準の第3回地下核実験が成功裏に行われた。

核実験は、われわれの合法的な平和的衛星打ち上げの権利を乱暴に侵害した米国の暴虐非道な敵対行為に対処して、国の安全と自主権を守るための実際的な対応措置の一環として行われた。

以前とは異なって爆発力が大きいながらも小型化、軽量化した原子爆弾を使用し、高いレベルで安全かつ完璧に行われた核実験は、周辺の生態環境にいかなる否定的影響も及ぼさなかったのが確認された。

原子爆弾の作用特性と爆発威力など、全ての測定結果が設計値と完全に一致し、多種化したわが国の核抑止力の優れた性能が物理的に誇示された。

第3回地下核実験の成功は、国の自主権を守るための敵対勢力との闘争で寸分の譲歩やいささかの妥協も知らないわが国の気概を誇示した。

わが党は核実験を通じて帝国主義者とその追随勢力に、いかなる制裁と封鎖、軍事的脅威と圧力に絶対に屈服せず、強力な対応措置をもって国と人民の尊厳と自主権、安全をしっかり守るという確固不動の意志を内外に宣言した。

わが国の核実験成功を支持して各国の団体と人士が声明、談話、文章を次々と発表した。

ロシアの朝鮮民主主義人民共和国との連帯グループは声明で、アメリカ帝国主義が他国に自国の意思を強要している今日の世界で、核抑止力はそれを不可能にする唯一の手段となると指摘した。

ビシュワナス・チュチェ思想国際研究所理事長は談話で、朝鮮の核実験は全的に米国の敵視政策の所産である、米国が朝鮮に対する敵視政策を放棄しない限り、自主権を生命のように貴ぶ朝鮮人民によってさらに大きな惨敗を喫するであろうと強調した。

2013年2月27日、朝鮮民主主義人民共和国代表はジュネーブ軍縮会議総会での演説で次のように述べた。

「もともとわが共和国は第3回核実験の計画もなく、その必要さえ感じていなかった。

しかし、米国はわが共和国をして、平和で安定した環境で経済建設と人民生活の向上に注力することができないように各面から妨げてきた。……

米国の対朝鮮敵視政策が重大な段階に入り、経済建設と人民生活の向上のための闘争も安心して展開することができない厳しい情勢の下で、われわれはやむを得ず重大決心を下さなければならなかった。

それがほかならぬ第3回地下核実験である。

朝鮮半島の情勢が今日のように予測不可能な事態に立ち至っている責任は、全的に米国にある」

2013年4月、朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議第12期第7回会議では、わが国の核保有国の地位を法制化することで、朝鮮の核武力建設がこれ以上敵対勢力との争論や国連の論議の対象ではなく、尊厳ある朝鮮労働党の当面の闘争目標、神聖なる共和国法となったということを世界に宣布した。

わが党はこれに基づき、3年後の2016年1月3日、超強力熱核兵器である初の水爆実験を承認して1月6日に断行するようにした。実験は成功し、わが国は水爆を保有した責任ある核保有国となった。

同年9月には、新しく研究・製作された核弾頭の威力を判定する核爆発実験が断行され、打撃力の高い様々な核弾頭を思い通りに必要な数量を生産できるようになったという声明が発表された。

これについて、わが国に対する誹謗中傷に慣れている米国と西側諸国さえも、標準化、規格化、小型化、軽量化された朝鮮の核弾頭の威力と核能力の高度化は大変驚くべき水準であり、認めざるを得ないと評した。

わが党は、瞬時の停滞もなく核の兵器化のより高い目標を達成するための強行突破戦を絶え間なく展開して、驚異的な成果を収めた。

その過程で、分裂及び熱核装薬をはじめ水爆の全ての構成

要素が100パーセント国産化され、兵器級核物質生産工程から部品精密加工及び組立に至るまで、核兵器の製造に必要な全ての工程がチュチェ化された結果、わが国の国防工業は強力な核兵器を思い通りに生産できるようになった。

2017年9月3日の朝鮮労働党中央委員会政治局常務委員会では、国家核武力完成の完結段階の目標を達成する事業の一環として、大陸間弾道ミサイル装着用水爆の実験を断行するという決定書が採択された。わが国の核科学者は、これを一回の実験で成功させた。

わが国の国防科学者たちはまた、2015年5月に戦略潜水艦弾道弾の水中射出実験に成功して2016年4月にテスト飛行段階に進入し、8月には戦略潜水艦弾道弾の水中発射を成功させた。2019年10月には、新型の潜水艦弾道弾「北極星—3」型試射を成功させた。

これでわが国は、世界で数カ国しか保有していない威力ある潜水艦弾道弾を手にするようになった。

2016年8月、わが党は戦略潜水艦弾道弾の水中試射の成果を踏まえて、この兵器システムを射程を延長した地対地弾道弾として開発する課題を国防科学部門に提示した。

わが国の国防科学者と技術者は、2017年2月の地対地中・長距離戦略弾道弾「北極星—2」型試射を成功させ、ついで5月には部隊実戦配備を前にした地対地中・長距離戦略弾道弾「北極星—2」型試射に今一度成功し、党から与えられた課題

を数カ月の間に完遂する奇跡を生み出した。

わが党はこれに満足せず、国家核武力完成の歴史的大業を実現するための試験を絶え間なく断行した。

2017年3月18日、西海衛星発射場で主体的な大出力エンジンの地上噴出試験が成功裏に行われて、わが国の国防工業は見本模倣型から開発創造型に確実に転換され、続いて7月4日には大陸間弾道ミサイル「火星砲—14」型試射に成功した。

それからわずか4カ月後の11月28日、大陸間弾道ミサイル「火星砲—15」型兵器システムが完成した。これでわが国は、米本土の全域を打撃できる超大型重量級核弾頭装着が可能なもう一つの新型大陸間弾道ミサイルシステムを保有し、国家核武力完成の歴史的大業を成就した。

特に、2024年10月31日に行われた最終完結版の新型大陸間弾道ミサイル「火星砲—19」型の試射の確実な成功は、わが国の戦略武力を強化する上で画期的な里程標を立てる契機となった。

「火星砲」兵器システムは100パーセントわが国の力と技術をもって、わが国の実情に合わせて開発された名実共に朝鮮式兵器システムである。

実際、核武力建設の道程は、核覇権を維持しようとする列強の共同歩調とヒステリックな政治的・外交的圧迫、執拗な経済封鎖、強盗さながらの武力侵攻など、全てのことを覚悟しなければならない生死を分かつ道だった。

しかし、わが党は祖国と人民の運命に対する崇高な責任感を持って、核武力強化の草分けの道を陣頭に立って切り抜けて国家核武力完成の歴史的大業を成し遂げ、帝国主義の侵略と核威嚇の歴史に終止符を打つ偉大な勝利をもたらした。

一方、わが党は人民により幸せな生活を享受させるために、党事業と党活動の全力を人民の福祉増進に集中している。

わが党が掲げた強国の徴表は、人民の笑い声である。

それは、いかなる戦争脅威も永遠に知らず、全てが栄え、文化的な生活を営む人民の笑い声がすなわち強国の叙情的な発現であるからであり、人々の笑い声は何の心配も知らないことの象徴であるからである。

2013年10月、総書記が金正淑平壌紡織工場を視察したときのことである。

総書記は、現在この工場は従業員寮と住宅が不足している、生産正常化も重要だが、肝心なのは労働者の生活上の問題を解決することだ、と心配そうに言った。

そして工場の各所を見て回りながら、この工場の従業員寮と住宅の建設問題はこれ以上先送りしてはいけない、自分が工場の寮と住宅を立派に建設して上げる、と言った。

この日、工場の視察を終えた総書記は、寮の敷地に行ってみなくては明確な構想を持ってその建設に関する仕事の手配をすることができない、そこに行かずには工場を離れられない、と言って寮の敷地へ足を運んだ。

敷地の周辺を見回した総書記は、寮の敷地としてはここがよいだろう、建設に人民軍部隊の強力な建設陣を動員し、早いうちに工事を始めて来年には完工しよう、来年にどんなことがまた提起されるか分からないから、この建設を一気に終えなければならない、と強調した。

こうして、さまざまな便益サービス施設が完備された金正淑平壌紡織工場の労働者寮が竣工した。

2014年4月、完工なった労働者寮を訪れた総書記は、人民軍が金正淑平壌紡織工場の労働者たちに素晴らしい寮を提供した、皆労働者寮を見て回ろうと言い、細やかなことにまで深い関心を払った。

総書記は、内部の壁を女性の趣向に合わせて穏やかで温かな感じの色でよく仕上げをしたとたたえ、ある寮生室に立ち寄っては、寄り付きに鏡がかかってあるので、娘らが外出やデートに行くときの身だしなみができるから喜ぶだろうと満足を表した。

この日総書記は、ここは労働者寮ではなく労働者ホテル、労働者宮殿だ、外国人に金正淑平壌紡織工場の労働者寮を参観させても遜色ないだろう、彼らはここに来てみると、本当に朝鮮は労働者階級の世の中だと口を揃えてたたえるだろう、と言った。

2014年1月、国家科学院を現地で指導した総書記は、その足で科学者用の休養所建設のことで延豊湖へ向かった。

延豊湖畔にたどり着いた総書記は、そこの美しい景色を眺めながら、今日、国家科学院院長を延豊湖に連れてきたのは、科学者休養所の敷地を定めるためだ、この敷地が気に入るのかと尋ねた。

総書記は、科学者休養所の適地を定めるために、昨年の夏に二度も船に乗って延豊湖の周辺を見て回った、そうしてこの場所を見つけたと言った。

手にした形成案とそこに描かれた建物が配置されることになる湖畔を代わる代わる見た総書記は、満足した語調で言った。

——この位置は科学者休養所の予定地としては最適の場所だ。夏に来てみたときは空気が澄み、樹木が青々と茂り、景色が素晴らしかった。今日来てみると、冬の風景もそれに劣らず素晴らしい。

科学者が十分に休息できる条件を提供すると、科学研究活動でより大きな成果が収められるだろう。

それで党は、金日成同志と金正日同志の指導業績がこもっており、景色もよい延豊湖の畔にこの世にまたとない最上級の科学者休養所を建設することを決心した。われわれは、科学者のためのものは全て最高のレベルで整えなければならない。……

総書記は、科学者休養所をこの世にまたとない休養所として立派に建設しよう、われわれは何を一つやってもこの世にないことを成し遂げなければならない、数カ月後にはここの様相が一新するだろう、と重ねて満足そうに言った。

こうして延豊科学者休養所が景色の素晴らしい場所に建て

られ、科学者のために運営されるようになった。

陽徳温泉文化休養地に設けられたスキー場も、わが人民に文化的な生活を享受させようとする総書記の細心の指導によって生まれたものである。

温泉や冬季スキーが共に楽しめる地区を建設することは、気象・気候条件と地帯の特性からして数多くの難問題が提起されるのである。

しかし総書記は幹部たちに、陽徳地区は降雪量や天気の面からしてもスキー場を建設するのに有利だとし、これまでの陽徳一帯の気象・気候資料を分析してみると馬息嶺地区より雪の降る期間が3日もさらに長く、気温も低いし、こうしたことからもスキー場は馬息嶺地区より陽徳一帯がもっと有利であると詳しく話した。

こうして、山奥の情趣が漂う松山に素晴らしい温泉場と共にスキー場が建設されるようになった。

2021年3月、普通門周辺の川岸地区に出向いた総書記は、普通江畔に沿って近代的な段々式住宅地区を形成し、党と国家のために献身的に奉仕する各部門の労働革新者や功労者をはじめとする勤労者に贈りたいと言った。

総書記はふと、ここには金日成同志が利用していた邸宅がある、われわれはその区域に公共建築ではなく人民の住宅を建てようとする、そうするのがまさにわが党の政策である、と強調した。

そして、金日成同志の邸宅を撤去し、その区域に近代的な段々式住宅を建てて人民に贈ろうとすることを金日成同志が知るとおそらく喜ぶだろう、自分は金日成同志がわれわれを助けるためにわざとこのような素晴らしい場所を取って置いたのではないかという気がする、と切々と語った。

2022年4月に竣工した普通江川岸段々式住宅区は、このように人民の幸せのすみかとして打ち建てられた。

竣工の日総書記は、結局ここから撤去されたのは金日成同志の邸宅だけだ、今日自宅が撤去された代わりにそこに愛国者、功労者の幸福のすみかが建設されたことを知れば金日成同志も満足するだろう、一生涯あれほど愛した人民を温かく抱いたようで、いとも喜ぶだろうと言い、新居入りの住人たちを祝った。

そればかりではない。風光明媚な朝鮮東海の名勝—葛麻半島にある明沙十里に元山葛麻海岸観光地区が立派に立ち上がって、明沙十里が文字通り人波十里となった。

このように、今日、富強・繁栄を志向するわが人民の夢と理想は、総書記の導く朝鮮労働党によって実現しつつある。

15. 未来を愛せよ

子どもは未来の主人公である。

子どもが健全な思想意識と幅広くて深い知識、壮健な体力を身につけるように立派に育てるのは、国と人民の将来の運命を左右する重要な問題である。

2022年2月初め、朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議第14期第6回会議では朝鮮民主主義人民共和国育児法が採択された。

この法が採択されたことにはいわれがある。

2021年6月、朝鮮労働党中央委員会第8期第3回総会が行われた。

総書記は会議で、党の育児政策を改善する問題を会議の第6議題として提議した。

総書記は、祖国の未来である子どもたちを健康で丈夫に育てることより重要な事業はなく、数万金を投じてでもより改善された養育条件を提供しようとするのは、わが党と共和国政府の最重要政策、最高の宿願であると強調し、この地に生まれる子どもたち、育ち行く新しい世代が皆幼い頃から良い環境で満足に食べ、すくすく育つようになれば、今後20年、30年先にはそれだけ社会に一層躍動する生気と活力が溢れ、共和国の国力はより強くなるだろうと述べた。

わが国では、すでに1940年代の後半期から多額の国家資金を投じて各地に託児所や幼稚園を設けて運営することによって、子どもたちを社会的に保育・教育するシステムが確立されていた。

このシステムはその後、共和国政府によって1976年に幼児保育・教育法として法制化された。

この法の採択によって、全国的に託児所と幼稚園の数が日を追って増え、子どもたちの栄養学的状態はさらに改善された。

幼児保育・教育法はその後数回にわたって修正・補足された。

しかし、敵対勢力の執拗で悪辣な制裁と長期化する世界的な保健危機によって生じた経済的困難は、子どもたちの養育にも少なからぬ支障を来たした。

総書記は党中央委員会総会で、国家の負担で全国の子どもたちに乳製品をはじめとする栄養食品を供給することを党の政策として打ち出すことについて述べ、その実行のための具体的な課題と方途を示した。

実際、乳製品の生産土台が弱いわが国の実情で、国家の負担で子どもたちに乳製品を年中切らさず提供するというのは決して容易なことではなかった。

しかし、総書記は困難なときほど子どもたちに真心を尽くし、その愛の力で共産主義の未来に向かって力強く進むのが朝鮮革命の前進方式、発展方式とならなければならないと

し、子どもの成長・発育において一番重要な年齢期である託児所、幼稚園の子どもたちに国家の負担で乳製品を供給することを党の政策とするようにした。

そして、その実行のための具体的な課題と方途を示し、全ての幹部は子どもたちの実の親になった気持ちで託児所、幼稚園の子どもたちを十分に食べさせることに格別な関心を払い、党の育児政策の貫徹に実質的に寄与することによって、党と革命、祖国と人民への忠実性を検証してもらわなければならないと述べた。

総会の参加者は、総書記の提議を大きな衝撃と感動の中で審議し、当該決定書を全会一致で採択した。

総会以後、わが党の育児政策を貫徹するための実務的対策が講じられた。

朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議第14期第6回会議は、党中央委員会第8期第3回総会の決定を国家の法律として採択した。

4章61条からなる育児法は、朝鮮民主主義人民共和国幼児保育・教育法の附属法で、幼児栄養食品の生産と供給、子どもの養育条件の保障に関する秩序を規制している。

育児法は、品質の保証された原料を粉ミルクの生産に利用し、粉ミルクの生産工程と設備を近代化し、乳加工技術を発展させて国家規格に合う粉ミルクを生産する問題、託児所、幼稚園に必要な設備と楽器、玩具などの備品を円滑に保障

する問題、暖房及び炊事保障に必要な電力と燃料の保障問題などを主な内容としている。

育児法の採択により、全国の各地で子どもたちに乳製品をはじめとする栄養食品を定期的に供給し、立派な養育条件を与えるための活動がより力強く展開された。

各道・市・郡では乳加工場、飼料加工場を揃えた能力の大きい乳牛・ヤギ牧場を新設したり、能力拡張及び改築するための活動が推進されて、乳牛やヤギの数が増え、前年の同じ時期に比べて乳生産量ははるかに増えた。

また、全国の乳製品生産単位と供給単位に運輸機材、冷凍及び貯蔵施設、輸送容器など必要な条件が備えられて、子どもたちに衛生安全性が保証された新鮮な乳製品が定期的に供給されるようになった。

この措置は2022年の最大非常防疫期間にも変わらなかった。

2022年にわが国の子どもたちの間では呼吸器系疾患などの発病率が著しく減り、困難な状況下でも子どもたちの身長が伸び体重が増えて父母たちを喜ばせ、人々を感動させた。

この一つの事実を通じても分かるように、わが党の80年の歴史は祖国の未来を育んできた歴史である。

祖国の未来のためのわが党の活動で核心となるのは、教育を国事中の国事、祖国と人民の永遠なる明るい将来を保証する優先的な事業と見なし、新しい世代を多面的に発達した人材に育成するために教育条件と環境、教育内容と方法を絶え間

なく改善させたことである。

総書記は、わが国を教育の国、人材の国につくるための新世紀教育革命の目標とその実現のための課題と方途を明らかにした。

総書記が教育革命を起こすことを構想していた当時までも、わが国の教育活動は相応の水準で行われていなかった。

こうした教育部門の実態を放置しては、われわれが世界に向かってより高く、より早く飛躍することはできないことは言うまでもなく、他国に後れをとって科学技術の奴隷になる恐れがあった。

唯一の活路は教育活動を国事中の第一の国事とし、全党的、全国家的、全人民的な活動に転換させて強く推し進めることであった。

『新世紀の教育革命を起こしてわが国を教育の国、人材強国に輝かそう！』

総書記が2014年8月30日、朝鮮労働党中央委員会責任幹部への談話で示したこのスローガンには、新世紀の教育革命を起こす総書記の構想と意志が込められている。

総書記は数多くの著作と朝鮮労働党第7回大会で、新世紀教育革命の目標を明らかにし、わが国を教育の国、人材強国にするための明確な標柱を打ち立てた。

新世紀教育革命の目標は、全ての学生少年を社会主義強国建設の頼もしい担い手に育て、全人民科学技術人材化を実現

してわが国を教育の国につくることである。

総書記はまた、新世紀の教育革命遂行において堅持すべき原則とキーポイントを明示した。

新世紀の教育革命遂行において堅持すべき原則は、わが党の主体的な教育思想と方針を確固たる指導指針として徹底的に具現し、教育活動を朝鮮式に革新し、新たな高い段階へと発展させることである。

キーポイントは、中等一般教育を決定的に強化することである。

中等一般教育段階は、人々に最も基礎的な資質と能力を備えさせる時期である。

事物現象の本質と科学的原理をひとりでに理解する能力、どの分野でも自立的に活動することのできる資質、より高い教育を受けられる準備が小学校と中学校の段階で備えられる。

それゆえ、大学で有能な人材をより多く養成できる近道も、わが国を人材が溢れる国につくり上げるキーポイントも中等一般教育の質を高めるところにあった。

わが党は教員陣営を固め、朝鮮式の教育システムと教育方法、教育条件と環境を整えることを何よりも重要な課題として打ち出した。

総書記は、一般教育水準が低い基本原因を教員隊列を立派に整えなかったところにあると見て、教員陣営を固めること

を教育革命の優先的な課題として打ち出した。

わが党は教員陣営を固めるために、師範教育機関を立派に整え、教授活動の質を一段と高めるようにした。

師範教育機関の中でも教員大学を立派に整え、教授活動を強める活動を重視した。

2018年1月16日、改築された平壌教員大学を訪れた総書記は、次のように述べた。

「学生たちを一等級高い段階の教育活動を担当できる教養員、教員に育て上げること、まさにこれが教員大学が掲げて努力すべき目標です。師範教育部門では、これを重要な政策的課題として主力を注ぐべきです」

総書記は、教員大学の学生は教員の適格者を選抜すべきだ、教員は大学時代に学んだ知識を活用して社会主義強国の建設に寄与する一般の知識人とは違う、教員は自分が多くの知識を身につけるだけでなく、それを他の人に教える能力を備えなければならない、と言った。

続けて、人の能力はそれぞれ異なる、スポーツ選手にしても、選手生活の期間には実績をあげるが、監督になったら自分の役割を果たせない人がいる、そうかと思うと、一部の人は理論はよく知っていても実行力がない、と言った。

わが党の示した「科学によって飛躍し、教育によって未来を保証しよう！」というスローガンは、社会的に教育発展に一層深い関心を払うようにする上で重要な役割を果たしている。

それに従って、時代が要求する新しいタイプの人材を立派に養成できるように教育システムを完備し、教育事業に対する指導・管理を改善し、学生に気高い精神と創造力を培わせるように教育内容と方法を革新する一方、教育科学を発展させて全般的教育を新たな科学的土台の上に確固と引き上げるなど、教育条件と環境を根本的に改善している。

2024年の新学年度からは普通教育部門の数十の学校で選択科目制教育を試験的に行い、技術高級中学校（技術班）を増設・運営している。

これは、党中央委員会第8期第9回総会で教育部門に提示された、国の教育を先進国水準に引き上げるという課題を実現するための活動の一環であった。

学校で原理教育に力を入れ、学んだ知識を実践に活用できる思惟能力を育てる活動をキーポイントとしてとらえていくようにし、優れた素質を持った生徒の才能を積極的に啓発させながらも一般教育を強化する原則に立って、国の教育が全ての生徒を多面的な知識と高い文化的素養を身につけた有能な人材に育てる方向へしっかりと志向されるようにした。

高等教育部門では、境界科学と先端科学分野を開拓し、欠けていたり立ち後れた工程・技術を先進レベルで開発・更新できる一等級高い人材を質的に育てられるように博士院の教育水準を高めるための活動が強力に準備・開始された。

これとともに、教育部門の物質的・技術的土台を強化する

ための活動に変化がもたらされた。

全国的に教育条件と環境を一新するための活動が力強く繰り広げられる中、著しい成果が次々と収められた。

2024年11月末まで全国的に340余の学校と780余の分校、150余の幼稚園がモデル水準に新築または改造・近代化され、多機能化された教室は計画より2000余もさらに増え、180の分校にネットワークが構築されて、教育の質を一段階引き上げることができるようになった。

これは、全ての人が教育の発展のために常に苦心し、一貫した努力を傾注するとともに、全党的、全国家的、全社会的に教育を重視し、積極的に支援する気風をわが国家特有の国風として強化・発展させるという党の意図を確実に実現しようとする全国の幹部と勤労者の高揚した愛国的熱意がもたらした高貴な成果であった。

全国の全ての生徒に制服と靴、かばん、学用品などを国家の負担で供給することを党政策、国家の施策として定めたわが党の措置によって、わが国では困難な状況の下でも、毎年全国の全ての児童・生徒・学生に新しい制服とかばん、学用品が供給されている。

2015年4月1日、全国の小学校1年生の制服姿が人々の視線を引いた。

童心に合わせてつくった制服を着た可愛い児童・生徒の姿は、人々に自分の幼年期と共に、自分の暮らしている社会主

義制度の優越性を一層深く感じさせた。

2021年12月に開かれた朝鮮労働党中央委員会第8期第4回総会では、全国の児童・生徒・学生に国家の負担による制服と学用品の供給をわが党の一貫した政策として規定し、新しい形態の制服とかばんを全ての児童・生徒・学生に漏れなく供給するという課題を提示し、これを実行するための重大措置を講じた。

2022年の新学年度を迎えて、全国の全ての新入生に新しい制服や靴、かばんや学用品などが一式揃えて供給された。

学生用の制服とかばん、靴を生産する国家的なシステムが稼働するとともに、都市と農村、山村、島村の全ての児童・生徒に漏れなく供給するための社会主義的施策を実行できる制度的保証ももたらされた。

以前には商業網を通じて供給されていたが、2024年からはそれぞれ名札のついた制服とかばん、靴を包装して学校で供給するシステムが確立した。

特に、供給する前に各学校に設けられた試着室で身に着けさせてみ、洋裁専門家が現地に出向いて欠陥を是正することを伴わせて、皆が体にぴったり合い、見栄えのする制服を着るように細心な措置が講じられた。

金正恩総書記は次のように述べている。

「昔から子どもを一人育てるのには五万の手間がかかると言われています。しかし、われわれには数百万の子ども

がいます。これはわが党の子ども福だと言えます。私は、われわれの子どもたちを育てるのに億万の手間がかかるとしても、それを苦労ではなく幸福だと考えます」

総書記の愛によって、ミンドゥレ・ノート工場が、全国の幼稚園の園児と各学校の児童・生徒・学生に供給するノートを専門に生産する工場として建てられた。

総書記は、自ら工場の名称を「ミンドゥレ・ノート工場」と命名した。

2016年4月18日、総書記はたいそう満足して言った。

「ミンドゥレ・ノート工場は、子どもたちと生徒・学生に与えるノートを専門に生産するわが党の宝の工場です」

総書記はこの日、ミンドゥレ・ノート工場で生産されるノートは価格も安く定めるべきだ、平壌から遠く離れた地方にはノートを列車で輸送し、南浦市をはじめ近い所にはトラックで運送し、その列車やトラックにはミンドゥレ・ノート工場のマークをつけるべきだ、と言った。

今日わが国には、教育発展の新しい時代が開かれている。

2024年12月の朝鮮労働党中央委員会第8期第11回総会拡大会議では、第4の議題として「国家の教育土台を強化するための一連の措置を実施することについて」が採択された。

会議では、創造と変革の振幅が大きくなるほど、課された革命課題が膨大であるほど、教育を常に第一義的なこととして優先権を付与し、教育事業に対する全社会的な関心をさらに高め、国家の支援と投資を引き続き増やさなければならないと強調された。また、国家が全面的に責任を持ち、教員と生徒・学生に立派な活動条件、学習条件を提供する問題、今後10年以内に全国の全ての学校を一新する大胆な目標を立て、根気よく推し進める問題など、国の教育土台を強めるための問題が討議・決定された。

祖国の未来を育む事業を自分の第一の信条、国事中の国事とするわが党によって、今日わが人民は、国の遠い将来を楽観しながら、次世代のために全てを尽くしている。

16. 人民の運命に責任を持って

わが国には昔から「火事の跡には残りがあっても、大水の跡には残りがない」という格言がある。

大水の危険性と破壊ぶりを形象化した言葉である。

しかし今日、わが人民の間では「朝鮮労働党があれば、いかなる自然の狂乱も怖くない」という言葉が通用している。

災難を被れば不幸の感情が伴うものである。

特に自然災害を被れば、それについで懐かしいわが家と家財、家族を失って路頭に放り出されるようになった人々の間では悲観と絶望がつきまとい、それに伝染病まで発生するものである。

しかし、自然災害を被ったわが国の被災地では、そのような光景が見られないばかりか、むしろ相反する光景が現出して人々を驚かせた。

それは大災難に見舞われた人たちの理解しがたい光景であった。

わが国の罹災民は、朝鮮労働党と共和国政府が自分たちを見守るであろうという確信、それから表出される希望と楽観に満ちているのである。

彼らの自信と楽観は根拠のないものではなかった。

2020年8月5日、雨季前線の影響を受けて連日降った豪雨により、黄海北道銀波郡大青里地域で水路堤防が決壊しながら1階建ての730余棟の家屋と600余ヘクタールの水田が冠水するなど大きな被害が発生した。

2020年8月7日、金正恩総書記は自ら乗用車を運転して黄海北道銀波郡大青里に出かけ、泥土に覆われた被災地を視察した。

この日、現地指導を終えて離れるとき、総書記の乗用車が水田に滑り降りた。

それを聞いて農場員たちが駆けてきて体で車体を支え、車を道に引き上げた。

彼らは涙を流しながら、ここがどこだと思ってお出でになったのですか、こんな険しい道を歩んだことを知ると、全国の人民がわが大青里の人たちを許しません、と喉を詰まらせて言った。

総書記はそんな彼らに、被害を被った大青里の人々を助けようと来たのに、かえって助けを受けた、本当に済まない、と重ねて言った。

わが党はこのような為民献身の愛を抱いて、銀波郡の党、政権機関、勤労者団体、社会安全機関をはじめとする郡級の指導的機関が、郡党委員会や郡人民委員会などの事務機関や公共建物、個人住宅に家を失った住民を寝泊りさせ、慰めて生活を安定させるよう手配した。

また、国務委員長の備蓄穀物を解除して罹災民に世帯別に供給し、寝具や生活用品、医薬品などの必須物資を早急に保障して速やかに定着させるようにした。

党中央委員会の当該部署と人民武力省の幹部で被害復旧活動指揮部を設置し、指揮部は現地で被害状況を具体的に把握しながら被害復旧に必要な資材と陣容編成を正確に見積もって報告するようにする一方、中央の設計陣容と強力な施工及び建設陣を派遣して水害を被った銀波郡大青里の800世帯の農家をモデルとして新しく建設するための工事を短期間に最高のレベルで終えるようにした。

2022年5月、全国の人民が2年数カ月間も守ってきた防疫障壁に穴が開く国家最重大事件が起きたときのことである。

建国以来初めての大動乱の中で、誰もが不安と憂慮で気をもむだけで何の対策も立てられずにいたとき、総書記は深夜、平壌市の薬局を訪ねた。

夢にもお会いしたかった総書記を自分たちの職場に迎えたが、病を患ったばかりの販売員たちは、総書記が自分たちを訪ねてきたその瞬間だけは、総書記の側から離れようとした。

しかし総書記は、彼女たちの近くに、人民の近くにさらに近寄った。

総書記は医薬品の供給と保管状況を確かめ、住民の需要の多い医薬品は何であるかを具体的に聞いた後、随員たちに医薬品供給システムの盲点を正し、医薬品運搬に関する強力な

実行対策を講じるようにした。

こうした総書記の愛により、わが国では最大非常防疫システムを稼働させたときから3カ月足らずの期間に、悪性伝染病による全ての発熱者を全快させる、世界の保健史にかつてない奇跡が生み出された。

2024年7月末、わが国の北部国境地帯に記録的な豪雨が降って甚だしい被害が発生したときも、わが党の人民に対する献身により、涙なしには見られない現実が繰り広げられて万人を感動させた。

豪雨に見舞われて、平安北道新義州市と義州郡一帯の複数の島の地域で数千人の住民が浸水危険区域に孤立する重大な危機が造成されたとき、わが党は即時に党と政府、軍の指導幹部を現地に急派し、朝鮮人民軍空軍のヘリコプターと海軍や国境警備隊海上警備編隊の各種の救助艇を住民救出戦闘に迅速に投入した。

10余機のヘリコプターが連続的な往復飛行で住民を救出していたときであった。

救出された人民は、飛行場で自分らを待っている総書記を見る瞬間、驚かざるを得なかった。

生死の岐路に立たされ、もう落胆していた自分たちが人民軍によって救出されるときでさえ、自分たちを救助するために総書記が風雨の激しい飛行場に長時間も立っているとは全く知らなかった。

ある住民は、当時の心情についてこう言った。

「ヘリコプターから下りる私たちは、それでも雨に濡れまいとレインコートやビニールシートをかぶっていました。

ところがわれらの元帥さまは、そのまま雨に打たれながら立っておられるのではないでしょうか。どれほど人民のことを気遣っていたら、激しい雨の中でもあんなにそのまま立っておられるのかと思うと、涙がどっとこぼれました」

あまりの感激に膝を突いてお辞儀をしたい気持ちなのに、かえって総書記が先に被災地域の人民に向かって温かいあいさつを送ったのだから、みんな涙を流した。

こうして4200余名の住民が無事救出された。

2024年8月8日、総書記は家を失って野宿している義州郡の罹災民が臨時に生活している仮設テントを訪ね、彼らに会って温かく慰めた。

ついで総書記は、被害復旧と関連した党と政府の立場を宣明し、罹災民を慰める重要演説を行った。

総書記は演説で、水害地域という環境下で最も難題となっているのは、子どもと生徒の生活と教育問題だとし、被害復旧期間に平安北道と慈江道、両江道の罹災民家族の子どもや生徒を皆平壌に連れていき、国家が全面的に負担して、安全で便利な環境で保育と教育を受け持って提供する非常システムを稼働させようとしている、と言った。

総書記は、今多くの国や国際機関がわが国に人道支援を提供する意向を表明していることに謝意を表し、われわれが国家活動の全ての領域と工程において第一としているのは、人民に対する固い信頼と徹底的な自力に依拠して問題を処理する方式である、今回の被害復旧で党中央と政府が依拠しているのは、一にも、二にも、十にも、わが人民の愛国的熱意と勇気、わが国家の潜在力である、と述べた。

そして、われわれはいつもと同様、自力に対する確信を何よりも大事にし、人民の力と知恵を引き出して全ての問題を解決していくだろうし、今後も引き続きこのように、わが国家の力を不断に増大・強化しながら自分の力と努力をもって自分の前途を切り開いていくだろうと言った。

総書記は、被害復旧に国家的な総力が集中され、計画した事業が共和国政府の統一的かつ強力な指揮の下で円滑に推進されている以上、基本的に、この原則に一貫するだろうとし、愛するわが人民とわれわれの未来のために、われわれが自ら決定し担った時代的課題、歴史的課題を必ず完遂するために、党と政府はいかなる挑戦にも喜んで立ち向かい、必ず忠実な奉仕と立派な結果をもって人民の信頼に報いるだろうと述べた。

こうして1万3000名の被災民が党中央の特別賓客として平壌に招かれ、住宅が建設される時まで首都平壌の4・25旅館であらゆるサービスを受けながら不便のない生活を送る夢のようなことが起こるようになった。

2024年8月15日、平壌に到着した被災民が4・25旅館に宿を取った。

総書記は自ら宿所に出向いて被災民を温かく迎え、歓迎演説を行った。

総書記はまず、党と政府の措置を信頼し応じてくれた各地域の被災民に謝意を表し、平壌で会えた喜びを披歴した。

総書記はここに席を共にした高齢者と女性をはじめ水害地域から来られた全ての人が、愛する母なる祖国の首都で気楽に生活しながら楽しく祝日を過ごし、滞在期間に常に印象に残る意義深い時間を送るよう願うと言って、歓迎演説を終えた。

歓迎演説を終えた総書記は、子どもたちの食事室に足を運んだ。

そして、甘えるように取りすがる子どもたちを温かく抱き、みんなが平壌滞在の期間に何の心配もなく思う存分恩恵を享受しながら健康な体で楽しい日々を過ごすことを改めて祈願した。

総書記は8月16日、再び4・25旅館に赴いて水害地域の児童・生徒のための教育準備過程を確かめた。

当時、4・25旅館には水害地域の児童・生徒のための臨時教室が設けられ、平壌市内の小学校、中学校、就学前教育機関の教員、教養員を網羅する機動教育隊が組織され、新学期の授業準備が本格的に進められていた。

総書記は、4・25旅館に到着して水害地域の児童・生徒のための新学期授業準備の一環として行われた小学班児童の模範授業を参観した。

総書記は、教育設備と教具・校具の準備状況を具体的に確かめ、水害地域の児童・生徒が利用することになる学用品も見、旅館内に児童・生徒のために臨時に設けた初級班・高級班教室も見て回った。

この日、わが党と政府の特別措置によって首都に来て勉強することになる水害地域の園児と児童・生徒に、総書記が送った制服と学用品、かばん、靴をはじめとする贈物が伝達された。

被害地域の子どもと生徒、高齢者、病弱者、戦傷栄誉軍人、幼児の母親が首都平壌で国家的に保護され恩恵を受けながら何の心配もなく楽しい生活を送り、陽徳温泉文化休養地や松涛園国際少年団野営所などで社会主義文明を思う存分享受し、楽しい野営生活を送る伝説のような話が生まれるようになった。

わが国での被害復旧は、単なる復旧ではなく、一つの変革過程となっている。

総書記は、豪雨が降りさえすれば「貯水池」となってしまうこの地域の恒常的な脆弱性を克服するために、水利工学部門と設計部門が協同して科学的に検討し、現実的な対策を講じるようにした。

それだけではなかった。

被害復旧活動が単に自然災害の悪結果を癒す問題ではなく、党の遠大な新時代の農村革命綱領を実現する非常に重要な事業として行われた結果、永遠に水害という言葉を知らないように被害地域を改変させて「農村文化都市」として建設した。

それゆえ、朝鮮人民は歌謡『党は私の母』を愛唱し、朝鮮労働党を母と呼びながらたたえている。

17. 可能か不可能か

成川郡は全国の関心を集めるほどの大規模の工業基地も、大きな田野もない平安南道の中山間地帯である。

しかし、2024年に多くの人がこの郡に詰めかけ、ここでの民心の熱波が各地へ拡がりながら全国は激動のるつぼと化した。

2024年2月28日、地方発展の新しい歴史に成川郡がはっきりと記されたのである。

成川郡地方工業工場の着工式場で「愛する成川郡民の皆さん、お元気ですか」という金正恩総書記の温かいあいさつに、ここに集まった群衆は皆感涙にむせんだ。

この地に生まれた人なら、首都や地方、都市や山村のどこに住もうと等しく裕福かつ文化的な生活を享受すべきであり、また必ずそうしようというのが新しい地方発展政策の核であると言った総書記の言葉は、成川郡の境を越えて全国を激しく揺さぶった。

2024年1月15日、平壌では朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議第14期第10回会議が開かれた。

総書記は会議で、『共和国の興隆・発展と人民の福祉増進のための当面の課題について』と題する綱領的な施政演説を行い、社会主義建設の全面的発展のための重要課題とその実

行において堅持すべき原則的問題を提示した。

特に重要なのは、首都と地方の格差、地域間の不均衡を克服して人民生活を向上させるために、1年に20の市・郡に地方工業工場を打ち建て、10年内に全国の地方工業工場を新時代の要求に即して新設するという新しい「地方発展20×10政策」が宣言されたことであった。

それから10日後の1月24日に行われた朝鮮労働党中央委員会第8期第19回政治局拡大会議では、「地方発展20×10政策」を強力に推し進めるための対策的問題が討議・確定された。

総書記は、政治局会議を通じて建設に必要な資金と労働力、資材の保障のための党的・国家的措置を講じ、地方工業工場の規模と生産能力を正しく選定する問題、工場経営に必要な技術者、技能工を先を見通して養成する問題、原料拠点の造成など合理的かつ実現可能な方案と発展志向的な方途を具体的に示した。

全党の党員と全人民、人民軍将兵の大きな期待と関心の中で行われた党中央委員会政治局拡大会議は、人民大衆第一主義を最高綱領、基本闘争原則とするわが党の革命的な本態と人民的な性格を一層明確にし、人民の長年の宿望を叶えるための歴史的な地方振興の活路を開いた特記すべき政治的出来事であった。

わが共和国の発展史において「地方発展20×10政策」のように地方工業の全面的・均衡的・急速な上昇・発展という革

命的な政策が確定・明示されたのは初めてであった。

しかも新時代の農村革命綱領の素晴らしい設計図に従って農村住宅が全国的な規模で毎年数万世帯ずつ建てられている中、それとは別に毎年20の市・郡に地方工業工場を建設する新しい地方発展政策を推し進めるというのは決して容易なことではない。

なすべきことは膨大で、状況は困難であるが、わが党は人民のために全ての面で都市と農村、中央と地方の格差を縮め、共に発展する文化的な社会建設を進め、特に地方人民の福祉を増進させ、権益を保護し、地方と農村の生活環境を改善することを、もうこれ以上引き延ばすことも顔を背けることもできない最優先重大事、必ず実行すべき政治闘争課題として提示した。

地方人民に裕福かつ文化的な生活を享受させるためにいつも心を砕いてきた総書記は、2021年に行われた第1回市・郡党責任書記講習会で新しい地方発展期を開くという構想を示し、苦心と苦悩でつづられた献身の道程で政策の方向を定立し、全国の全ての市・郡の物質・文化生活発展の可能性を確かめた上で地方工業工場を完全に一新させる偉大な革命戦略を提示した。

「地方発展20×10政策」は人民の福祉増進を第一の重大事、国事と見なすわが党にとって実に重大な意義を持つ政策である。

それゆえ、総書記は施政演説で、われわれは世紀的な宿願を

達成する実際の大きな措置を取ることによって、わが党の遠大な社会主義強国建設を力強く推し進めるべきであり、このような重い責任感を自ら担って、自分の責務に当然自信を持って挑戦すべきであり、このような実際の変化をもたらすことによって、人民の期待に必ず応えるべきだと指摘した。

また、わが党と共和国政府の政策を絶対的に支持し、誠意を尽くして実行する人民の期待に比べれば、今までの成果はあまりにも少なく、われわれには厳しい困難に耐えながら傾けてきた人民の献身と努力を無駄にする権利がない、われわれは国力が強くなり、自信が大きくなるほどわが人民の歩んできた試練に満ちた道程を片時も忘れず、発奮しまた発奮すべきであり、近い将来に人民と約束した裕福かつ文明的な時代を必ず開くべきだ、と強調した。

2024年2月7日、総書記は「地方発展20×10政策」を進める初年から各地に本格的に新設する地方工業工場の具体的な建設方向を確定づけるために、テストケースとして建設した金化郡地方工業工場の近代化と経営の実態、工場別建築様式を今一度検討すべく現地に出かけた。

2021年に近代的に建設された金化郡地方工業工場では経営がスムーズに行われており、その製品の質も高いので、郡内の住民の物質生活水準のさらなる向上に実際に寄与している。

食品工場と日用品工場、製紙工場を見て回りながら実態をつぶさに確かめた総書記は、是正すべき一連の問題を指摘した。

総書記は、食品工場など地方工業工場の建築設計が工場の特性と用途に合わせて実用的な見地から合理的になされていない欠点をはじめ産業建築の設計について具体的に指摘した。

また、「地方発展20×10政策」を進めるにあたって当該部門が再考すべき問題、審議をやり直して決定すべき問題を具体的に指摘した。

総書記は、新しい地方発展政策の実行において金化郡地方工業工場の近代化経験を機械的に踏襲・模倣するのではなく、革新的かつ創造的な姿勢で絶え間なく新しいものを受け入れ、欠点を克服しながら責任感を発揮する問題、製品分析室を規定通り整え、製品検査システムを確立するなど品質の向上に引き続き力を入れる問題をはじめ、地方工業工場を建設する上で守らなければならない原則的要求と重要課題を明示し、金化郡地方工業工場の経営で提起される課題も指摘した。

このようなしっかりとした準備と経験的な段階に基づき、新しい地方発展政策の実行のための初年の活動の一環として、2024年2月28日、平安南道成川郡地方工業工場建設の着工式が行われた。

わが党は、この問題の可能性いかんを論じる前に、無条件やり遂げるべき事業として打ち出した。

敵対勢力の挑戦が厳しい中でも、わが党は国家防衛の第一線に立っている人民軍将兵を新しい地方発展政策の貫徹の前列に立たせた。

わが党と国家の実行する政策について全人民が熱烈に呼応し、自分の手で必ず幸福かつ文化的な生活を創造する決意を固めた。

2024年8月、地方工業工場建設場を現地で指導した総書記は、地方工業工場建設と共に保健医療施設と科学技術普及拠点、穀物管理施設の建設を並行させるという構想を提示した。

その数日後の地方発展事業協議会で、先進的な市・郡病院と科学技術普及拠点、穀物管理施設を建設する上で堅持すべき諸原則を明らかにした総書記は、共和国創建76周年に際して行った演説で、科学技術普及中心を多機能化された複合型文化中心として建設することを提案した。

このように、人民のためなら重荷の上にまた重荷を担い、限りない労苦を重ねる総書記の指導の下、全国を人民の理想郷にするための地方変革の壮大な大業を成功裏に実行しうる科学的な作戦図と明晰な方法論がもたらされた。

2024年7月15日、咸鏡南道新浦市豊漁洞地区で行われた地方発展事業協議会では、海岸沿線地域の市・郡が海洋資源を効果的に開発・利用するための実践的課題と方途が提示された。

わが党の為民献身は誇り高い初の実体をもたらした。

2025年2月まで20の市・郡の地方工業工場が相次いで竣工したのである。

それと同時に、新年度の別の地方工業工場着工式と共に、

新しい保健医療施設と複合型文化施設の建設が本格的に進められている。

このように地方の同時的・均衡的発展と全国人民の生活向上を目指す「地方発展20×10政策」を国策として策定し、それを立派に実行するためのわが党の闘争には限りがないのである。

18. 偉大な朝鮮人民万歳！

金正恩総書記が2015年10月の朝鮮労働党創立70周年慶祝閲兵式及び平壌市大衆示威行進で行った演説と、2020年10月の朝鮮労働党創立75周年慶祝閲兵式で行った演説には、わが党が何によって前進し、それほど強く、それほど尽きない生命力を持つことができたかということに対する解答がある。

2015年10月10日、朝鮮労働党創立70周年慶祝閲兵式及び平壌市大衆大会で総書記は次のような演説を行った。

「……

同志の皆さん！

今日、われわれは勝利者の大きな誇りと歓喜に満ちて、朝鮮労働党の党旗が青空高く翻る10月の祝日を迎えました。

10月10日は、わが祖国と人民にとって、自分の運命を責任を持って導いてくれる真の革命の前衛隊、戦闘的参謀部の誕生を祝う意義深い革命的祝日です。

……

わが党が70年の長きにわたり、いかなる狂風にも微動だにせず勝利と栄光のみをしるし、革命を前進させることができたのは、わが党を運命の全てとして信頼し従い、党の偉業を忠実に奉じてきた偉大な人民がいたからです。

わが党の歴史はすなわち人民が歩んできた道であり、わが党の力はすなわち人民の力であり、わが党の偉大さはすなわち人民の偉大さであり、わが党が収めた勝利は偉大な人民の勝利です。

革命の厳しい各年代に、わが党に無限の力と勇気を与え、強靭な意志によって歴史の険しい風波を切り抜け、共に泣き、共に笑い、常に党と運命を共にしてくれた愛する全人民に、党創立70周年を迎えて、朝鮮労働党を代表して腰をかがめて深い感謝のあいさつを送ります。

……

同志の皆さん！

朝鮮労働党の歴史は偉大な金日成同志と金正日同志の指導の下に、人民の運命に責任を持ち、朝鮮革命を勝利に導いてきた誇るべき行路です。

金日成同志と金正日同志は、史上初めて、わが党を人民のために、人民大衆と一体となって闘う不敗の革命的党、真の指導的政治組織として建設しました。

わが党は、その赤旗にハンマーと鎌、筆を記したときから一時も人民と離れたことがなく、常に人民を天のごとく見なして革命を前進させてきました。

歴史には朝鮮革命のように、最も困難かつ複雑な状況の下で一歩一歩革命の進退を決する厳しい試練と逆境を乗り越えてきた例はありません。

世界制覇の野望に燃えるアメリカ帝国主義は創建されて間もない新生朝鮮に残酷な戦争を強い、困苦欠乏に耐えて廃虚の上にようやく復旧すると、また新たな侵略の脅威をもたらし、人民経済を発展させようとすると前代未聞の制裁と封鎖によって行く手をさえぎりました。

しかしわが党は、いかなる困難に直面しても、常に確信を持って突進し、この地に大転変の新しい歴史を開き、偉大な勝利のみをもたらしました。

歴史の突風の中でわが党が信頼したのは、ただ偉大な人民だけであり、人民は朝鮮労働党のまたとない支持者、助言者、援助者でした。

過去の世界革命運動史の教訓は、政権党だからといって、党の歴史が長いからといって、おのずと指導的権威と戦闘力が強まり、革命を立派に導くのではないことを示しています。

今日、わが党が備えている高い権威と積み上げた大きな業績は、革命それ自体を人民に対する愛情と信頼であると定式化し、それを党建設と党活動に確実に具現してきた、金日成同志と金正日同志の卓越した革命思想と非凡な指導によってもたらされたものです。

人民の心の中に深く根を下ろし、ひたすら人民のために献身的に奉仕したところに、わが党が歴史の厳しい風波にも動揺することなく革命の方向舵をしっかり握り、自主、先軍、

社会主義偉業を力強く導いてきた根本的秘訣があります。

朝鮮労働党は人民大衆と渾然一体となった不敗の党です。

革命指導の全期間、わが党は自らの針路を定めるたびに、難局に直面するたびに、まず人民を訪ねて人民の素朴な声に耳を傾け、人民の真心から無限の力を得ました。

全知全能の人民大衆の創造力は、わが党が長年にわたる立ち遅れと貧困が支配していたこの地に自主、自立、自衛の強大な社会主義のとりでを築き、帝国主義の悪辣な封鎖の中で強国建設の新時代を切り開いた奇跡の源泉でした。

わが党にとって、人民の政治的生命と物質・文化生活を全面的に責任を持って見守ることは、一時もおろそかにできない第一の重大事、本分となってきました。

国の運命を決する最悪の試練の中でも、千辛万苦に耐えて人民の幸せのための貴重な種と社会主義の財貨をもたらし、人民的施策を変わることなく実施してきたのは、人民の運命に責任を持つわが党だけが施すことのできる人民愛の政治です。

わが党が常に人民大衆を生命の根、無限の力の源泉と見なし、人民の利益を最優先、絶対視してきたので、人民は党を心から運命の灯台、母と信頼して従うようになり、この地には一心団結の誇るべき大花園が展開されるようになったのです。

……

同志の皆さん！

朝鮮労働党は朝鮮人民の全ての勝利の組織者であり導き手です。

朝鮮労働党のこの上ない栄光と不敗さは、金日成同志と金正日同志を永遠なる領袖として高く仰ぐことにあり、全朝鮮人民の絶対的な支持と信頼を受けることにあります。

わが党が朝鮮を導いて明るい未来に向かって力強く進むためには、名実共に偉大な金日成・金正日主義党の革命的性格を変わることなく固守し、全面的に輝かせていかなければなりません。

偉大な金日成・金正日主義は本質的に人民大衆第一主義であり、わが党の存在方式は人民に奉仕することです。

わが党は、史上初めて人民重視、人民尊重、人民愛の政治を施し、終生人民のために全てをささげた金日成同志と金正日同志の高貴な志を体し、今日も明日も、永遠に人民大衆第一主義の聖なる歴史をつづっていくでしょう。

わが党は、党建設と党活動をひたすら金日成同志と金正日同志が教えた通りに行うでしょうし、党活動全般に人民大衆第一主義を確実に具現して全党が人民に滅私奉仕することによって、党の戦闘力をさらに強化していくでしょう。

朝鮮労働党の真の姿は、党が築いた祖国の姿にあり、常に幸せを享受する人民の姿にあります。

……

全ての党員の同志たちに呼びかけます。

共に偉大な人民のために滅私奉仕しましょう！

不敗の党、朝鮮労働党の周りに一心団結した偉大な朝鮮人民万歳！」

総書記はまた、朝鮮労働党創立75周年慶祝閲兵式で行った演説で次のように述べた。

「……

世界に、われわれのように自分の党の誕生日を全人民が喜びの祝日として、大慶事の日として盛大に祝う国はないでしょう。

全国の心が熱く渦巻く、このように胸が躍り、歓喜に満ちる夜、この席に立ってみると、全人民に何から話したらよいのか分かりません。

わが党が歩んできた栄光に満ちた75年の歴史を一つ一つ振り返るこの瞬間、今日この席に立てば何から話そうかとあれこれと考えてみましたが、真に人民に打ち明けたい心のうち、真情は『ありがとうございます！』の一言に尽きます。

何よりもまず、今日このように、皆が、全ての人民が無病息災であることを本当にありがたく思います。

このことを必ず話したいと思っていました。

一人の悪性ウイルス被害者もなく、皆が健康であってく

れて本当にありがとうございます。

世界で猛威を振るっている悪性の伝染病からこの国の全ての人をついに守り抜いたというこの事実、わが党が当然なすべきことであり、当然の成果と言うべきなのでしょうが、なぜか、守り抜いたというこの感激の喜びに目がかすみ、皆さんの健康な姿を見ると、『ありがとうございます』という言葉以外に言うべきことがありません。

世界が驚かざるを得ない今日のこの勝利は、わが人民自らもたらした偉大な勝利です。

わが党にとって一人一人の人民の生命は何よりも貴重であり、全人民が健在で健康であってこそ、党もあり、国家もあり、この地のあらゆるものがあるのです。

……

それでわが党は、国情についてありのままに話せばいつも敢然として立ち上がる人民を信じ、人民に依拠して国難を打開しているのです。

わが人民は常にわが党をありがたがっていましたが、本当に感謝のあいさつを受けるべき主人は、ほかならぬ偉大なわが人民です。

わが人民は75星霜、ひたすらわが党に従い、聖なる革命偉業を自分の血と汗を惜しみなくささげて守ってくれました。

最も困難で試練に満ちた革命の道を踏み分けてきたわが

党が、この血のにじむ道程を勝利と栄光によって織り成すことができた主な秘訣は、ほかならぬわが人民が党を心から信頼し、従い、わが党の偉業を守ってくれたからです。

……

この世のなんぴとも望むこともできない最上最大の信頼があったがゆえに、私は滅私奉仕の使命感と意志を固め、無数の挑戦に躊躇なく立ち向かうことができたのであり、戦争をも覚悟しなければならない決死の戦いにも臨むことができたのであり、史上初めての大災難にも強く対処することができたのです。

このような立派な人民に仕えて闘うことを無上の光栄に思います。

私は、わが人民の大いなる信頼を守る道で、たとえ全身が引き裂かれ、粉々になろうとも、その信頼だけは命をささげてでも無条件に守り、その信頼にあくまで忠実であることを今一度この場を借りて厳かに確言するものです。

……

今残っていることは、わが人民がこれ以上苦労をせず、裕福で文化的な生活を思う存分享受できるようにすることです。

わが党は、人民の福祉を増進させ、より多くの恩恵を施す優れた政策と施策を変わることなく実施し、絶えず拡大していくでしょうし、人民が夢見る興隆・繁栄の理想社会

の実現を最大限に早めていくでしょう。

……

同志の皆さん！

われわれは強くなったし、試練の中で一層強くなっています。

時間はわれわれの側にあります。

共に、社会主義の輝かしい未来に向けて、新たな勝利を得るために力強く前進しましょう。

終わりに、全人民が無病息災であってくれたことに対して今一度感謝のあいさつをささげます。

そして、変わることなくわが党に信頼を寄せてくれる真情に、心から感謝をささげます。

偉大なわが人民万歳！」

固い団結と自主の精神をもって、人民に対する滅私奉仕の精神をもって80年を引き継いできたわが党の歴史がこの力強い万歳の声にこもっている。

むすび

朝鮮労働党が歩んできた長きにわたる道程は、すなわち金日成主席と金正日国防委員長、金正恩総書記がこの国の人民を差別なしに大事に抱き、愛と信頼、徳望で見守り、育て、一つに結束させた為民献身の歴史、一心団結の歴史である。

党創立の初期から今日に至る長い間、朝鮮労働党がいかに幾多の困難を切り抜けて自分の理念と革命的性格をしっかり固守し、朝鮮民主主義人民共和国と朝鮮人民を正しい勝利の道へと導いてきたかということに対する最も明白な解答を、まさにいささかの脱色や変色もなく力強くはためく朝鮮労働党旗からそのまま見出すことができる。

人民を天のごとく見なして全人民を団結させ、その力をもって将来を開拓していくのは、この世が十回、百回変わり、千万年歳月が流れても変わることのない朝鮮労働党の永遠なる信念である。

朝鮮労働党はこの信念をもって、祖国の興隆・繁栄と人民の幸福のために80年の長きにわたって闘争し、前進してきた。

徹底した継承と斬新な革新が結合した朝鮮労働党の80年であり、今後の未来である。

総書記は2024年5月21日、新時代の党幹部養成の最高学府として立派に立ち上がった朝鮮労働党中央幹部学校の竣工式を記念して行った綱領的な演説『党創立の理念と精神に忠実な新時代の党幹部を育成せよ』で、「党創立の理念と精神を継承して新時代の党建設の偉大な全盛期を切り開こう！」というスローガンを提示し、歴史と業績が重なり積もるほど聖なる初のページを大切にし、変わることなくしっかり受け継いでいくこと、これがすなわち革命的党の不敗さの保証であり、執権の法則であると言明した。

人民大衆の中にしっかり根を下ろした党、人民大衆の絶対的な支持と信頼を受ける党はいつも勝利する。

朝鮮労働党の指導によって一層幸せになる輝かしい将来を見通し、わが人民は世界に向けて声高く叫ぶ。

「朝鮮人民の全ての勝利の組織者であり導き手である朝鮮労働党万歳！」

党創立の理念と精神の下に80年

編　集 ： 尹英日

翻　訳 ： 金正蓮、李鮮日

発行所 ： 朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社

発行日 ： 2025年10月

ㄱ-250880385363

E-mail: flph@star-co.net.kp
http://www.korean-books.com.kp

ISBN 978-9946-0-2478-3